

小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2019. 3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者・既往報告は次のとおりである。
【二ツ梨豆岡向山窯跡群】（平成 17～21 年度）
[調査地] 石川県小松市二ツ梨町
[調査原因] 個人農地
[調査面積] 2,267m²
[発掘調査] 2005. 7.21～2005.10.17 (260m²)
2006. 9.19～2006.12.12 (640m²)
2007.10. 2～2007.11.30 (280m²)
2008. 9. 1～2009. 3.18 (487m²)
2009. 9. 1～2009.12.11 (600m²)
[調査担当] 大橋由美子
発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。
[既往報告] 遺構編：2015. 3.31 刊行（『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』）
遺物編 1：2017. 3.31 刊行（『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』）
4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 29・30 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、一部を田邊朋宏氏に協力いただき、ほかは執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第 I 章の執筆を宮田 明が担当し、第 II 章（付章）・第 III 章の執筆を横幕 真が担当した。全体の編集は横幕が行った。執筆に際し、望月精司氏に御教示をいただいた。
7. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高 (T.P.) で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として『石川県遺跡地図』の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目 次

I	位置と環境	1
II	二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2（遺物編 2）	13
	付章 その他の遺構	63
III	まとめ	69
	写真図版 1～10	
	報告書抄録	

第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約 20km、南北約 30km に跨る市域は面積 371.13km² を測る。南は大日山 (1368m) で福井県勝山市と境し、ここより約 5km 北に位置する鈴ヶ岳 (1174m) を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約 11 万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣 7 町村を合併して昭和 15 年市制施行、その後 2 次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地 (加越山地) は新第三紀火砕流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約 20m 程度あるが、平均的には 5 ~ 10m 程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた瀉湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江瀉の全域、柴山瀉の約 3 分の 2 が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

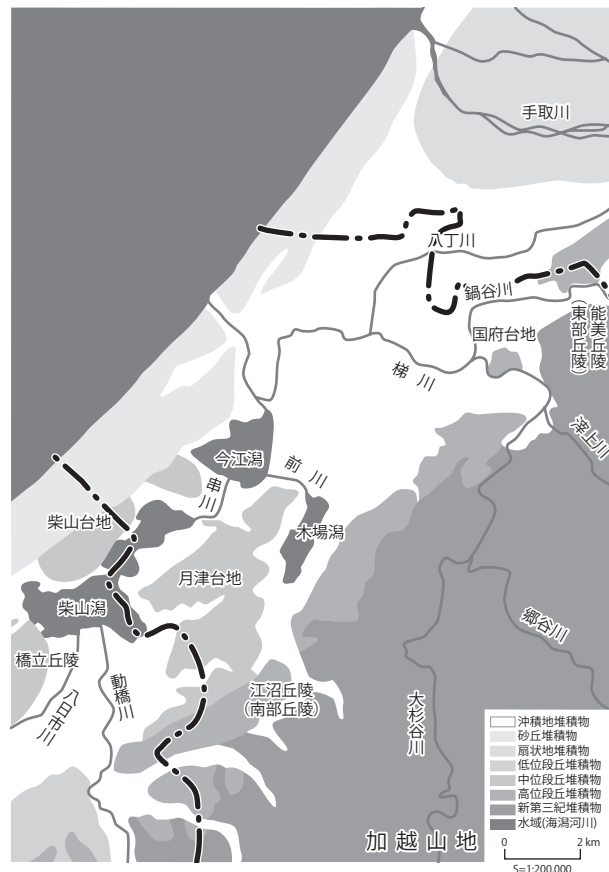
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・滓上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図 2 は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梯川と梯川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



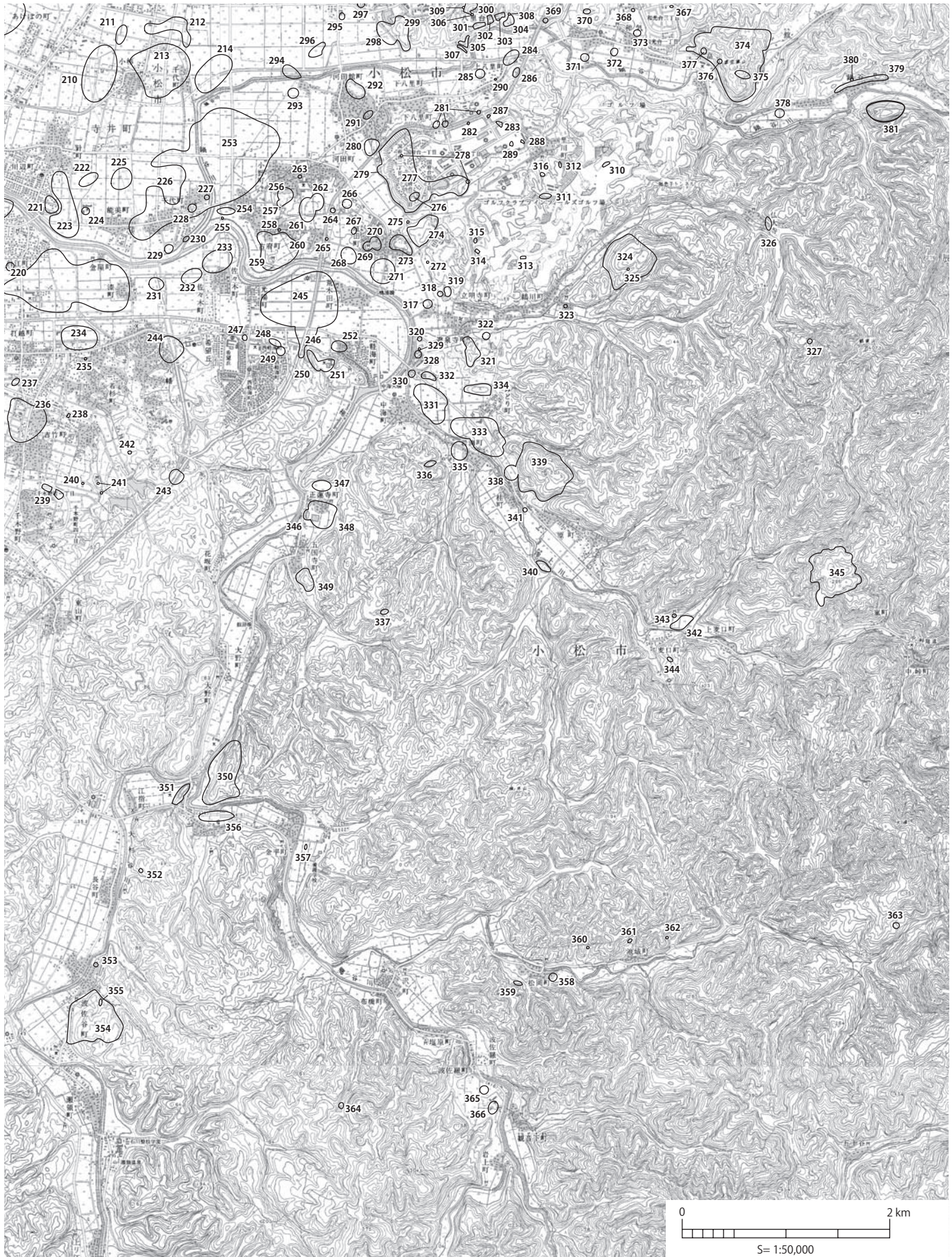
第 1 図 小松市の位置



第 2 図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治44年～大正12年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江潟・木場潟を結んだ領域を指している。図2に表示はないが、この領域には明治20年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貫流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治32年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第2節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界限で言えば、河田山遺跡(276)や八里向山A～F遺跡(300～305)など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷A～D遺跡や宮竹うっしょやまA・B遺跡(いずれも図郭外)など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念仏林遺跡(37)が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一事例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡(198)が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、^{たかんどう}高堂遺跡(図郭外)、大長野A遺跡(210)、漆町遺跡(220)、荒木田遺跡(245)のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡(276)や八里向山A遺跡(300)で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というのは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山5・6号墳、秋常山1号墳、和田山5号墳(いずれも図郭外)を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界限では、中期後半以降、河田山古墳群(277)や下開発茶白山古墳群(図郭外)など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在しないいずれかのみ構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代オオキダ遺跡(226)で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のほぞ古墳(44)や御幸塚古墳(82)などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群(52)のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相関性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷^{たから}の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡^{きよみずでら}(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廢寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和気古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッシュウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は、『能美郡誌』によれば、従前の白江念仏寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（図郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で茶毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工らによって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括り而言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または荘園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No	名 称	種 別	時 代	備 考
1	柴山水底貝塚	貝塚	縄文	
2	柴山中世墓	その他の墓	中世	
3	柴山神社遺跡	散布地	不詳	
4	柴山城跡	城館跡	中世	
5	一白A遺跡	散布地	古墳～古代	
6	柴山貝塚	貝塚・集落跡	縄文	加賀市指定史跡
		集落跡	古代	
7	柴山水底遺跡	貝塚	弥生	柴山山村遺跡A地点に所在する貝塚
8	柴山山村遺跡（A地点）	集落跡	弥生	
	柴山山村遺跡（B地点）	集落跡	古代～中世	柴山貝塚に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	縄文	
10	佐美経塚	経塚	不詳	
11	日未経塚	経塚	不詳	
12	合河遺跡	散布地	不詳	
13	動橋遺跡	散布地	古代（平安）	
14	猫橋遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～中世	
15	都もどり地蔵遺跡	散布地	古代	
16	動橋堡跡	堡塁跡	中世（室町）	
17	梶井衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	梶井遺跡	散布地	古代	
19	分校A遺跡	散布地	古墳	
20	分校B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分校山王古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分校カン山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6
23	分校高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越A遺跡	散布地	縄文	
25	打越B遺跡	散布地	弥生	
26	打越城跡	城館跡	中世（安土桃山）	
27	額見町西遺跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶白山A遺跡	散布地	不詳	
	茶白山B遺跡	散布地	縄文	
29	茶白山祭祀遺跡	その他（祭祀）	古代（奈良）	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津 A 遺跡	散布地	古代(奈良)	
32	額見町遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古墳～中世	
33	額見神社前 A 遺跡	散布地	古墳	額見町遺跡の一部
34	額見神社前 B 遺跡	散布地	縄文	額見町遺跡の一部
35	串町遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代(奈良)	
40	刀何理遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	古代～中世	
41	矢田 A 遺跡	散布地	縄文	
42	矢田 B 遺跡	散布地	古墳	矢田野遺跡の一部
43	矢田野遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	白のほぞ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	左門殿古墳	古墳	古墳	円墳
46	茶臼山古墳	古墳	古墳	円墳、2 段築成
47	興宗寺古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏林古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	丸山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横六式石室、家形石棺
51	狐森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田借屋古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢田野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
55	矢田野エヅリ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	養輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横六式石室
58	中村古墳	古墳	古墳	円墳、切石積横六式石室
59	矢田野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
60	下粟津 A 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 7～8
61	鳥経塚	経塚	不詳	
62	下粟津 B 横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2
63	鳥遺跡	集落跡	弥生～中世	
64	鳥 B 遺跡	散布地	古代	
65	鳥 C 遺跡	散布地	古墳	方墳?
66	符津 A 遺跡	散布地	縄文	
67	符津 B 遺跡	散布地	縄文	
68	符津 C 遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎宮の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	薬師遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	串カンノヤマ A 遺跡	散布地	古代(奈良)	
72	串カンノヤマ B 遺跡	散布地	古墳	
73	串カンノヤマ C 遺跡	散布地	古墳	
74	今江向ノ山遺跡	散布地	弥生	
75	狐山遺跡	集落跡	古墳	
76	土百遺跡	散布地	縄文	
77	今江五丁目遺跡	集落跡	縄文・古墳	
78	五郎座貝塚	貝塚	縄文	
79	矢崎 B 古墳	古墳	古墳	
80	狐山古墳	古墳	古墳	
81	土百古墳	古墳	古墳	
82	御幸塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳、小松市指定史跡
83	今江横穴群	横穴墓	不詳	横穴 4
84	御幸塚城跡	城館跡	中世	主郭と曲輪の一部
85	串古窯跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日末瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	浅井殿古戦場	その他の墓	中世末	県指定史跡
89	林超勝寺跡	社寺跡	不詳	
90	林遺跡(林タカヤマ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須惠器窯 3、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林オオカミダニ古窯跡群)	生産遺跡	古墳	須惠器窯 2、土師器坑 1、南加賀古窯跡北群
	林遺跡(林製鉄跡)	生産遺跡	古代	製鉄炉 2、製炭窯 4、鍛冶炉 2、鋳型坑 2
91	戸津 5・12 号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯 2、南加賀古窯跡北群
	戸津シンバザワ製鉄跡	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉 4、製炭窯 3
92	戸津古窯跡群	生産遺跡	古代、中世(鎌倉)	須惠器窯 36(瓦陶兼窯 5)、土師器坑 19、製炭窯 2、加賀窯 1、南加賀古窯跡北群
93	戸津六字ヶ丘古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯 7、製炭窯 1、南加賀古窯跡北群
94	戸津 1 号窯跡	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯
	戸津ワクダニ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉 1、製炭窯 1
95	戸津ショウガダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯 1、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
96	戸津 2 号窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
	戸津アナヤマ古窯跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
97	戸津オオタニ遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯 2、製鉄炉 1、南加賀古窯跡北群
98	ニツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古代	須惠器窯 12、土師器坑 28、製鉄炉 1、製炭窯 2、南加賀古窯跡北群
99	ニツ梨豆岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代	須惠器窯 4
100	ニツ梨岡向山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須惠器窯 12(埴陶兼窯 2)、瓦陶窯 2)、南加賀古窯跡北群
101	ニツ梨殿様池古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(平安)	須惠器窯(埴陶器兼窯) 3、土師器坑 3、南加賀古窯跡北群
102	ニツ梨クミノキバラ古窯跡群	生産遺跡	古代	土師器坑 4、須惠器窯、南加賀古窯跡北群
103	ニツ梨丸山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯 3、南加賀古窯跡北群
104	ニツ梨峠山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯 8、南加賀古窯跡北群
105	ニツ梨東山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須惠器窯 5、南加賀古窯跡北群
106	ニツ梨脇釜遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯 1、製鉄 1、製炭窯 1、南加賀古窯跡北群
107	ニツ梨横川遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯 1、製鉄 1、南加賀古窯跡北群

No	名 称	種 別	時 代	備 考
108	ニツ梨奥谷古窯跡群	生産遺跡	古代(平安末)	須惠器窯2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
109	ニツ梨奥谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
110	ニツ梨釜谷古窯跡群	生産遺跡	古代	須惠器窯6(瓦陶兼窯1)、南加賀古窯跡北群
111	ニツ梨カセイデ古窯跡群	生産遺跡	不詳	須惠器窯2、南加賀古窯跡北群
112	矢田野向山古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯6、南加賀古窯跡北群
113	矢田野長尾山遺跡	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯4、加賀窯2、製鉄3、南加賀古窯跡北群
114	箱宮ドウガヤチ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
115	箱宮A遺跡	散布地	中世	
116	箱宮B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
118	小天王谷1号製鉄跡(天王山1号製鉄跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
119	小天王谷2～3号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生産遺跡	不詳	
122	那谷1号窯跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯
123	矢田野カクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄3
124	矢田野1～2号横穴	横穴墓	不詳	
125	那谷1～5号横穴	横穴墓	不詳	
126	那谷6号横穴	横穴墓	不詳	
127	那谷中山谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉3
128	上荒屋ユルイデン製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
129	上荒屋ジャモンダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯4、製鉄3、南加賀古窯跡北群
130	上荒屋サンマイダニ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯4～5、製鉄2、横穴1、地下式坑1、南加賀古窯跡北群
131	上荒屋サンマイダニヤマ古窯跡群	生産遺跡	古墳・古代(奈良)	須惠器窯4、南加賀古窯跡北群
132	上荒屋キダシ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)	須惠器窯2、南加賀古窯跡北群
133	上荒屋トリダニ古窯跡群	生産遺跡	古代(奈良)・中世(鎌倉)	須惠器窯1、加賀窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
134	上荒屋オジヤマ古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯4、製鉄炉1
135	戸津1～2号製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
136	戸津本蓮寺跡	社寺跡	中世(室町)	
137	戸津八幡神社前遺跡	散布地	古代～中世	
138	上荒屋那谷口遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
139	馬場ニカヤマ遺跡	生産遺跡	古代(平安)	須惠器窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タニヤマ遺跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1
141	上荒屋ホウジョウヤマ遺跡	生産遺跡、社寺跡、墳墓	古代(平安)～中世	須惠器窯5、製鉄炉2、墳墓、南加賀古窯跡北群
142	上荒屋ハカントニ古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯2
143	湯上谷古窯跡群	生産遺跡	中世(鎌倉)	加賀窯10、製鉄炉2
144	西原フルヤシキ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
145	西原ムカイヤマカクソダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
146	牧口キトラ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄2
147	牧口中世墓跡	墳墓	中世(鎌倉)	牧師塚比定地
148	白山田ドヤマ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉複数
149	井口神社製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
150	井口エンドウ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄
151	井口遺跡	散布地	不詳	
152	林八幡神社経塚	経塚	中世(鎌倉)	
153	津波倉ホツジ遺跡	横穴墓	中世(室町末)	地下式坑6、2基調査
154	大谷貝塚	貝塚	縄文	
155	小山田コガダニ遺跡	散布地	不詳	鉛滓散布地
156	小山田スギトギ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
157	小山田オケサダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉2
158	津波倉ハクマイダニ製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯複数
159	木場古墳群	古墳	古墳	円墳4
160	木場古墳	古墳	古墳	地元で池田城跡とされる
161	池田城跡	城館跡	不詳	
162	木場温泉遺跡	散布地	縄文	
163	木場A遺跡(木場遺跡H地区)	生産遺跡	古代(奈良)	製鉄炉1、製炭窯2
164	木場B遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
165	木場C遺跡	散布地	弥生	
166	木場遺跡A地区(1号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製炭窯3、鉛滓散布地
167	木場遺跡B地区(2号遺跡)	生産遺跡	古代(平安)	製鉄炉2、製炭窯2
168	木場遺跡C地区(3号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡D地区(4号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、製炭窯1
170	木場遺跡E地区(5号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡F地区(6号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡G地区(7号遺跡)	生産遺跡	不詳	製鉄炉
173	木場遺跡D地区(8号遺跡)	横穴墓	不詳	横穴1
174	大曲遺跡	散布地	不詳	鉛滓散布地
175	長谷齋油屋の山遺跡	散布地	不詳	鉛滓散布地
176	三谷遺跡	散布地	縄文	
177	三谷B遺跡	散布地	弥生～古墳	
178	三谷ト方谷遺跡	不詳	不詳	墳丘又は塚
179	三谷大谷遺跡	集落跡	古代～中世	
180	三谷大谷製鉄跡	生産遺跡	不詳	製鉄炉1、鉛滓散布地
181	蓮台寺城跡	城館跡	不詳	小規模な砦跡か
182	蓮代寺ムコイヤマ製鉄跡	生産遺跡	中世(鎌倉)	製鉄炉1、製炭窯1
183	蓮代寺ガッシュウタン遺跡	生産遺跡	古墳	製炭窯3、鉛滓散布地
184	蓮代寺A遺跡	散布地	不詳	鉛滓散布地
185	本江古窯跡	生産遺跡	近世	製陶
186	蓮代寺窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「蓮代寺窯」
187	蓮代寺瓦窯跡	生産遺跡	近世前期	燻瓦窯
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	渋川氏菩提寺「蓮台寺」比定地
189	安宅間跡	その他	不詳	県指定史跡
190	安宅住吉神社遺跡	散布地	不詳	
191	安宅中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも墳丘の基石とも、現存せず
193	小松城跡	城館跡	近世	本丸・二ノ丸・三ノ丸の一部、本丸櫓台は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・泥町の町屋跡

第 I 章 位置と環境

No	名 称	種 別	時 代	備 考
194-2	東町遺跡	町屋跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	幸町遺跡	生産遺跡	中世(室町)	鍛冶
196	多太神社境内遺跡	散布地	中世(室町)	埋納銭出土地
197	本折城跡	城館跡		本折氏居館跡伝承地の一
198	八日市地方遺跡	散布地	縄文・中世	
		集落跡	弥生	環壕集落
199	上小松遺跡	散布地	古代(平安)	
200	梯川鉄橋遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
201	梯川鉄橋 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
202	島田 A 遺跡	散布地	古墳～古代	
203	島田 B 遺跡	散布地	古墳	
204	御館遺跡	城館跡	中世(室町)	
205	銭畑遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	一向一揆・蛭川新七郎重親居館伝承地
206	梯遺跡	散布地	弥生～古代	
		集落跡	中世	
207	松梨遺跡	散布地	縄文～弥生・中世	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田遺跡	散布地	弥生～古墳	
209	長田南遺跡	散布地	弥生・古代(平安)	
		集落跡	中世(室町)	
210	大長野 A 遺跡	集落跡	弥生～中世	
211	大長野 B 遺跡	散布地	不詳	
212	牛島宮の島遺跡	集落跡	古代(平安)	
213	千代デジロ遺跡	集落跡	弥生～中世	
214	牛島ウハシ遺跡	集落跡	縄文～中世	
215	平面梯川遺跡	集落跡	弥生	梯川に分断された左岸側包蔵地
216	平面梯川 B 遺跡	散布地	弥生	梯川に分断された右岸側包蔵地
217	白江梯川遺跡	集落跡	弥生・中世	
218	白江堡跡	城館跡	中世(室町)	白江新助景盛居館伝承
219	白江遺跡	散布地	古墳～中世	漆町遺跡の一部
220	漆町遺跡	集落跡	弥生～中世	
221	一針遺跡	散布地	縄文	
222	一針 B 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針 C 遺跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定地坊跡	社寺跡	中世(室町)	
225	千代・能美遺跡	集落跡	古墳～中世	
226	千代オオキタ遺跡	散布地	縄文～弥生	
		集落跡	弥生～中世	
		古墳	古墳	方墳 6
227	千代小野町遺跡	散布地	古墳	
228	千代城跡	城館跡	中世(室町)	
229	千代本村遺跡	散布地	古墳	
230	横地遺跡	散布地	縄文	
231	佐々木遺跡	集落跡	古代	財氏居宅跡(奈良)
232	佐々木ノテウラ遺跡	集落跡	弥生～中世	
233	佐々木アサハタケ遺跡	集落跡	弥生～中世	
234	打越遺跡	散布地	古代	
235	若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「若杉窯」、連房式登窯
236	吉竹遺跡	集落跡	弥生～中世	
237	吉竹 B 遺跡(吉竹遺跡 19 地区)	散布地	古墳	旧河道の堰跡
238	吉竹 C 遺跡	集落跡	弥生～中世	
239	千木野遺跡	散布地	縄文	
	千木野(A)遺跡	古墳	古墳	方墳 8
	千木野(B)遺跡	集落跡	古墳	
240	幡生 1 号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	釜谷古墳・釜谷 2 号墳	古墳	古墳	切石積横穴式石室
242	若杉オソボ山 1 号窯跡	生産遺跡	古墳	須恵器窯
243	浄水寺跡	社寺跡	古代～中世	創建は加賀国府・園分寺周辺山林寺院群の一
244	八幡遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生～古墳・古代(奈良)・中世(鎌倉)	
		その他の墓	古代(平安)	土坑墓
	八幡古墳群	古墳	古墳	円墳 8、木芯粘土室
	八幡若杉窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「八幡若杉窯」、八幡 6 号墳を削平して築いた連房式登窯
245	荒木田遺跡	集落跡	古墳～中世	
246	軽海西芳寺遺跡	集落跡	縄文～中世	
247	大谷口遺跡	散布地	弥生	
248	軽海遺跡	散布地	弥生～中世	
249	亀山遺跡	生産遺跡	古墳	玉作
250	軽海中世墓群	その他の墓	中世(室町)	集石墓 9
251	軽海庵寺	社寺跡	古代(平安)	大興寺伝承地
252	西芳寺遺跡	社寺跡	古代(平安)	西芳寺伝承地
253	古府しのまち遺跡	集落跡	弥生～古代	
254	古府遺跡	集落跡	古代(平安)	
255	古府フンド遺跡	散布地	古代(平安)	
256	十九堂山遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀園分寺推定地
257	十九堂山中世墓群	その他の墓	中世(室町)	
258	古府横穴	不詳	不詳	
259	古府シマ遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
260	南野台遺跡	散布地	縄文	
261	小野遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一隅
262	小野スキノキ遺跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一隅
263	小野窯跡	生産遺跡	近世末	再興九谷「小野窯」
264	前田利常公灰塚	その他の墓	近世	前田利常公が茶毘に付された地とされる
265	埴田の虫塚	その他	近世末	害虫の菩提供養と駆除方法を記した石柱、小松市指定史跡
266	埴田ミヤケノ遺跡	散布地	不詳	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
267	埴田ミヤンタン遺跡	散布地	不詳	
268	埴田ウラムキ遺跡	散布地	古代～中世	
269	埴田フルカワ遺跡	散布地	古墳	
270	宮谷寺屋敷遺跡	散布地	縄文・中世(室町)	
271	埴田遺跡	散布地	古代	
272	埴田塚	不詳	不詳	
273	埴田後山古墳群	古墳	古墳	円墳9、木棺直葬、木芯粘土室
274	埴田山古墳群	古墳	古墳	円墳12、方墳4
275	御菩提所古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落、河田山10～12号墳が重複
		その他の墓	古代(奈良)	火葬墓、河田山1号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳2、前方後方墳2、円墳22、方墳34、不明1、木棺直葬、木芯粘土室、切石横穴式石室
	河田横穴	横穴墓	不詳	地下式坑、河田山54号墳の南に開口
278	河田山1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群、河田山60号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
279	河田B遺跡	散布地	縄文・古代(奈良)	
280	河田C遺跡	散布地	不詳	
281	下八里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑6、横穴1、不明1、3地点で計8基
282	穴場横穴群	横穴墓	不詳	横穴2基
283	上八里横穴群	横穴墓	中世(室町)	横穴11基
284	上八里中世墓跡	その他の墓	中世(室町)	
285	上八里A遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
286	上八里B遺跡	散布地	古代(奈良)	
287	上八里C遺跡	横穴墓	古墳	横穴2基
288	上八里D遺跡	散布地	古代(奈良)	
289	上八里1号窯跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
290	上八里2号窯跡	生産遺跡	不詳	地下式窯、能美古窯跡南群 八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田館遺跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地刺遺跡	散布地	不詳	
294	佐野A遺跡	散布地	弥生	
295	佐野B遺跡	散布地	古墳	
296	佐野八反田遺跡	散布地	古代	
297	狭野神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
298	河田向山下遺跡	散布地	縄文・古代(平安)	
299	河田向山古墳群	古墳	古墳	円墳7
300	八里向山A遺跡	散布地	縄文	
		集落跡	弥生	高地性集落
301	八里向山B遺跡	散布地	旧石器～縄文	
		社寺跡	古代(奈良)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
		散布地	旧石器～縄文・古代(奈良)	
302	八里向山C遺跡	集落跡	弥生	
		古墳	古墳	前方後方墳1、木棺直葬
		散布地	旧石器～縄文	
303	八里向山D遺跡	集落跡	弥生～古墳	
		古墳	古墳	方墳2、木棺直葬
		散布地	旧石器～縄文	
304	八里向山E遺跡	古墳	古墳	方墳1
		集落跡	古代	
		散布地	縄文	
305	八里向山F遺跡	古墳	古墳	円墳10、木棺直葬
		その他の墓・横穴墓	中世(室町)	集石墓1、横穴3
		散布地	弥生・古代(平安)	
306	八里向山G遺跡	その他の墓	中世(鎌倉)	集石墓群、96基調査
307	八里向山H遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯、能美古窯跡南群 八里・泉台支群
308	八里向山I遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯2、製炭坑約20
309	八里向山J遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
310	里川A遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
311	里川B遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
312	里川C遺跡	生産遺跡	不詳	製炭窯
313	里川D遺跡	散布地	縄文	
314	里川E遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
315	里川F遺跡	社寺跡	古代(平安)	加賀国府・国分寺周辺山林寺院群の一
316	里川G遺跡	散布地	不詳	
317	遊泉寺・クボタA遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
318	遊泉寺・クボタB遺跡	散布地	古代(平安)～中世	社寺(隆明寺)又は城館伝承地
	立明寺古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯(瓦陶兼窯)
319	立明寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可能性も
	隆明寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
320	遊泉寺遺跡	散布地	縄文	
321	宮の奥墳墓群	その他の墓	(平安)	墳墓4、3基調査、2号墓は鎌倉時代に経塚に利用された?
322	涌泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、複数ある伝承地の一
323	常徳寺跡	社寺跡	中世(室町)	一向一揆・宇川常徳の居宅跡とも
324	鶴川堡跡	城館跡	不詳	一向一揆・宇川常徳の語城伝承地
325	鶴川横穴	不詳	不詳	地下式坑?
326	仏大寺仏陀寺跡	社寺跡	中世	
327	仏大寺とうの池古墳	古墳	古墳	
328	仏生寺跡	社寺跡	中世	
329	仏生寺塚	経塚	中世	
330	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳2、木芯粘土室
331	中海B遺跡	集落跡	古墳～中世	
	(伝)長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院、地名伝承のみ
332	中海C遺跡	散布地	古代(平安)～中世	
333	中海遺跡・岩淵遺跡	散布地	縄文	
	岩淵上野遺跡	散布地	旧石器	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
334	長寛寺中世墓跡	その他の墓	中世	
335	赤穂谷口遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳		存在自体が不明、5基開口とされる
337	赤穂谷ヌギノキ谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴9、地下式坑4
338	善興寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
339	岩瀨城跡	城館跡	中世	
340	仏ヶ原城跡	城館跡	中世	
341	仏御前塚敷跡・仏御前墓	その他の墓	古代(平安)	小松市指定史跡
342	麦口遺跡	散布地	縄文	
343	麦口中世墓跡	その他の墓	中世	
344	下麦口横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
345	岩倉城跡	城館跡	中世(室町)	
346	権の木山遺跡	散布地	縄文	
347	昌隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	護国寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
349	松谷庵寺	社寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に遡る古代山林寺院
	松谷寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
350	平野堡跡	城館跡	中世(室町)	一向一揆・平野某語城伝承地
351	江指城跡(山神山砦跡)	城館跡	中世(室町)	
352	蓮花寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
353	波佐谷遺跡	散布地	中世(室町)	
354	波佐谷城跡	城館跡	中世(室町)	一向一揆・宇津呂丹波守語城伝承地
	(伝)波佐谷松岡寺跡	社寺跡	中世(室町)	
355	波佐谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴13、地下式坑5
356	六橋遺跡	集落跡	縄文	
357	麻島尾谷遺跡	散布地	縄文	
358	松岡寺跡	社寺跡	中世(室町)	
359	火灯山横穴群	横穴墓	不詳	横穴3
360	こたい谷横穴	横穴墓	不詳	横穴1
361	穴山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
362	池城経塚	経塚	中世(室町)	
363	曾山横穴	横穴墓	不詳	横穴1
364	布橋遺跡	散布地	縄文	
365	寺ノ腰遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	観音下城跡	城館跡	不詳	
367	和気後山谷奥遺跡	生産遺跡	古代(平安)	土師器焼成坑、能美古窯跡南群 後山谷支群
368	和気後山谷2号窯跡	生産遺跡	古代(奈良末~平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
369	和気下和気古窯跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯、能美古窯跡南群
370	和気近世窯跡	生産遺跡	近世	
371	和気矢口A遺跡	散布地	縄文	
372	和気公文屋遺跡	城館跡	不詳	
373	和気中和気古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群 後山谷支群
374	虚空蔵城跡	城館跡	中世	
375	虚空蔵山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺島古窯跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯、能美古窯跡南群
377	寺島薬師坂古墳	古墳	古墳	
378	鍋谷社跡	社寺跡	不詳	
379	鍋谷中世墓群	その他の墓	中世	
380	鍋谷横穴	横穴墓	不詳	
381	鍋谷堡跡	城館跡	不詳	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992)石川県遺跡地図
- 石川県立埋蔵文化財センター(1986)漆町遺跡Ⅰ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)漆町遺跡Ⅱ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)辰口西部遺跡群Ⅰ,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1988)白江梯川遺跡Ⅰ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡Ⅲ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)漆町遺跡Ⅳ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)白江梯川遺跡Ⅱ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1989)蓮代寺地区遺跡Ⅰ,石川県小松市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1990)小松市高堂遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1993)能美丘陵東遺跡群Ⅰ,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1995)石川県小松市荒木田遺跡
- 石川県立埋蔵文化財センター(1997)能美丘陵東遺跡群Ⅱ,石川県能美市
- 石川県立埋蔵文化財センター(1998)能美丘陵東遺跡群Ⅲ,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群Ⅳ,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)能美丘陵東遺跡群Ⅴ,石川県能美市

- (財) 石川県埋蔵文化財センター (1999) 辰口町上徳山谷山西谷窯跡, 石川県能美市
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2002) 加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財) 石川県埋蔵文化財センター (2006) 小松市矢田野遺跡群
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1993) 小松市林遺跡
- (社) 石川県埋蔵文化財保存協会 (1998) 石川県小松市八幡遺跡 I
- 石川考古学研究会 (1988) 石川県城館跡分布調査報告
- ウ 上野 與一 (1965) 考古篇, 小松市史 4. 風土・民俗篇, 小松市教育委員会, 石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会 (1996) 軽海用水誌, 小松東部土地改良区, p75-77. p201-221., 石川県
- コ 小松市教育委員会 (1988) 念仏林遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) 湯上谷古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1990) ニツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (1992) 矢田野エジリ古墳, 石川県
- 小松市教育委員会 (2000) 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2003) 八日市地方遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 佐々木遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2004) 八里向山遺跡群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2005) 小松市内遺跡発掘調査報告書 I. ニツ梨豆岡向山窯跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小松市内遺跡発掘調査報告書 II. 矢田借屋古墳群, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 千代オオキダ遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 小野遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2006) 額見町遺跡 I, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 小松市内遺跡発掘調査報告書 III. 薬師遺跡, 石川県
- 小松市教育委員会 (2007) 額見町遺跡 II, 石川県
- 小松市教育委員会 (2008) 額見町遺跡 III, 石川県
- 小松市教育委員会 (2009) 額見町遺跡 IV, 石川県
- 小松市教育委員会 (2010) 額見町遺跡 V, 石川県
- 小松市教育委員会 (2011) 小松市内遺跡発掘調査報告書 VII. 矢崎宮の下遺跡・薬師遺跡 V 次, 石川県
- 小松市教育委員会 (2014) 大川遺跡, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2001) 新修小松市史 3. 九谷焼と小松瓦, 小松市, 石川県
- 小松市史編纂委員会 (2002) 新修小松市史 4. 国府と荘園, 小松市, 石川県
- タ 辰口町教育委員会 (1982) 辰口町下開発茶白山古墳群, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (1985) 辰口町湯屋古窯跡, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2001) 辰口町湯屋古窯跡 III, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2004) 下開発茶白山古墳群 II, 石川県能美市
- 辰口町教育委員会 (2005) 和気後山谷窯跡群, 石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会 (1997) 加賀能美古墳群, 石川県能美市
- ヘ 日置 謙 (1923) 石川県能美郡誌, 能美郡役所, p366-375. p642. p823. p1268-1269. p1342-1343., 石川県
- 日置 謙 (1925) 石川県江沼郡誌, 江沼郡役所, p679., 石川県
- ホ 北陸中世土器研究会 編 (1997) 中・近世の北陸, 桂書房, p193-208.

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群 2 (遺物編 2)

はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』(小松市教委 2015)にて遺構編を報告した「二ツ梨豆岡向山窯跡群 2」の遺物編 2 にあたる。報告遺物は 5 号窯・6 号窯・13 号窯関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委(2015)を参照されたい。

付章として、土師器焼成坑 SJ01～04、及び土坑 SK06～08 について報告する。最後に、第Ⅲ章にて、これまで行った調査から当窯跡群の窯場動向をまとめ、結びとする。

【凡例】

1. 遺物の器種分類と編年観

須恵器・土師器ともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じ、第 5・6 図の通り設定した。貯蔵具に関しては、北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第 8 号』に基づいたものである(ただし壺 A・壺 B および壺 D・壺 E は区分していない)。

土器編年と暦年代観は、田嶋明人氏の古代土器編年軸(田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題(報告編)』、及び 1997「加賀地域での 10・11 世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の 10・11 世紀代の土器様相』、2013「平安期土器の暦年代と横江荘の変遷」『加賀 横江荘遺跡』)に基づいて、望月精司氏が示した編年観と細分案に準じる(望月精司 2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」『二ツ梨一貫山窯跡』及び 2005「第 8 章考察—能美窯跡群の 8 世紀後半～9 世紀中頃の須恵器編年と窯場動向—」『和気後山谷窯跡群』、2009「南加賀地域古代土器編年軸と暦年代観」『額見町遺跡Ⅳ』)。

2. 遺物図版について

- 縮尺は食膳具と焼台 1/3、貯蔵具と煮炊具 1/4 を基本とする。
- 掲載番号と[実測図番号]を併記。
- 須恵器は断面黒塗、土師器は断面白抜き。
- 粘土塊や焼台片等附着物は断面斜線パターン、赤彩は黒 20%塗。
- 「▼」を正中線上に付すものは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と稜線・調整線等が離れているものは、ゆがみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す
- 底部に回転糸切痕をもつものは「●」を付す。
- その他特徴的な調整は観察表に付記した。

3. 遺物観察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点・取上げ詳細：出土した遺構名・グリッド名を示し、「窯床」「窯前庭部(焚口前面土坑)」「窯舟底状ピット内」「灰原」「窯埋土」等の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。

法量：「口」=口径、「底」=底径、「台」=高台径、「胴」=胴部最大径、「頸」=頸部径、「つ」=つまみ径、「高」=器高、「台高」=高台高、「頸高」=頸部高、「つ高」=蓋つまみ高、「頸高」=頸部高で示し、()

は残存値、[] は推定復元値を表す。単位は cm に統一した。性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「転」は主に 2 次被熱痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅緻」—焼き締まりが非常に強いもの、「良好」—焼き締まりが強いが堅緻より弱いもの、「良」—還元状態を保つが焼き締まりが弱いもの、「やや良・やや不良」—「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」—白い生焼け状態のもの(生)や酸化状態の焼成不良で軟質のもの(酸)をそれぞれ示す。

色調：降灰部分、釉附着部分を除いた大まかな色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は適宜降灰や釉の色調も示した。色調の判別は以下のとおりマンセル表色系に準拠して表記する。白色—N-8(生焼け品)、灰白色—N-8、灰色—N-7～5、灰オリーブ色—5Y6/1～4/1、明青灰色—5PB7/1 あるいは 5P7/1、青灰色—5PB6/1～5/1 あるいは 5P6/1～5/1、暗(青)灰色—N-3 あるいは 5PB4/1～3/1、灰褐色—7.5YR4/2、褐色—10YR6/1～4/1、(明)赤灰色—2.5YR7/1～6/1 あるいは 2.5YR7/2～6/2(酸化焼成品)、ほか例外となる色調はその都度付記した。

胎土：「通常」—南加賀窯跡群の戸津オオダニ支群窯で通常見られる、粘土質の素地に適度に砂粒(粒径 2mm 未満)が混在し、まれに礫粒(粒径 2mm 以上)を含む胎土、「砂少」—砂粒の混入が少ない比較的良質な粘土質胎土、「砂(礫)多」—通常の胎土よりもやや砂粒や礫粒が多い胎土、「礫極多」—混和材と呼べる大粒の礫を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率(36 分率)を示す。他の部位で示す場合は胴、底、台、脚等を数値に付記する。

回転：クロク回転の方向がヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の観察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

- 底部糸切り—糸切りがある場合に記す。ただし、坩皿器種については記さない。ヘラ切りの場合は特に記さない。
- ヘラケズリ—部位を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「手持ちケズリ」と記す。
- ヘラ記号—部位と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ書き」。
- 重ね焼き分類—坏 B 焼成痕跡の分類。北野博司 1988「重焼の観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』に基づく(I 類—蓋身正位組合せ

重ね焼き、Ⅱ a 類—蓋逆位と身正位の組合せ重ね焼き、Ⅱ b 類—蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、Ⅲ類—蓋および身の柱状重ね焼き)。対象は有蓋器種(坏B)だが、無蓋器種(坏A・盤A・碗AB・皿B)についてもⅢ類が観察されたものは付記する。また、皿Bで身と身の口を合わせる合わせ口法を確認した。

- タタキ分類—貯蔵具の胴部成形や調整の際に生じる叩き具・当て具痕跡の分類。花塚信雄 1984「須恵器甕類叩き目文について」『金沢市畝田・寺中遺跡』に基づく。
- 頸部接合分類—瓶類の頸部接合法は『和気後山谷窯跡群』

(2005)に倣い、A類(風船技法)とB類(開口法)に大別し、A類は3細分した(A1類—大円盤閉塞、A2類—中円盤閉塞(円盤痕見えるタイプ)、A3—小円盤閉塞(円盤痕見えないタイプ)もしくは円盤閉塞しない絞り切り)。

- 貯蔵具専用焼台分類は望月精司 2008「須恵器窯専用焼台に関する考察」『白門考古論叢Ⅱ』を参照した。

※観察箇所を示す場合、(部位) — (内面・外面) — (上半・下半)の順に略して記載

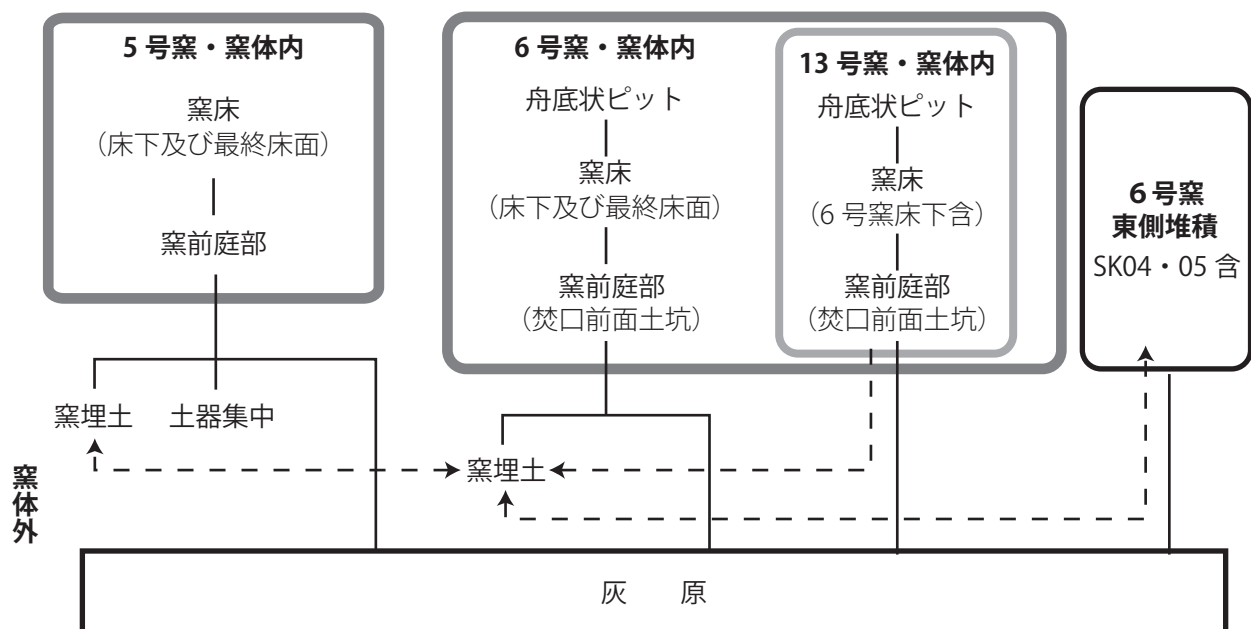
第1節 報告遺物の概要と器種分類

対象となる5号窯・6号窯・13号窯は調査区E—I区～E—III区に位置し、南側のE区にかけて灰原が広がる(調査区の位置は第33図参照)。灰原は4号窯同様に後世の切土・盛土によって攪乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲(こ5～し5グリッドおよび、こ6～し6グリッド)を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、攪乱による2次堆積のものが多数含まれている。

6号窯東側堆積は、遺構編で6号窯に関連する施設(SK04・05)として扱った区域であるが、切り合い関係が不明瞭で、各窯に属する遺物が混在する。また、5号窯前庭部左側部にある土器集中は、基本的に5号窯出土遺物で構成されるが、混在が認められた。さらに、5号窯と6号窯は隣り合い、13号窯は6号窯に再利用(改造)されているため、各窯埋土(覆土)出土遺物も混在が著しい。よって、報告では主に窯体内出土遺物を取り上げ、それ以外に窯体外出土遺物の中で形態的特徴から抽出できたものに関しては各窯に含めて提示した。

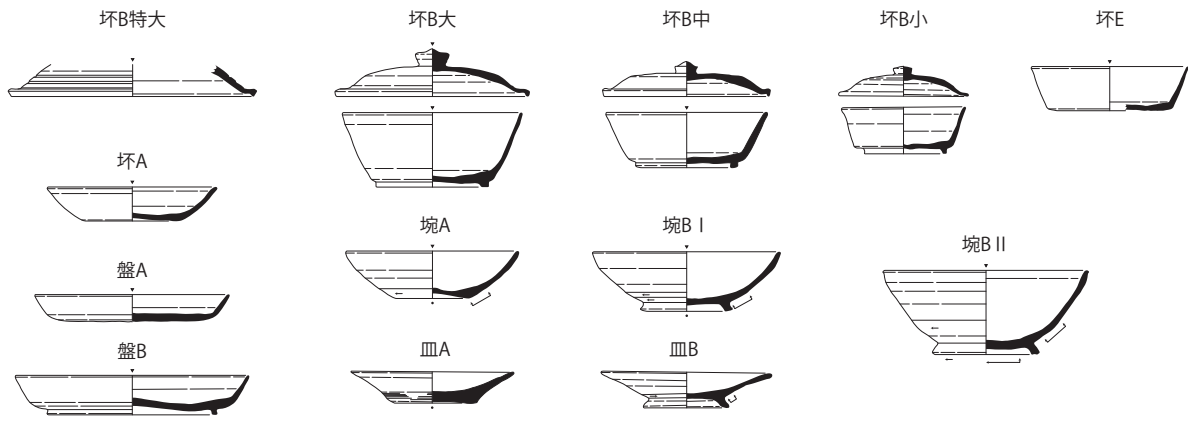
確認された主要器種は第5図と第6図のとおりである。

食膳具は底部ヘラ切りの坏・盤と底部糸切りの碗・皿に分けられ、それぞれ無台をA、有台をBとしている。有蓋の坏Bは、口縁計測の際に蓋身で数値の高い方を採用した。坏Eは坏B中小法量器種として生産される無台有蓋の坏である。窯体内や灰原で土師質の食膳具が出土しているが、赤彩や

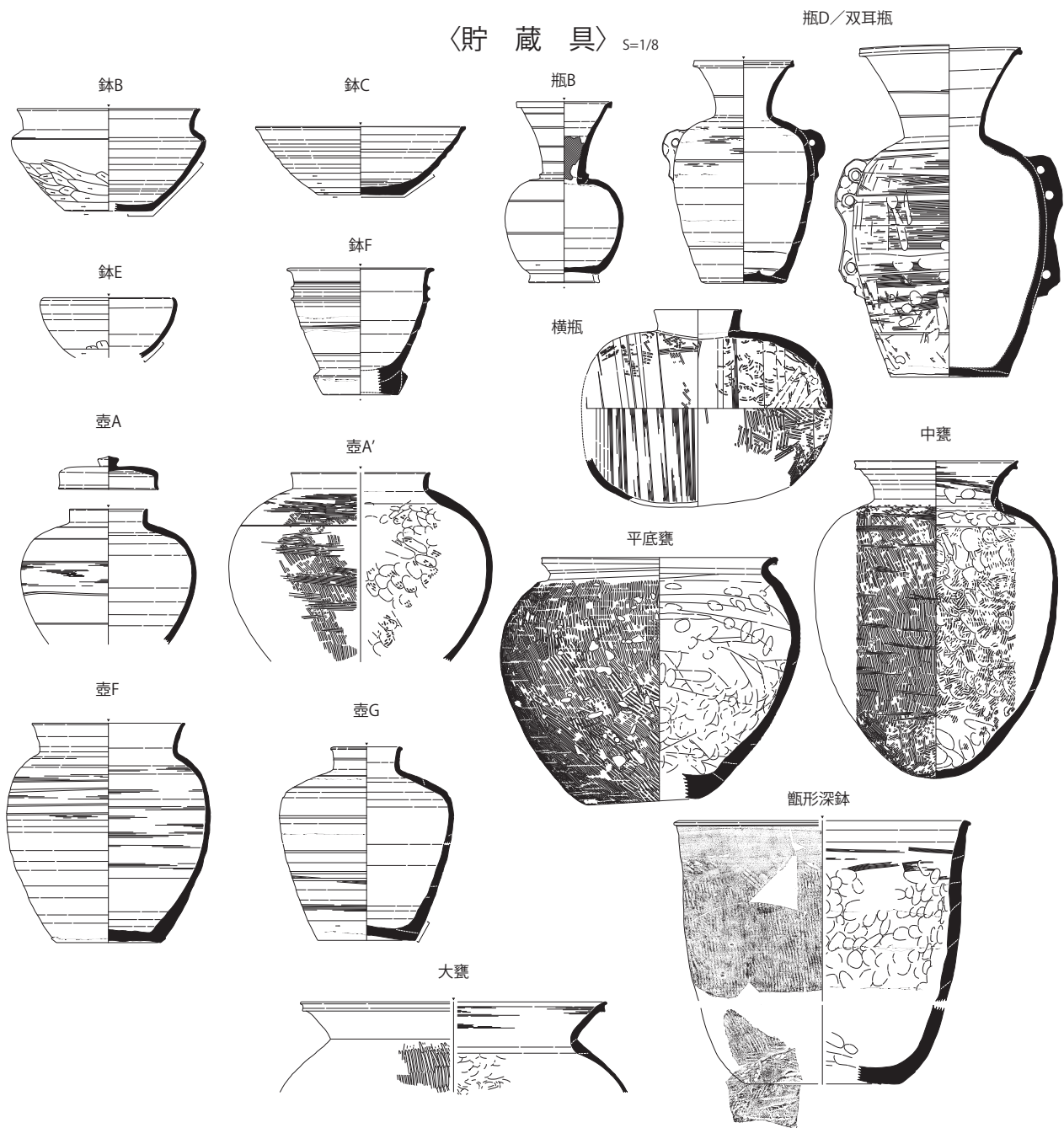


第4図 出土地点概略図

〈食膳具〉 S=1/6

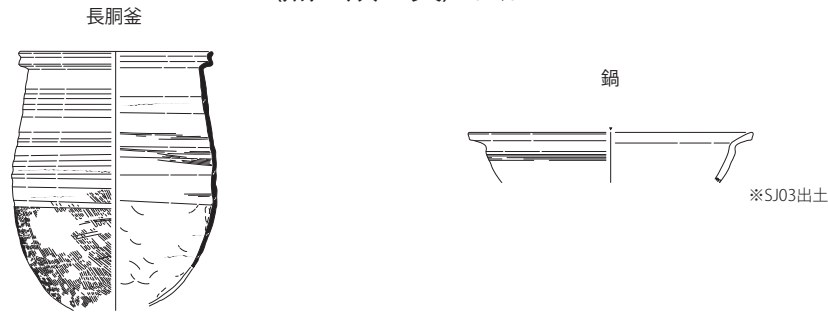


〈貯蔵具〉 S=1/8



第5図 器種分類図1

〈煮 炊 具〉 S=1/8



第6図 器種分類図2

内黒のないものは基本的に須恵器器種として集計している。意図的な無垢土師器の可能性のあるものは図化の際に断面白抜きとした。灰原からのみ内黒塊をわずかに確認しているが、主要な生産器種とはならない（計測値 61/36）。

貯蔵具は調理・盛り付け容器の鉢を含め、壺・瓶・甕類を確認している。鉢は頸部くびれをもつ広口の鉢 B が主体で、壺形の鉢 C、口縁内湾の鉄鉢形となる鉢 E、深身厚底の鉢 F が出土している。甕形深鉢は当窯跡群 1 - A 号窯及び 1 - B 号窯で確認・命名された 10 世紀代の器種で、他地域ではみられないタイプであり（小松市教委 2005）、大型の甕に類する器種と思われる。瓶は肩丸長頸の瓶 B と長胴の瓶 D（いわゆる双耳瓶）があり、特に瓶 D は貯蔵具全体からみても生産の中心となる器種である。横瓶は口頸が短い古手のタイプが 1 個体のみ灰原から出土している。壺は短頸で有蓋の壺 A、同器形で無蓋の壺 A'、広口なで肩の壺 F、狭口なで肩の壺 G（= 平底無蓋短頸壺（小松市教委 1993））がある。壺 A' は（小松市教委 2005）にて「壺 G・壺 H」に区分されたものだが、本報告では器形的に壺 A の流れを汲むものとして一括した。壺 G は 10 世紀代に生産される器種で、（小松市教委 2005）にて「壺 F 系」とされた一群にあたるが、壺 F は広口器種であり適当でないと感じたため、再設定した。1 - A 号窯、1 - B 号窯及び 7 号窯には頸が長くなるタイプが存在する。なお壺 A につく蓋は口縁計測から除外した。甕は中甕、大甕、平底甕があり、小甕は確認していない。

煮炊具は釜と鍋を確認している。須恵器窯由来のものは大半が長胴釜で、灰原から鍋が極わずかに出土している。付章で述べる土師器焼成坑から短胴小釜と鍋が出土している。

以上のほかに、小型貯蔵具（壺・瓶）、特殊蓋、コップ形、平瓶、円面硯、獣足片、管状土錘、窯道具（貯蔵具専用焼台）が出土しているが、計測対象には含めず、個別に報告する。

なお、各窯の所属時期は、遺構編で 13 号窯 = 9 世紀中頃～後半、6 号窯 = 9 世紀末～10 世紀初頭、5 号窯 = 10 世紀前半（北陸古代土器編年 V₂～VI₃ 期）に位置づけたが、今報告の遺物報告をもって時期を確定したい。

参考文献（第 II 章及び付章）

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 望月精司・福島正実 1988 「南加賀古窯跡群の概要」『北陸古代土器研究の現状と課題』石考研・北陸古代土器研 | 窯跡研究会 1997 『古代の土師器生産と焼成遺構』 |
| 小松市教育委員会 1991 『戸津古窯跡群 I』 | 小松市教育委員会 2002 『二ツ梨一貫山窯跡』 |
| 小松市教育委員会 1992 『戸津古窯跡群 II』 | 小松市教育委員会 2005 『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』 |
| 望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』2 号 | 辰口町教育委員会 2005 『和気後山谷窯跡群』 |
| 小松市教育委員会 1993 『二ツ梨豆岡向山古窯跡』 | 小松市教育委員会 2015 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』 |
| 春日真実 2001 「横瓶の製作法」『北陸古代土器研究』9 号 | 小松市教育委員会 2017 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』 |

※凡例で記載したものは一部省略

第2節 13号窯関連遺物

13号窯は先述したように、6号窯構築時の再利用により窯体の大半を改変されており、確実に窯に伴う遺物は床下及び舟底状ピット出土のものに限られる。そのため、器種構成も生産の全容を示さないことを前提とする。

器種構成表を第2表に示した。食膳具は底部ヘラ切り器種の坏盤が合わせて90%以上を占め、わずかに糸切り器種の碗皿を伴う。有蓋の坏B・坏Eが2割半、無蓋の坏A・盤Aが6割、盤Bがわずかに残存する。坏Eと盤Bは灰原からの出土であるが、形態的特徴から本窯に含めた。碗皿は口縁部片のみの分類で、器厚や見込みの有無等で判断している。貯蔵具は鉢瓶類が主体で、これに壺が伴う。甕と煮炊具は確認できなかった。これら各器種の中には、焼き色が白色系で堅緻に焼かれて降灰あるいは釉付着する一群が一定量存在しており、それを基準に抽出したのも含む。以下、各器種の概要を述べる。

第2表 13号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,596 / 36）

器種	坏B (蓋・身)		坏E	坏A	盤A	盤B	碗類	皿類	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	210	324	31	428	390	105	32	23	1,333
占有率 (%)	24.3		2.3	32.1	29.3	7.9	2.4	1.7	83.5
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)		壺類	貯蔵具計				
口縁部計測値 (/36)	101	123	63	39	263				
占有率 (%)	38.4	46.8	24.0	14.8	16.5				

1 食膳具

〈坏B (1～16)〉 蓋口径から法量分化を見ると、18cm以上を特大、18cm未満15cm以上を大、15cm未満12cm以上を中、12cm未満を小の4法量に分けられる。小法量は口縁端部折り曲げの無いタイプ(8)として作り分けるが、極わずかである。大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大4%、大71%、中22%、小2%となり、特大・大法量が7割以上を占める。

蓋は全形に分かるものでは有紐が主体と言えるが、破片で柱状重ね焼き(Ⅲ類)を確認しており、無紐も確実に存在している。つまみは宝珠形あるいは擬宝珠形(1・2・4～8)があり、小型化の傾向にある(6～8)。主に大法量では厚手(4・7)・薄手(1・2・5・6)の2種があるほか、天井部平らの扁平器形(2・7)と天井部丸くやや器高の高い器形(1・4・5・6)に分けられる。端部は折り曲げるものと鋭く突出するものが中心となる。天井部ヘラケズリは確認できていない。

身は蓋よりも口径が1～1.5cm程小さくなるサイズで、体部外傾する。径高指数は大法量40前後、中小法量35～40で、大法量よりも中小法量(特に小法量)の方が扁平な器形となる。また、台径指数は大法量57～63に対し、小法量は65以上となり、大法量で台部小型化と体部外傾が顕著であることが分かる。底部及び体部の明瞭なヘラケズリは確認できていない。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数64点中で、Ⅰ類2点(3%)、Ⅱa類52点(81%)、Ⅱb類5点(8%)、Ⅲ類5点(8%)とⅡa類が突出して多く、Ⅲ類は無紐蓋の存在を示すものである。以下、無蓋器種に関しては、Ⅲ類が主体となる。

〈坏E (17)〉 口径12.4cmのものを1点確認している。底部大きめで体部直立気味に外傾し、薄手づくりである。二ツ梨一貫山3号窯灰原(小松市教委2002)のB1類に該当すると考えられる。

〈**坏 A (18～23)**〉 全形が分かるものが少ないが、食膳具の中で最も高い占有率をもつ器種である。口径 12～13cm の 1 法量。舟底状ピット出土の 18・19 は径高指数 25 前後となり、体部薄手で外傾する。灰原から抽出した 20～22 は白色堅緻焼成、23 は体部に沈線を施し底部が極端に厚くなるもので、本窯に属すると判断したが、混入かもしれない。

〈**盤 A (24～33)**〉 口径は概ね 15～17cm、器高 2cm 前後に分布する。底部から体部立ち上がり付近が厚く、外面の強いナデによって直線的あるいはやや外反気味に外傾するものが多い。坏 A とともに食膳具の中で高い占有率をもつ。

〈**盤 B (34～37)**〉 口径は概ね 18.5～21cm に分布する。すべて灰原出土であるが、形態的特徴から本窯に伴うものと判断した。坏 A・盤 A 同様に体部外傾し、底部が丸味を帯びるタイプ (34・35) と体部が外反気味になるタイプ (36・37) がある。底部ヘラケズリの比率は算出していないが、計測個体中でわずかに確認している。

〈**碗皿類 (38)**〉 冒頭で述べたとおり、すべて口縁部片から分類しており、碗に関しては図化に耐えうるものがなかった。皿については、図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、体部上半にロクロヒダが残る薄手の破片を提示した。占有率が圧倒的に低く、本窯では未だ定量生産には至っていないと判断される。

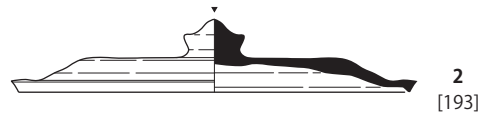
2 貯蔵具

〈**鉢類 (40～43)**〉 鉢 B・鉢 E・鉢 F を確認しているが、鉢 F は小破片で図化できなかった。把手付の鉢 B (42) は古代 V 期以降消失するタイプで、編年の指標となる。鉢 E は口径 20cm 以上と 16cm 程 (43) の 2 法量がある。同時期の能美窯跡群で生産が確認されており、V₁ 期 (和気後山谷 1 号窯) から V₂ 期 (和気白石窯) にかけてやや小型化し、口縁端部内湾するものと短く摘み上げるものがある (辰口町教委 2005)。本窯でも前者 (43) のほか、後者も灰原出土のもので 4 個体確認している。薄手で体部下半にヘラケズリを施し、丁寧なつくりである。

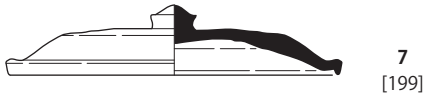
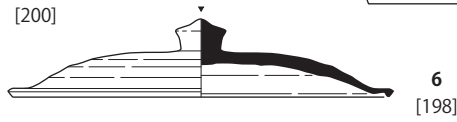
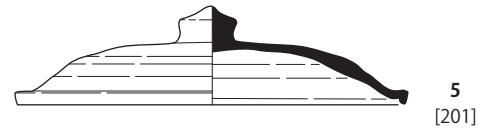
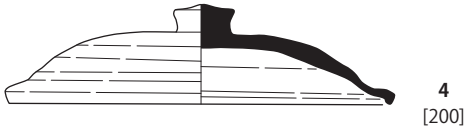
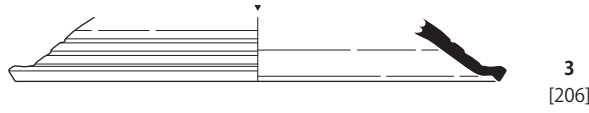
〈**瓶類 (39・44～48)**〉 瓶 B と瓶 D を確認しており、後者が主体となる。瓶 B (44～47) は、口頸部が外反弱くたちあがり先端に向かって極端に薄手となる形態や、頸胴境界に突帯を巡らせるのは V 期的な要素である。頸部接合法は風船技法 A2 類 (44) ないしは A3 類 (45・46) を採用する。瓶 D は容量 11 l 程の大法量 (48) を抽出したが、頸部接合に開口法 B 類ではなく風船技法 A3 類を採用し、頸径大きく頸部が立ち気味となる古手の器形を示す。ただし耳下方が胴部の下へ伸びるという新しい要素が加わっている。体部下半には丁寧な回転ヘラケズリを施す。口径から概ね 19cm 以上、12～15cm、10cm 以下の 3 法量に分かれると推測され、小型品 (39) も生産される。

〈**壺類 (228～255)**〉 壺 A と壺 F を確認している。壺 A は前庭部から出土した口径 12～13cm の蓋を基準に、灰原から蓋身を抽出した。身は口径 10cm 程、容量 3～4 l 程で、脚台のつく器形である。蓋は天井部ヘラケズリし、宝珠形のつまみがつく。蓋身ともに堅緻に焼かれており、降灰や粘着が顕著である。台部は焚口前面土坑付近で足高タイプを確認している。壺 F は窯体内で図化できるものはなかったが、灰原出土遺物として提示した 281 と 282 が焼き色からみると本窯に属するものかもしれない。ただし、この器種は V 期から VI 期にかけて形態的な変化が乏しいため、本窯に伴うものとして扱うのを避けた。

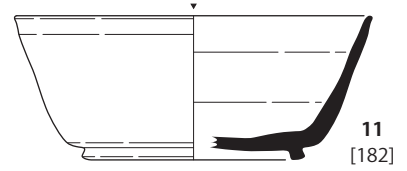
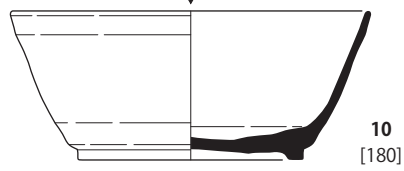
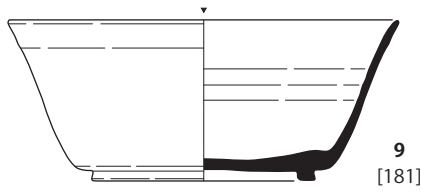
〈舟底状ピット出土 坏B蓋〉



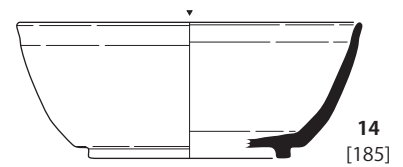
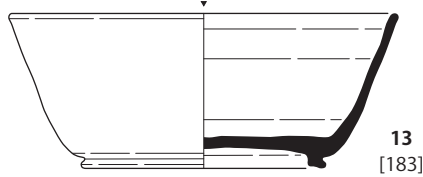
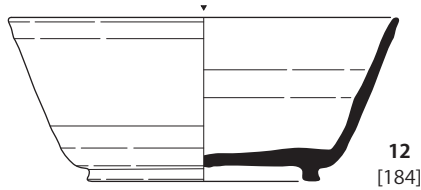
〈灰原出土 坏B蓋〉



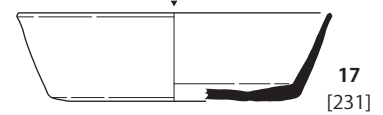
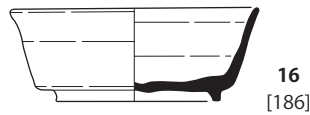
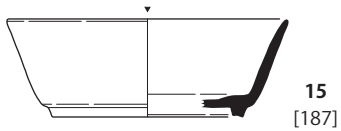
〈窯床・前庭部出土 坏B身〉



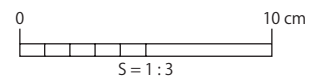
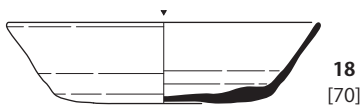
〈灰原出土 坏B身〉



〈灰原出土 坏E〉

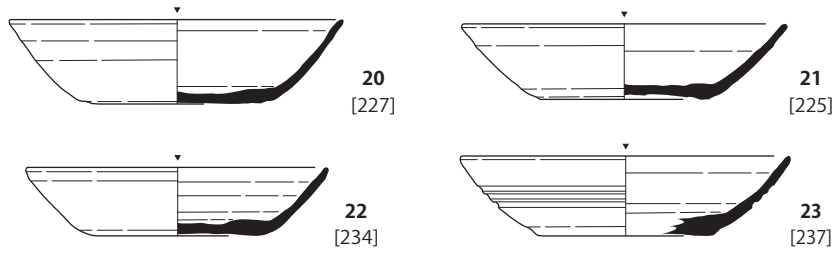


〈舟底状ピット出土 坏A〉



第7図 13号窯 遺物実測図1

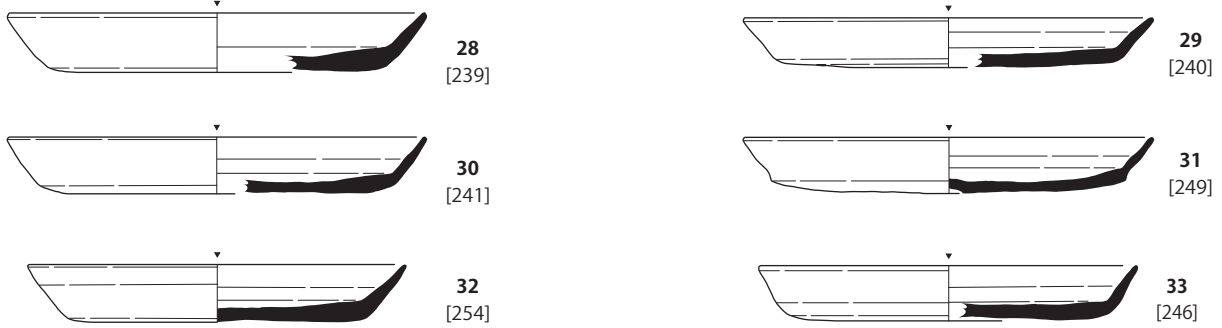
〈灰原出土 坏 A〉



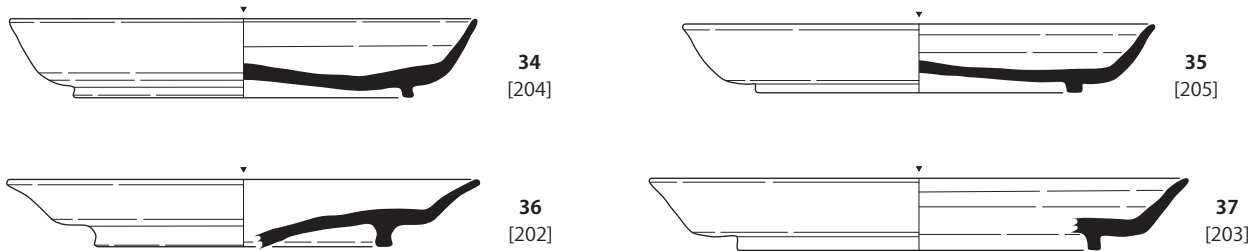
〈窯床・舟底状ピット出土 盤 A〉



〈灰原出土 盤 A〉



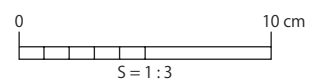
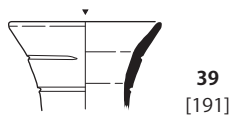
〈灰原出土 盤 B〉



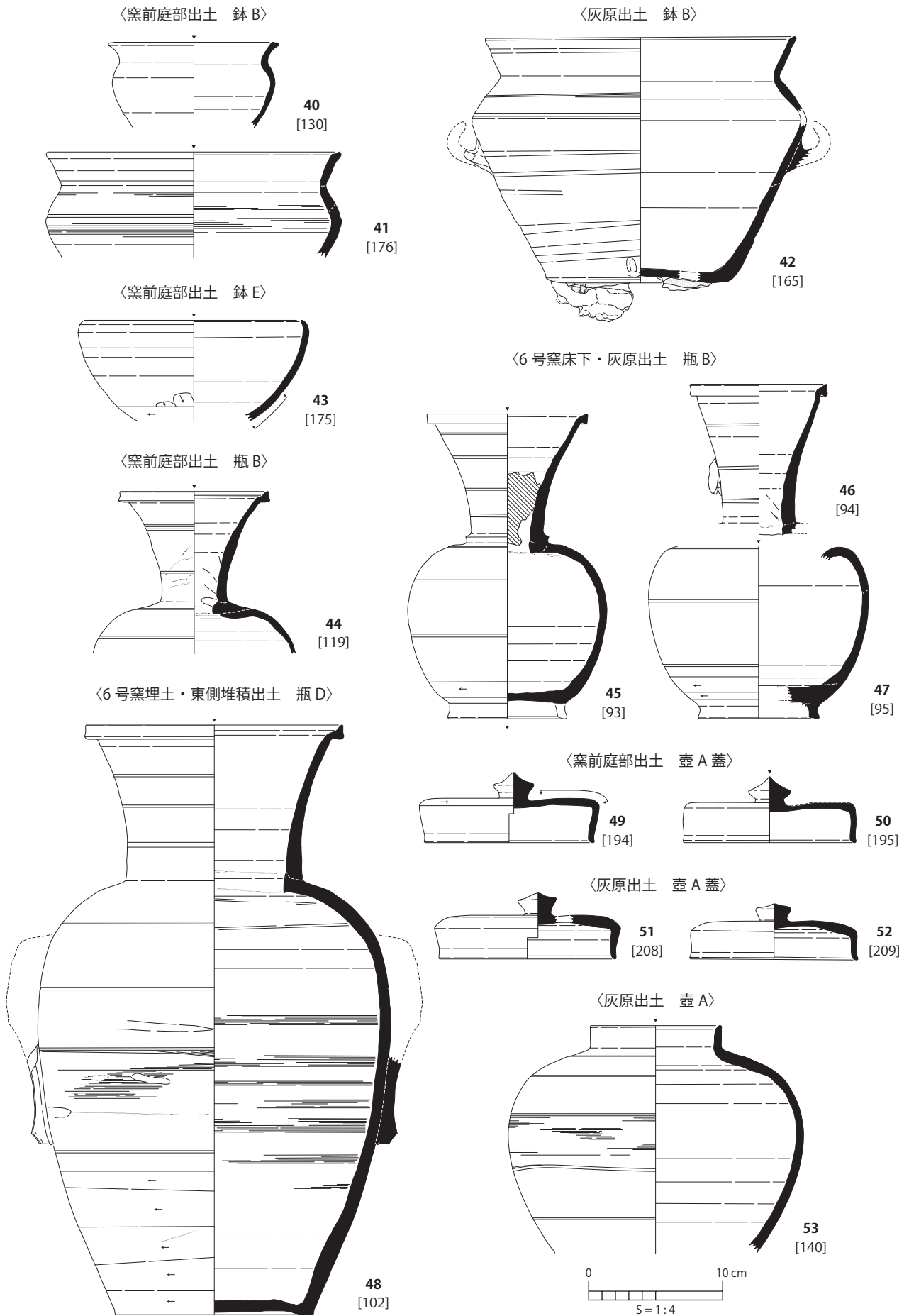
〈舟底状ピット出土 皿〉



〈舟底状ピット出土 小型瓶〉



第 8 図 13 号窯 遺物実測図 2



第9図 13号窯 遺物実測図3

第3節 6号窯関連遺物

6号窯は3窯の中で最も遺物出土量が多いが、窯埋土及び東側堆積には13号窯や5号窯との接合資料も多く、時期が混在する。よって、窯体内出土遺物、窯埋土出土遺物、東側堆積出土遺物の3つに分け、窯体内出土遺物を参照しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第3～5表のとおりである。第3表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の埴皿合わせて78%程の占有率で、ヘラ切り器種の坏盤が伴う。埴は無台Aと有台Bがほぼ同率で存在し、有台皿Bが埴類をしのぐ。無台皿Aは窯埋土でわずかに出土するのみである。坏盤は無台Aがそれぞれ1割程残存する。貯蔵具では瓶類、特に瓶Dが他を圧倒し、9割近くを占める。窯埋土及び東側堆積からは煮炊具の長胴釜が出土しているが、窯体内からの出土はなく、5号窯からの混入かもしれない。各器種の焼成度合いにはバラつきがあるが、灰色～青灰色の製品が多くみられる。以下、各器種の概要を述べる。

第3表 6号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 2,112 / 36）

器種	坏A	盤A	埴A	埴B	皿B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	185	205	354	378	631	1,753
占有率 (%)	10.6	11.7	20.2	21.6	36.0	83.0
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値 (/36)	6	319	310	21	13	359
占有率 (%)	1.7	88.9	86.4	5.8	3.6	17.0

第4表 6号窯 窯埋土器種構成表（口縁部計測値総計 3,027 / 36）

器種	坏B (蓋・身)	坏E	坏A	盤A	埴A	埴B	皿A	皿B	食膳具計	
口縁部計測値 (/36)	31	7	13	782	234	582	731	71	189	2,633
占有率 (%)	1.2	0.5	29.7	8.9	22.1	27.8	2.7	7.2	87.0	
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計			
口縁部計測値 (/36)	60	217	189	78	13	368	26	26		
占有率 (%)	16.3	59.0	51.4	21.2	3.5	12.2	100.0	0.9		

第5表 6号窯 東側堆積器種構成表（口縁部計測値総計 1,412 / 36）

器種	坏B (蓋・身)	坏A	盤A	埴A	埴B	皿A	皿B	食膳具計	
口縁部計測値 (/36)	50	0	360	96	301	182	96	89	1,174
占有率 (%)	4.3	30.7	8.2	25.6	15.5	8.2	7.6	83.1	
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計		
口縁部計測値 (/36)	16	135	131	52	12	215	23	23	
占有率 (%)	7.4	62.8	60.9	24.2	5.6	15.2	100.0	1.6	

1 食膳具

〈**坏 E (66)**〉 口径 13.2cm、底径 9.2cm、器高 4.5cm と、底径大きく体部が立つ深身器形で、坏 A とは異なる器形である。5 号窯埋土出土であるが、5 号窯では衰退した器種で 13 号窯よりも後出的な特徴をもつため、本窯に含めた。しかし、本窯でも有蓋の坏 B の出土は窯体内で認められず、蓋が欠落した状態で残存したものかもしれない。

〈**坏 A (54 ~ 65)**〉 口径 13cm 前後で、器高 2.5 ~ 3cm 前後を測り、径高指数 20 ~ 25 とやや扁平な器形が主体となる。窯埋土出土のやや深身のもの (62・63) や底部が丸く碗形となるもの (59) は、13 号窯製品の混入かもしれない。

〈**盤 A (67 ~ 75)**〉 口径は概ね 14 ~ 15cm、器高 2cm 前後に分布する。時期が下るにつれて体部長が短くなり扁平化する傾向にあるが、舟底状ピット出土のもの (67・69・70) は体部が長く立ち上がり、床面出土のもの (68) はやや体部短く扁平となる。灰原では底部が極めて薄く、器高 1.6cm しかない末期的な器形もみられる (75)。

〈**碗 A (76 ~ 93)**〉 口径 13 ~ 13.5cm 前後を測り、窯床出土のものは径高指数 27 ~ 29 にまとまるが、窯埋土出土のものには 30 以上の深身タイプが含まれる。また前者はやや厚手で底部糸切り痕を残すものが主体となるのに対し、後者は薄手で底面ヘラケズリを施して糸切り痕を消すものが存在する。

〈**碗 B (94 ~ 113)**〉 2 法量存在し、大型Ⅰ類は口径 16 ~ 17.5cm 前後、通常Ⅱ類は口径 14.5 ~ 15.5cm 前後を中心に分布し、量比はおおまかに 1 : 3 であった。Ⅱ類については、径高指数が 30 より大きくなるものと、30 以下の扁平気味になるタイプ (97 ~ 99・109・112) が存在する。器形は体部内湾して立ち上がるものと、外傾して直線的になるものがある。台径はⅠ類が 8cm 台、Ⅱ類が 7cm 前後主体で 6cm 程の小型になるもの (112) が伴う。台径指数はⅡ類で 48・49 を中心に分布する。ヘラケズリは底面まで施して糸切り痕が残らないもの (101・105) もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものが多くみられ、ヘラケズリのないもの (100・102・104・106・109) もある。窯体内出土のものはやや厚手のものが多いが、窯埋土には極めて薄手になるもの (107 ~ 109) が存在する。以上の中で、体部の外傾化、径高指数の低下、高台径の縮小、高台高の低下、つくりの粗雑化、ヘラケズリの省略は、新しい要素にあげられる。

〈**皿 A (114)**〉 窯体内からの出土は認められず、全形の分かるものは窯埋土出土の 1 点のみである。114 は口径 13cm、底径 6.6cm、器高 2.7cm で、分厚い底部から外反して開く器形となる。ヘラケズリはなく、底部付近にカキメ風の工具痕が残る。5 号窯埋土と混在しているが、焼き色から判断して本窯に含めた。

〈**皿 B (115 ~ 136)**〉 食膳具で最も高い占有率をもつ器種である。口径は 13cm 前後を測り、径高指数は 20 ~ 22 を中心に分布し、19 以下の扁平なタイプ (127・128・132) と 24 以上の皿部の深いタイプ (124・125) も存在する。変化は碗 B 同様に高台径の小型化や高台高の低下、あるいは高台の踏ん張りが開く傾向にあるが、逆に高台径が大きめのもの (125・132) や 1cm 以上の高い高台のつくもの (86・87) は古い要素として捉えられる。ヘラケズリは底面まで施すもの (116・118・126・128・131) もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものや、ヘラケズリのないものの方が多い。129 は高台端部が三角形状となり、皿部が碗形となるタイプで、より新しい要素としてあげられる。

2 貯蔵具

〈鉢類(137～141)〉 鉢B・鉢C・鉢Fを確認している。主体となるのは鉢Bで、口径から28cm以上、21～26cm、15cm前後に法量のまとまりがあると推測される。肩がしっかりと屈曲し、内外カキメを施すもの(137)や体部下半に手持ちヘラケズリ、底面に回転ヘラケズリを施すもの(138・139)が認められる。鉢C(140)は口径26cmの無台碗形で、体部上半にロクロヒダを残し、下半から底面にかけて回転ヘラケズリを施す。鉢F(141)は口径17cmの内湾器形。口縁端部を面取りしつつ外面を突出させ、体部に1条の突帯を巡らせる。

〈瓶類(142～155)〉 瓶Bと瓶Dを確認しており、瓶Dが窯体内出土貯蔵具内で8割以上と突出している。特に口径20cm前後で容量8～9l台の大法量は5個体がまとまって出土しており、器形にも統一感があって同一工人による製作を示唆するものである(147～151)。耳が垂れ下がる新しい要素をもつ。ほかに口径14cm前後(144・145・155)と口径12～13cm(容量2～3l前後、142・143・146・153・154)にまとまりがありそうだが、その差は近接している。通常VI₂～VI₃期には耳孔の数に対応して3法量が認められるが、新しくなるにつれてその規格がくずれていく傾向にある。

〈壺類(156～162)〉 壺Aと壺Fを確認している。壺Aは窯床から足高の台部が出土している(156・157)。ほかに窯埋土から口径14.4cmの蓋を抽出しており、つまみ形状や青灰色系の焼き色から13号窯ではなく本窯に含めた。壺Fは、窯床出土で体部から底部に平行線文叩き出し成形を行う個体が認められ、底部が極端に薄手となる(159)。東側堆積出土の162は下層の灰層出土で本窯に伴うものとしたが、内外に釉が付着しており159との焼き色が異なるため、混入の可能性もある。底部にはD類焼台が溶着している。

〈甕類(163)〉 甕は口径30cm以上の大甕と、口径20cm台の中甕(163)を確認しており、後者が多い。163は口頸部が外反気味に立ち上がり、胴部砲弾形となる。胴部の叩き成形は、外面縦軸の平行線文叩き出し(Ha類)後カキメ調整、内面無文当て具後擦り消しを行っている。叩き工具痕の集計・分類はできていない。

3 煮炊具

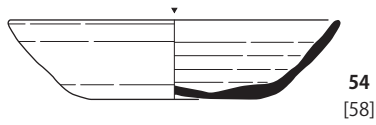
長胴釜のみ窯埋土と東側堆積で確認している。通常は土師器煮炊具として焼成されるものを還元焰焼成している器種で、胎土も混和材の礫粒を多量に含むものが存在する。後述する5号窯土器集中でまとまった出土があるが、それらに比べて164は若干焼き色が異なり、土器集中出土遺物が白色から明青灰色を呈するのに対し、164は青灰色が濃く、本窯由来として扱った。ただし口縁端部の摘み上げに大きな違いは認められず、時期差を捉えることはできない。164は口径23.1cmを測り、叩き工具痕は外面平行線文叩き出し(He類)となり、内面当て具痕は擦り消ししていて不明である。カキメ調整は行っていない。

4 その他の製品

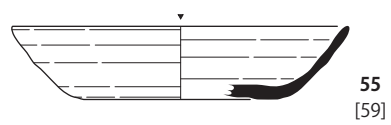
165と166は小型貯蔵具の瓶である。165は体部下半がすぼまる器形で、166はいわゆる徳利形の後出的な器形を呈する。両方ともに底部糸切り痕が残る。

167～171は管状土錘(陶錘)である。全て窯体外からの出土であるため、13号窯及び5号窯からの混入の可能性も考えられる。図化した5点は窯埋土と東側堆積からの出土で、これらのほかに

〈窯床出土 坏 A〉



54
[58]



55
[59]

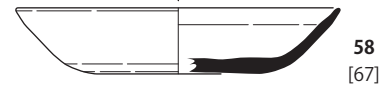
〈窯埋土出土 坏 A〉



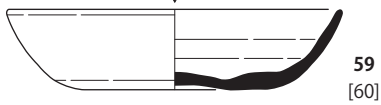
56
[69]



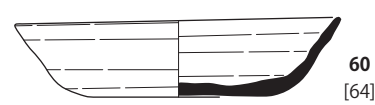
57
[62]



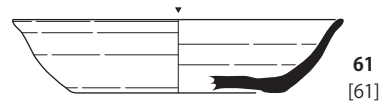
58
[67]



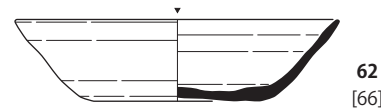
59
[60]



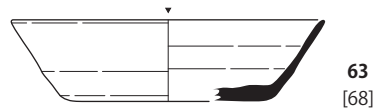
60
[64]



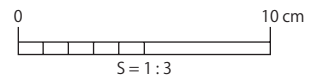
61
[61]



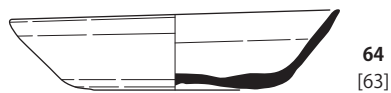
62
[66]



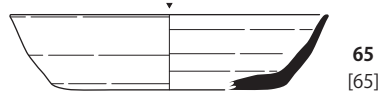
63
[68]



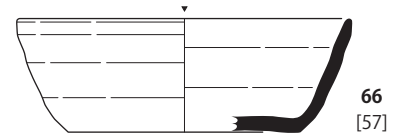
〈東側堆積出土 坏 A〉



64
[63]



65
[65]



66
[57]

〈5号窯埋土出土 坏 E〉

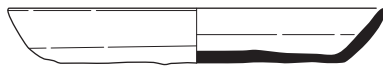
〈窯床・舟底状ピット出土 盤 A〉



67
[76]



68
[79]

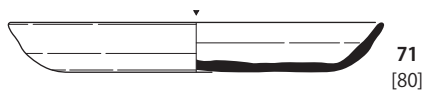


69
[78]

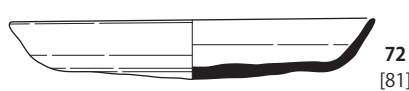


70
[77]

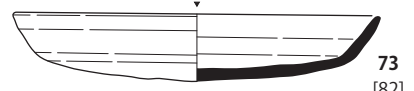
〈窯埋土出土 盤 A〉



71
[80]



72
[81]



73
[82]

〈灰原出土 盤 A〉

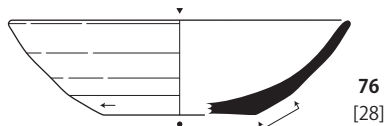


74
[245]

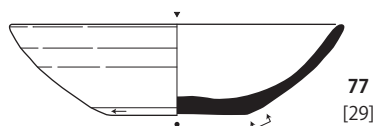


75
[242]

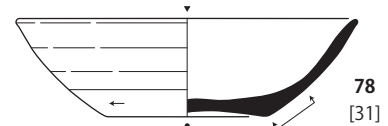
〈窯床出土 碗 A〉



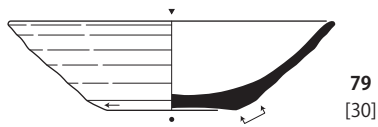
76
[28]



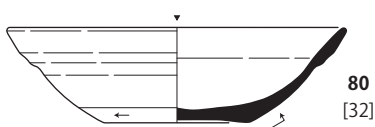
77
[29]



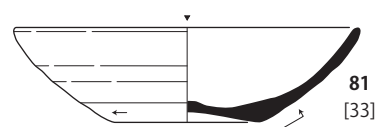
78
[31]



79
[30]



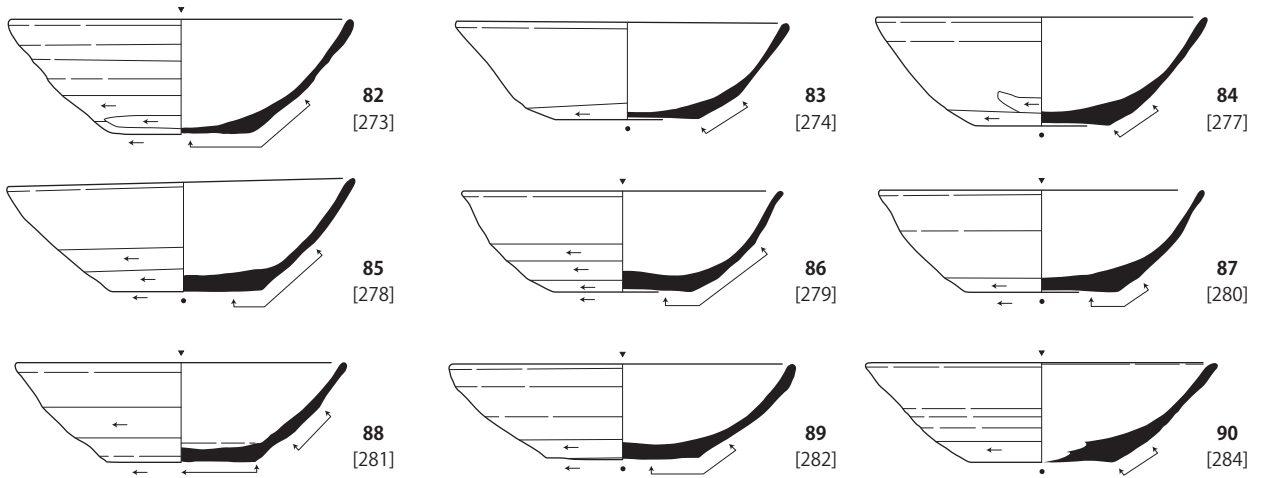
80
[32]



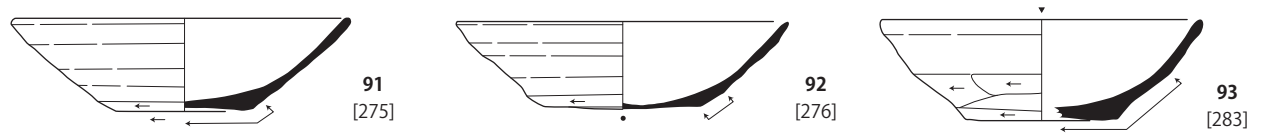
81
[33]

第10図 6号窯 遺物実測図1

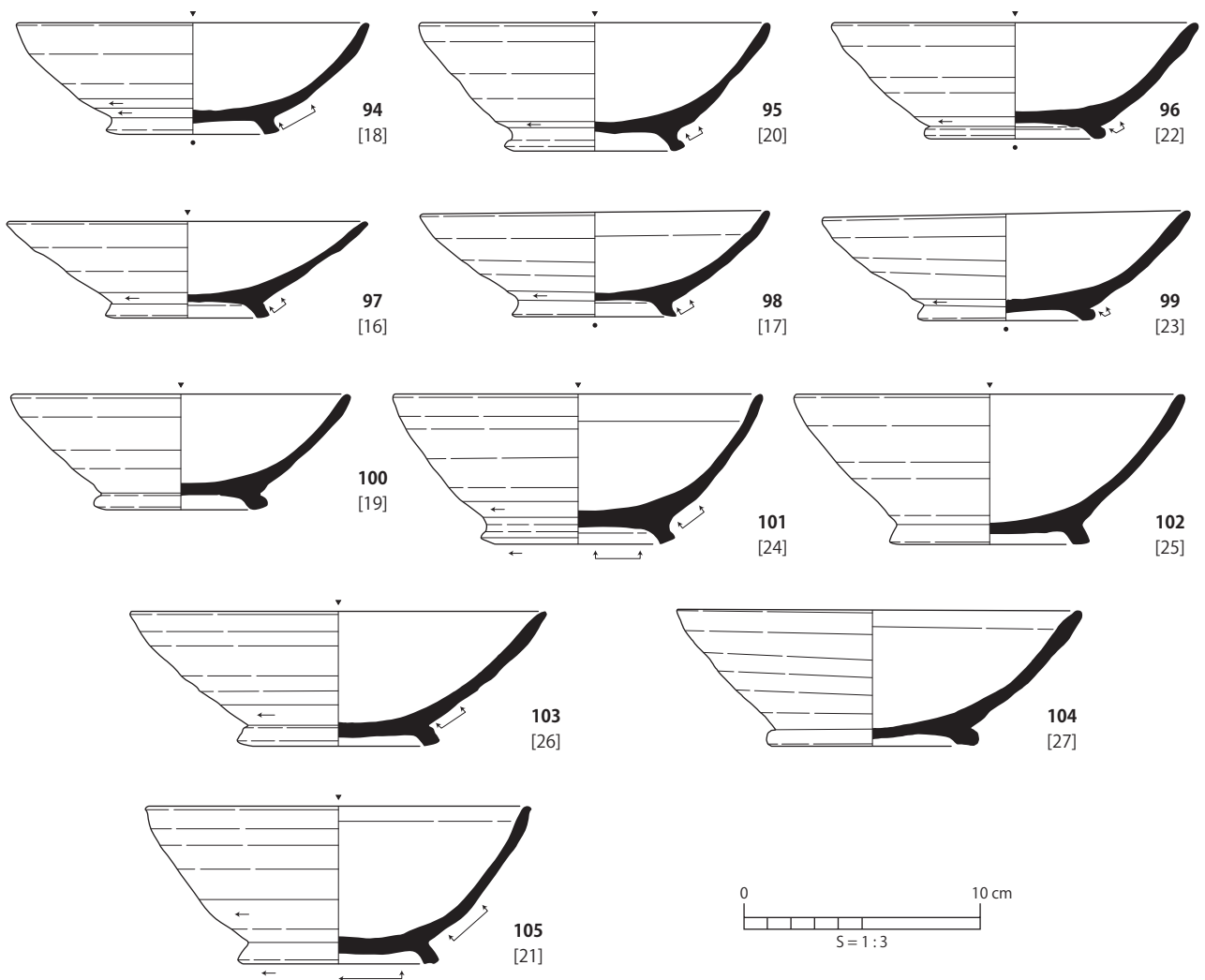
〈窯埋土出土 塚 A〉



〈東側堆積出土 塚 A〉

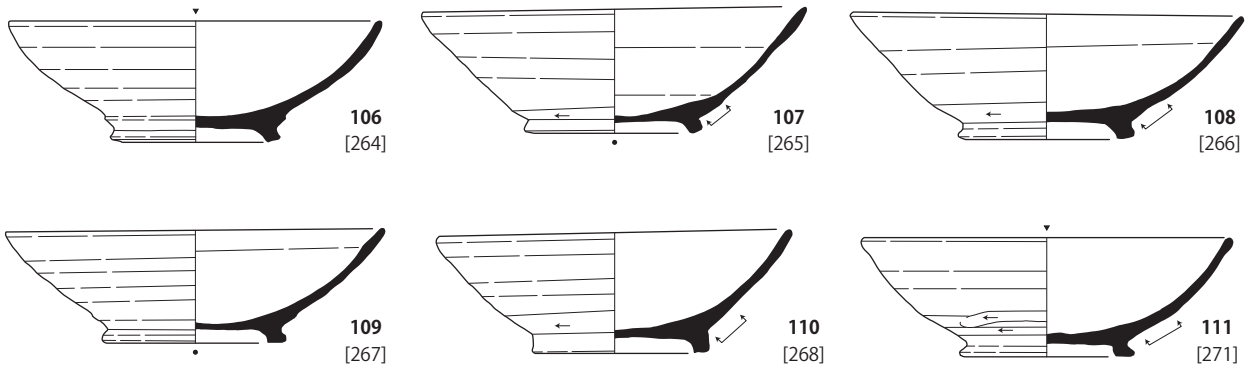


〈窯床・舟底状ピット出土 塚 B〉



第 11 図 6 号窯 遺物実測図 2

〈窯埋土出土 埴B〉



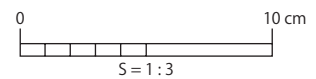
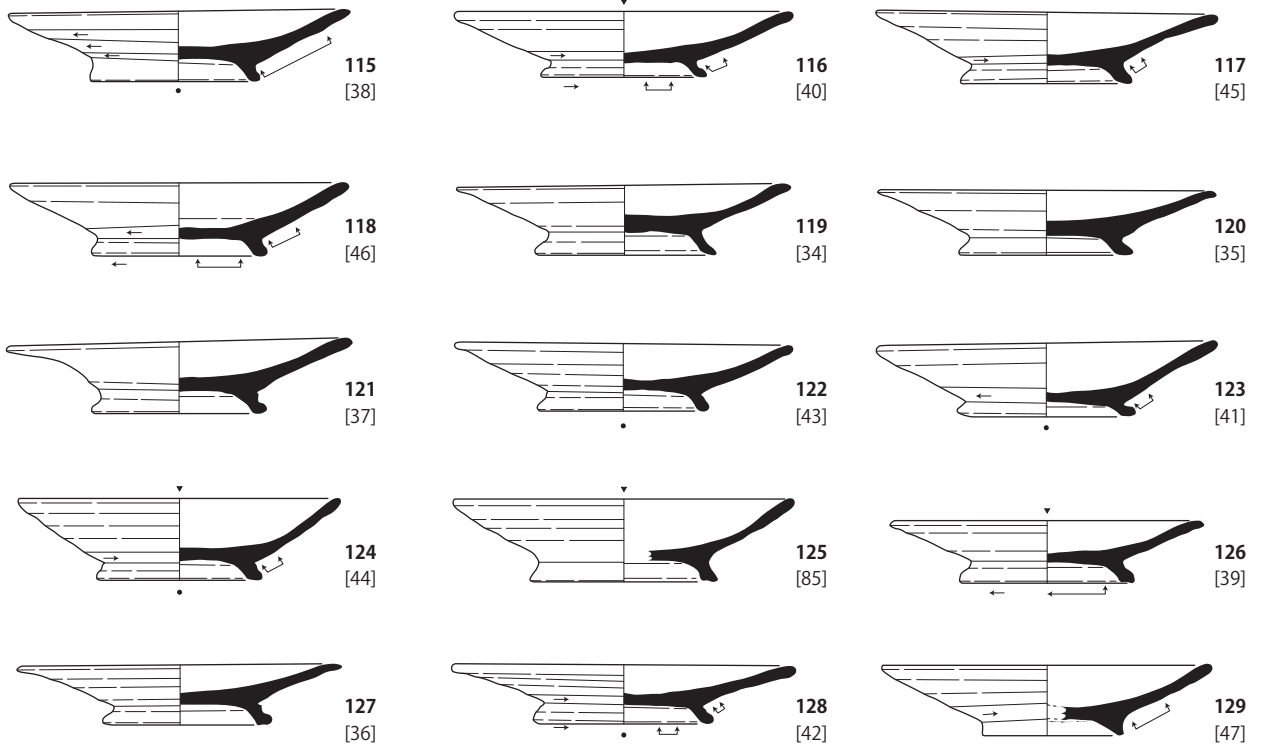
〈東側堆積出土 埴B〉



〈窯埋土出土 皿A〉

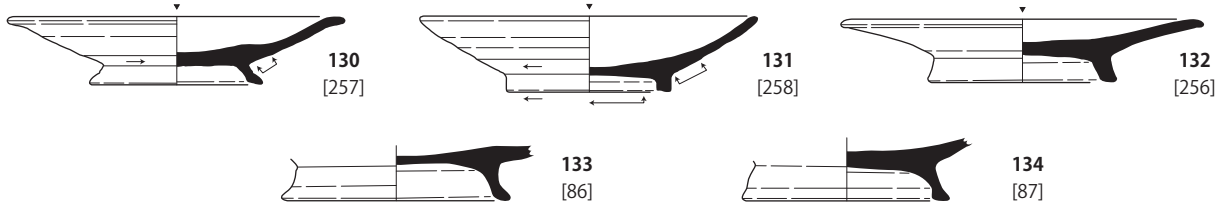


〈窯床・舟底状ピット出土 皿B〉

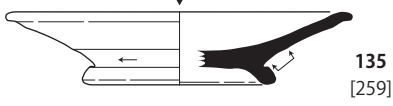


第12図 6号窯 遺物実測図3

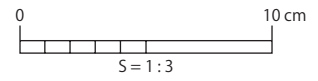
〈窠埋土出土 皿 B〉



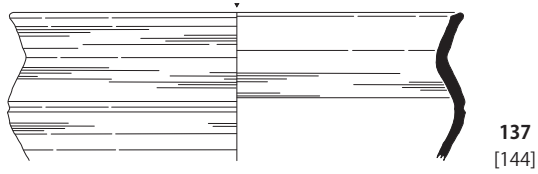
〈東側堆積出土 皿 B〉



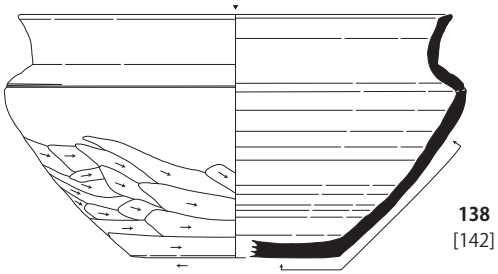
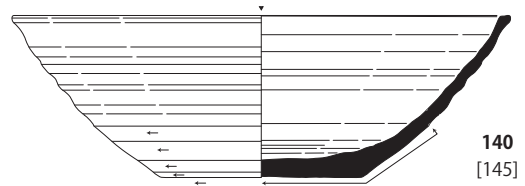
〈13号窠前面土坑上層出土 皿 B〉



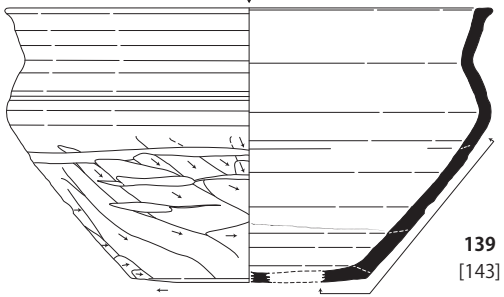
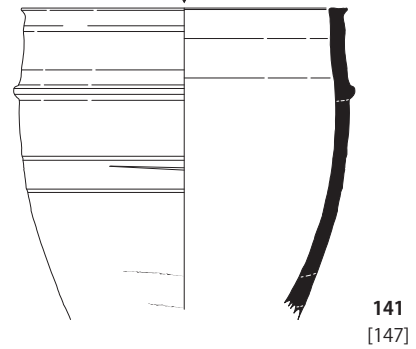
〈窠埋土出土 鉢 B〉



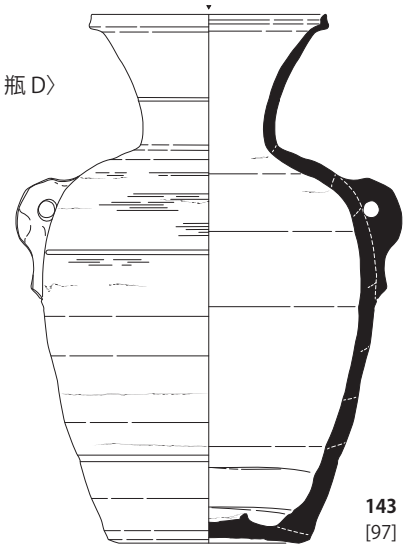
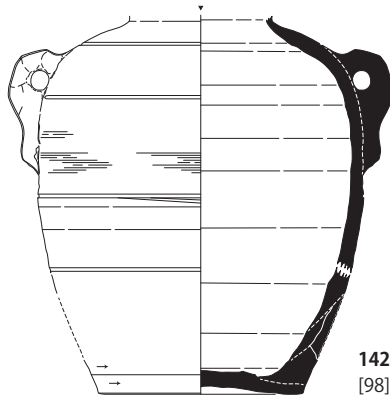
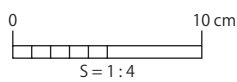
〈窠埋土出土 鉢 C〉



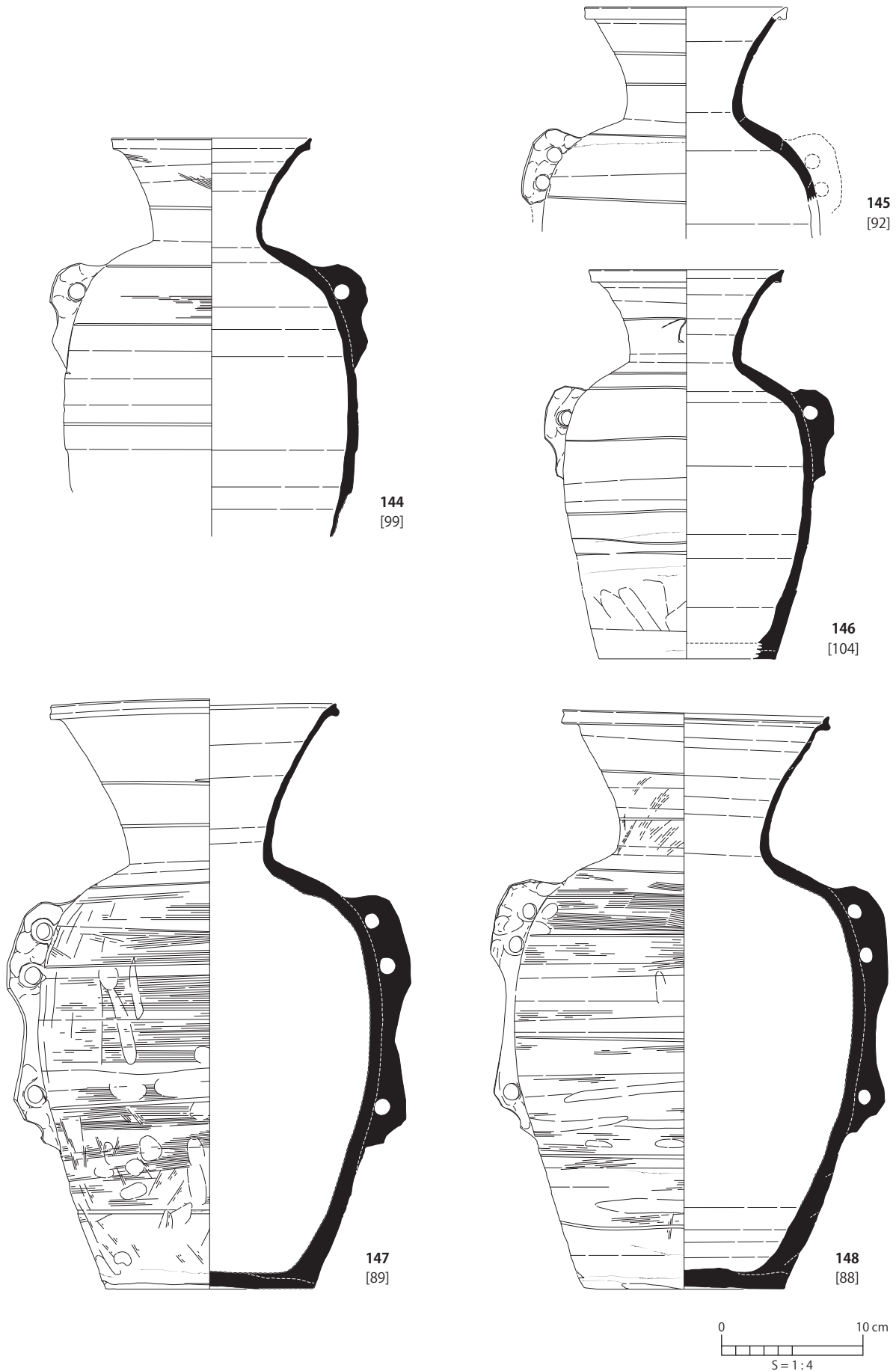
〈窠埋土出土 鉢 F〉



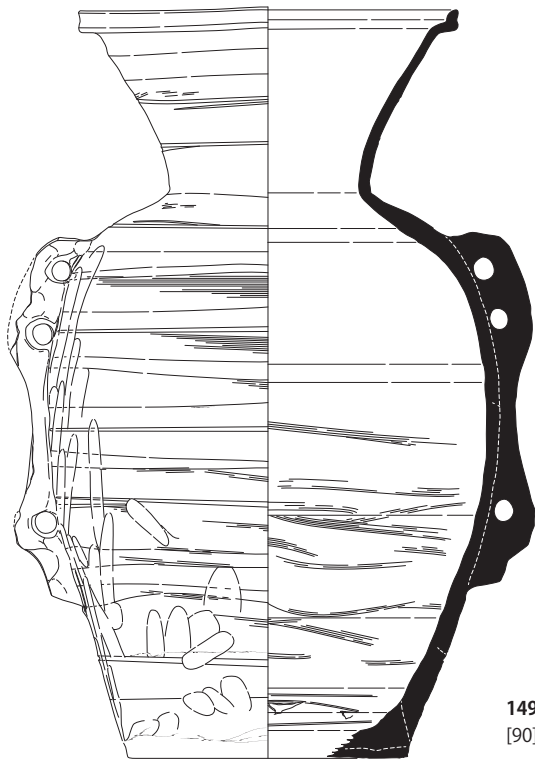
〈窠床・前庭部出土 瓶 D〉



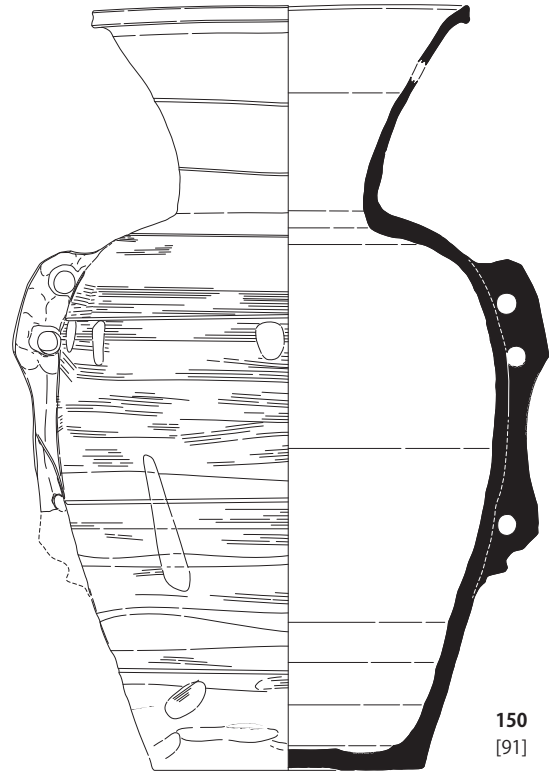
第 13 図 6 号窠 遺物実測図 4



第14図 6号窯 遺物実測図5

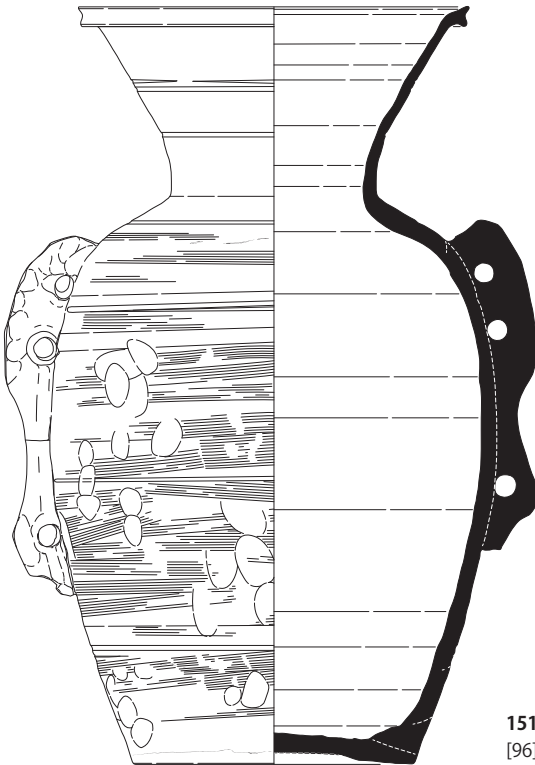


149
[90]

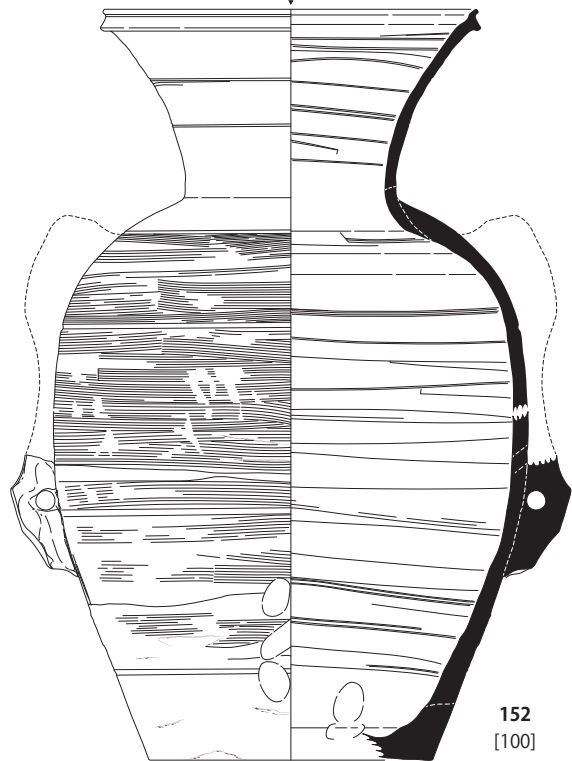


150
[91]

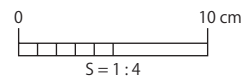
〈窯埋土出土 瓶D〉



151
[96]

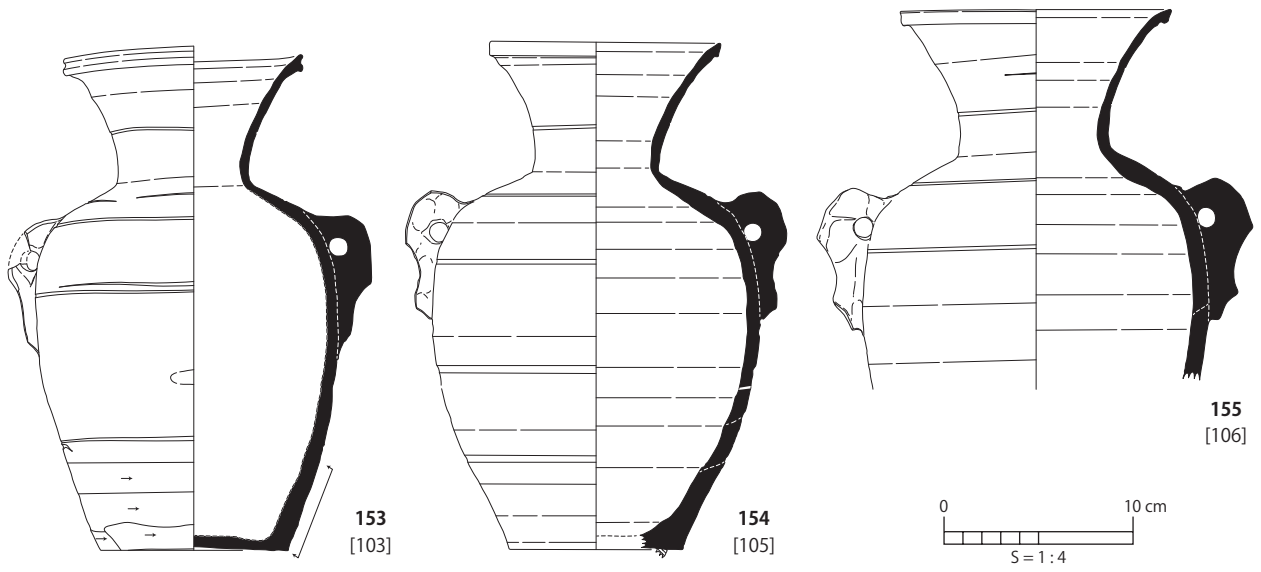


152
[100]

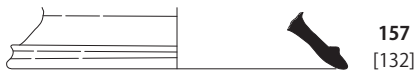
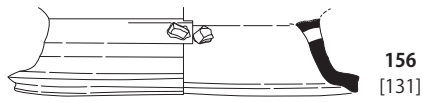


第15図 6号窯遺物実測図6

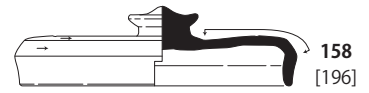
〈東側堆積出土 瓶D〉



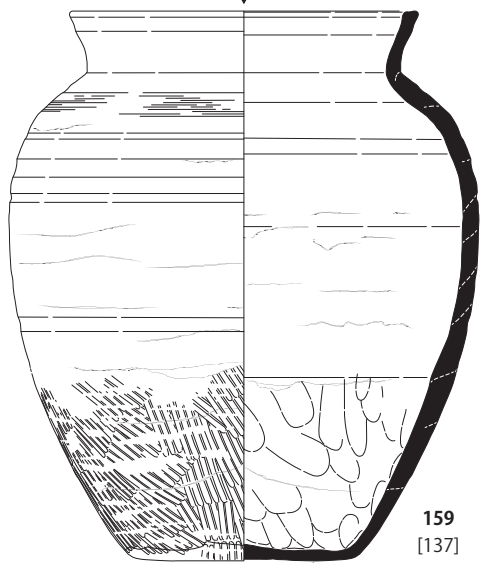
〈窯床出土 壺A 台部〉



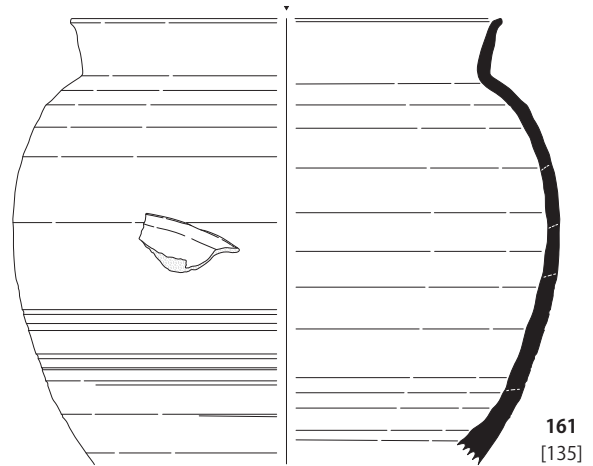
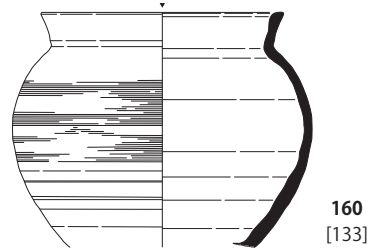
〈窯埋土出土 壺A 蓋〉



〈窯床出土 壺F〉

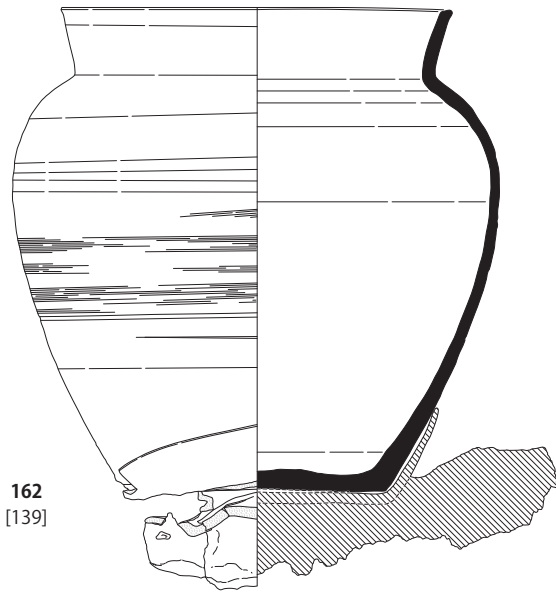


〈窯埋土出土 壺F〉



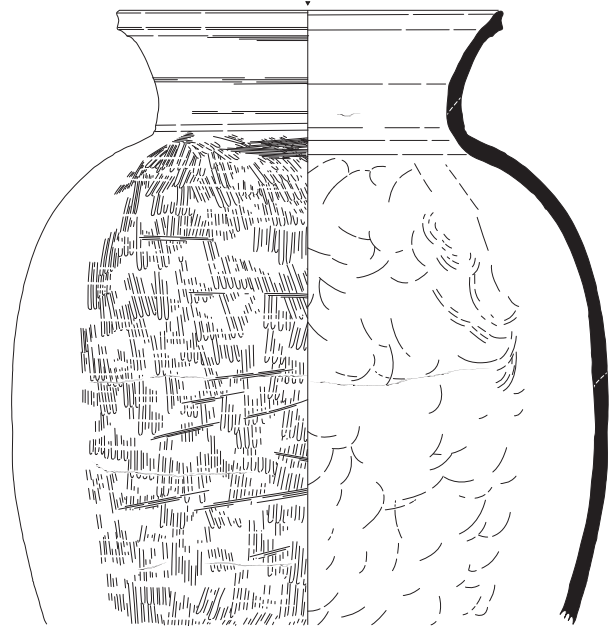
第16図 6号窯 遺物実測図7

〈東側堆積出土 壺 F〉



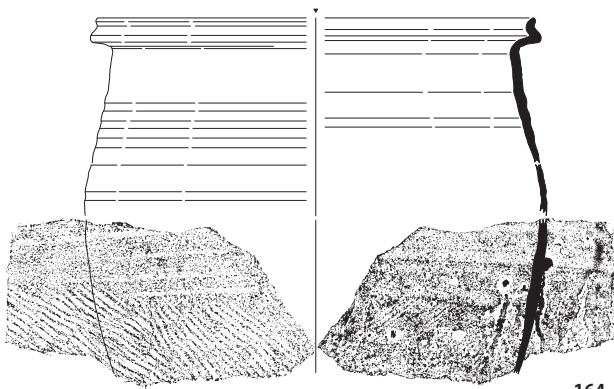
162
[139]

〈東側堆積出土 中甕〉

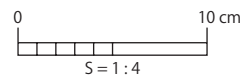


163
[114]

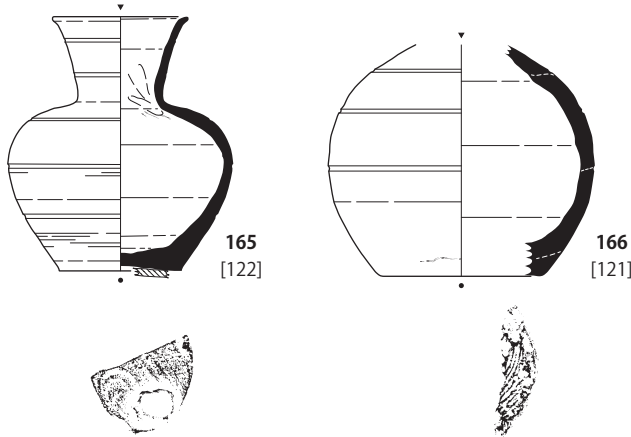
〈窯埋土出土 長胴釜〉



164
[152]



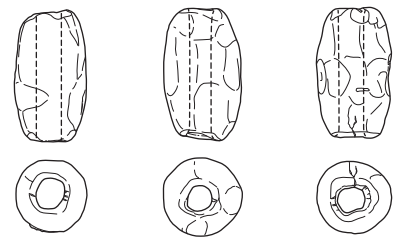
〈窯埋土出土 小型瓶〉



165
[122]

166
[121]

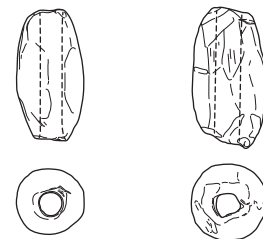
〈窯埋土・東側堆積出土 管状土錘〉



167
[304]

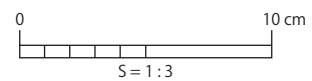
168
[305]

169
[306]



170
[307]

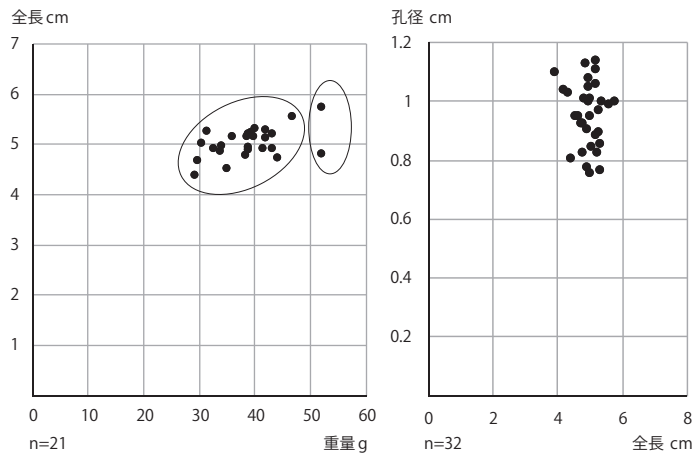
171
[303]



第 17 図 6 号窯 遺物実測図 8

灰原から33点が出土している（未図化）。その中で、計測可能な32点を対象として第18図に法量・重量分布を示した。

図左の全長と重量の関係では、重量30～50gと50g以上の2つのグループに分けられ、前者は全長4～6cm、最大幅2.5～3cm程で推移し、全長に比例して重くなる傾向にある。後者は2点のうち全長が5cmを下回るものは最大幅が3.4cm程と計測点数中で最も大きく、より膨らみの強いものである。



第18図 管状土錘法量・重量分布図

図右の全長と孔径の関係では、全長に比例することなく、孔径は全体的に0.8～1.2cmの間にまとまる傾向にある。焼成度合いは白っぽい生焼けのものから降灰・釉付着するものまでバラつきがあり、表面には指頭圧痕が明瞭である。

第4節 5号窯関連遺物

5号窯は、窯体構造（下降傾斜燃焼部構造、焼成部口の急激な絞り込み、焼成部床面の急傾斜と段構築、釣り鐘形の焼成部平面形）から、10世紀代に位置づけられることはほぼ間違いない（小松市教委2015）。出土遺物は6号窯と同様に窯体内、窯埋土、本窯由来と考えられる土器集中に分けて、窯体内出土遺物を参照しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第6～8表のとおりである。第6表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の碗皿合わせて86%程と占有率が高く、ヘラ切り器種の坏Aがわずかに残存する。碗は無台Aよりも有台Bが優占し、有台皿Bが伴う。無台皿Aは確認できていない。貯蔵具では鉢

第6表 5号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計 1,101 / 36）

器種	坏A	碗A	碗B	皿B	食膳具計			
口縁部計測値 (/36)	119	193	304	224	840			
占有率 (%)	14.2	23.0	36.2	26.7	76.3			
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)		壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	99	35	31	62	52	248	13	13
占有率 (%)	39.9	14.1	12.5	25.0	21.0	22.5	100.0	1.2

第7表 5号窯 窯埋土器種構成表（口縁部計測値総計 664 / 36）

器種	坏A	碗A	碗B	食膳具計			
口縁部計測値 (/36)	92	145	89	326			
占有率 (%)	28.2	44.5	27.3	49.1			
器種	鉢類	瓶類 (瓶D内訳)		壺類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	135	140	140	37	312	26	26
占有率 (%)	43.3	44.9	44.9	11.9	47.0	100.0	3.9

第8表 5号窯 土器集中器種構成表（口縁部計測値総計 599 / 36）

器種	坏 A	盤 A	碗 A	碗 B	皿 B	食膳具計	
口縁部計測値 (/36)	105	7	166	39	51	368	
占有率 (%)	28.5	1.9	45.1	10.6	13.9	61.4	
器種	鉢類	瓶類 (瓶 D 内訳)		壺類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	0	144	73	2	146	85	85
占有率 (%)	0.0	98.6	65.2	1.4	24.4	100.0	14.2

類の出土が多く、壺と甕がそれに次ぐ。特に狭口なで肩（あるいはやや肩張り）の壺 G や大型厚手で甕に類する甕形深鉢は特徴的な器種である。瓶類の出土が最も少ない。なお、灰原斜面下で検出した SK07 から本窯に伴う可能性の高い貯蔵具が出土しており、残存率が高い製品を含んでいたため図化した。煮炊具は窯体内、窯埋土、土器集中の3箇所すべてで長胴釜が出土しており、本窯で生産されたと考えられる。各器種の焼成度合いは不良なものが多く、白色の生焼けや黄～橙色の土師質のものが目立つ。後者は無垢土師器として意図的に焼成された可能性があるが、須恵器器種として一括し、図化したものは断面白抜き表現としている。以下、各器種の概要を述べる。

1 食膳具

〈坏 A (172～180)〉 本窯が属する 10 世紀代においては衰退器種にあたる。ただし、当窯跡群 1 号窯（1-A 号窯）灰原や戸津 37・44・47 号窯等、碗皿器種統一段階の初期に坏 A や盤 A が残存する現象が確認されており、系譜の異なる器形の導入も指摘されている（小松市教委 1993）。口径は 13～14cm 前後で、径高指数は 20 未満の扁平器形（172）、20～24 のやや扁平な器形（173～175・177・180）、25 以上の深身器形（176・178・179）と多様で、窯床出土のものに限ってみても統一感に欠ける。

〈碗 A (181～185)〉 口径 13cm 前後を測り、窯床出土のものは底径 6cm 以上、ほか前庭部・窯埋土出土のものは底径 5cm 前後である。後者はヘラケズリを行っているが、前者は底部付近のヘラケズリしない後出的なタイプである。径高指数は 28～35 前後に分布する。

〈碗 B (186～196)〉 2 法量存在し、大型 I 類は口径 15.5～17cm 前後、通常 II 類は口径 13～15cm 前後に分布する。I 類は径高指数 32～34（189・190）、37（191・196）があり、台径指数は 46～49 前後である。II 類は径高指数 33・34 程で、台径指数 44～48 前後となる。土器集中出土の 194 は台径指数 50 以上と高台径が大きく、降灰する堅緻焼成で混入の可能性が高い。逆に 188 は台径指数 44 と高台径が小さく体部が外傾する新しいタイプである。高台のつくりは全体的に雑で、ベタ高台気味となるものが散見される（192・193・195）。

〈皿 B (197～201)〉 口径は 13～14cm 前後、台径 6～7cm を測り、径高指数 21 のやや扁平なタイプ（200）と 25 前後の皿部の深いタイプ（197～199）が存在する。台径指数は 48～53 程だが、201 は台径指数 45 の小型高台で碗形の皿部をもつ新しいタイプである。197 の底面ヘラケズリは砂粒の動きから判断したが、入念ではなく、ナデ仕上げが主体である。

2 貯蔵具

〈鉢類(202～209)〉 鉢 B と鉢 F を確認している。主体は鉢 B で、口径 20～24cm 前後にまとめ、伝統的な肩が屈曲して口頸が長く外傾するタイプ（202）のほか、口頸が長く直立するタイプ（203）

や、肩が内湾して口頸が短く内傾するタイプ(204・205・207・209)や短く直立するタイプ(205・208)は10世紀代に特徴的な新しい器形である。未図化だが、この新器形は破片で窯床でも確認している。底面にかけて手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施す。208は体部下位にススが付着する。鉢F(210)は口径17.8cmを測り、口縁端部を外反させ、体部に2条の突帯を巡らせる。器面調整は粗く、底部は糸切り後ヘラ先刺突する。

〈瓶類(213～220)〉 瓶Bと瓶Dを確認している。土器集中出土の瓶B(211・212)は口径10cm程、台径8cm程を測るが、両方ともゆがみが激しく誤差があるかもしれない。瓶Dは耳孔に対応した法量規格がくずれて捉えづらいが、3法量は継続すると推測される。土器集中から小法量がまとまって出土しており、いずれも厚手で器面調整が雑な傾向にあり、沈線が乱れて耳が左右非対称となるものが多い(213～217)。窯埋土出土の218は口縁端部と角張る耳形態から本窯に含めたが、薄手で6号窯埋土出土品と接合するため、混入の可能性もある。SK07から抽出した219・220は口径22cm程の大法量で、胴部の膨らみが小さく肩張りとなる器形や外反する口頸部は10世紀代の特徴である。

〈壺類(221～224)〉 壺A'と壺Gを確認している。壺A'(221・222)は無蓋の壺A器形として分類したが、口径17cm前後と壺Aに比べて法量に大きな差がある。221は叩き成形を行っており、外面平行線文叩き出し(He類)後カキメ調整、内面無文当て具(SD類)後擦り消しを施す。狭口の壺G(223)は窯床出土で確実に本窯に伴う。口径8.3cm、容量4.5lを測り、体部下位にヘラケズリを施す。224も壺Gとしたが規格が異なり、胴部のつくりが瓶Bのような肩丸となる。

〈甕類(225～227)〉 窯床・窯前庭部・窯埋土で3個体の平底甕を確認しており、全形が分かるもので口径と高さが29cm程の横に広がる器形(225)、口径17.8cm、器高35.4cmと概ね器高が口径の倍になる縦長器形(226)がある。どちらも容量15～16l前後となる。口頸は短く外反し、胴部成形は全て外面平行線文叩き出し(He類)、内面無文当て具(SD類)後擦り消しを行っている。また225は厚手づくり、226はやや薄手づくりとなる。

〈甑形深鉢(228)〉 168はSK07出土だが、本窯由来のものとして抽出した。第1節で述べたとおり、当窯跡群で初めて確認された器種である。口径35.6cmを測り、胴部成形は外面平行線文叩き出し成形(Ha類)、内面当て具痕擦り消しを行っており、厚手のつくりをもつ。器面に粘土紐接合痕が観察でき、焼き色は内面赤灰色系の酸化焰焼成気味だが、焼き締まりは強い。槽形の鉢A器形に系譜を求めることができそうだが、大型厚手でむしろ甕に類する器形であると考えられる。

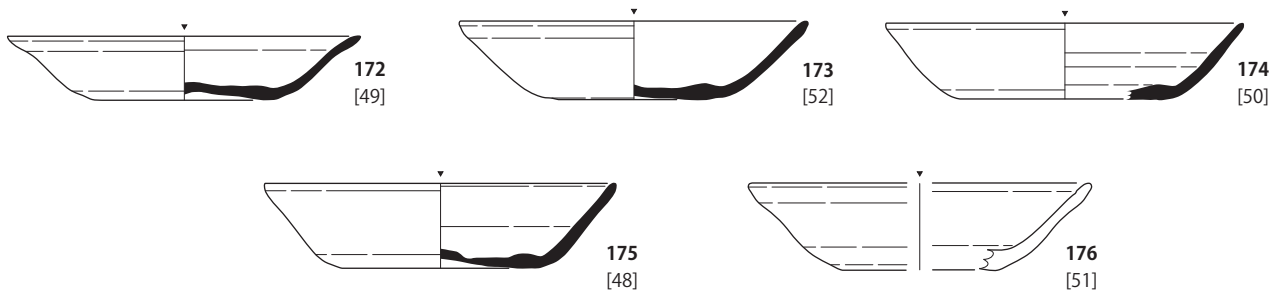
3 煮炊具

長胴釜を窯体内・窯埋土・土器集中で確認している。器形の分かる残存率の良いものは土器集中からまとまって出土しており、口径20cm前後(229～231)と15cm程(232)がある。極めて薄手のつくりをしており、口縁端部を長く摘み上げて折り返すタイプが主体で、胴部はやや下膨れ状となる。総じて成形は外面平行線文叩き出し(He類)、内面当て具痕(確認できたものはHe類)を擦り消ししていて、カキメ調整は行っていない。

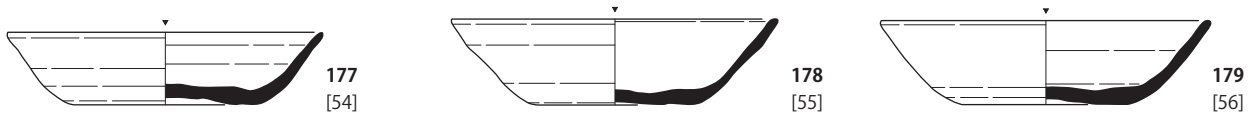
4 その他の製品

233はコップ形で、口径12cm、底径8cm、器高11cm程を測る筒形平底の器形である。つくりは丁寧で、体部に5～6条の沈線を施し、底面に糸切り痕を残す。既に有蓋器種であることが蓋の出土から指摘されており(小松市教委1993・2005)、本資料も内外面の焼き色の違いから有蓋であることが分かる。

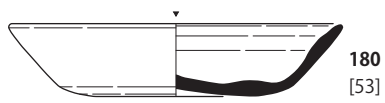
〈窯床出土 坏 A〉



〈土器集中出土 坏 A〉



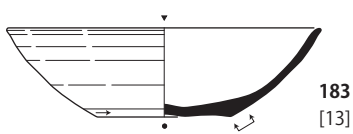
〈窯埋土出土 坏 A〉



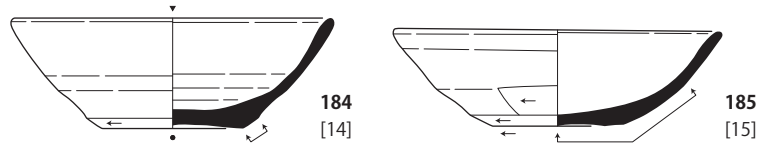
〈窯床出土 碗 A〉



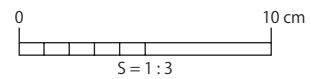
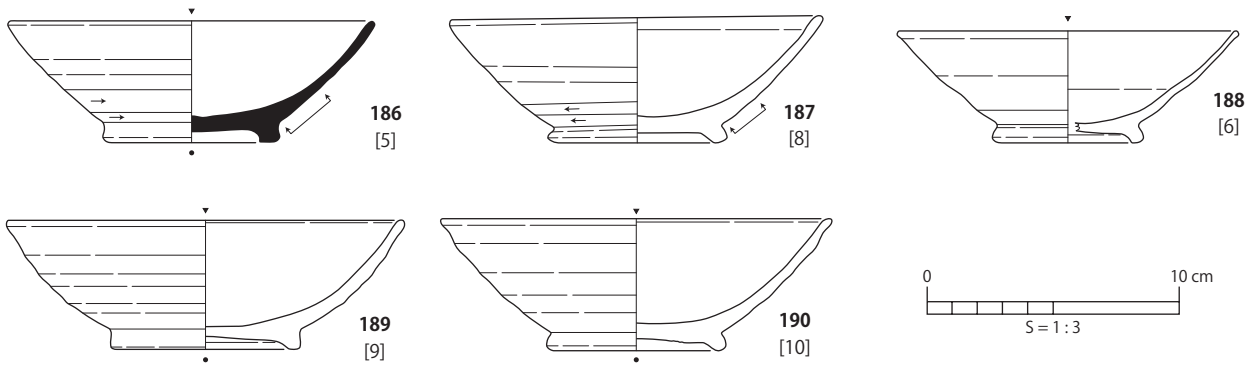
〈前庭部出土 碗 A〉



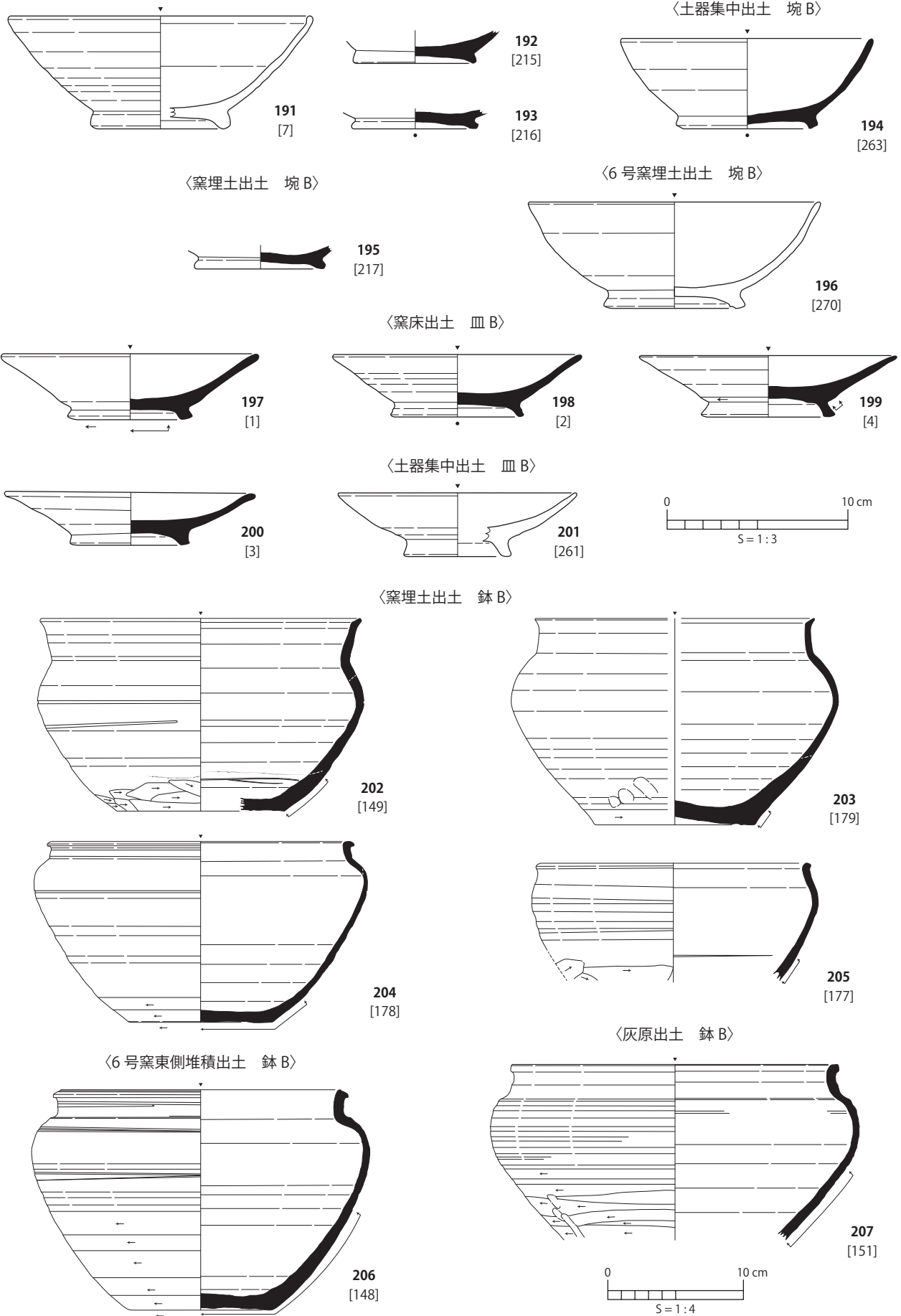
〈窯埋土出土 碗 A〉



〈窯床出土 碗 B〉

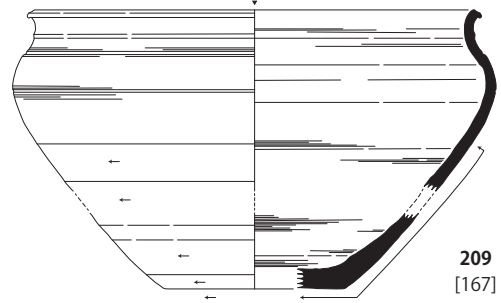
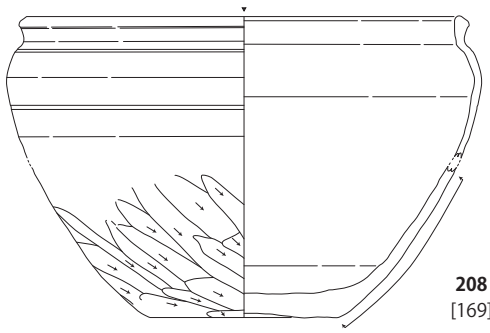


第 19 图 5 号窯 遺物実測图 1

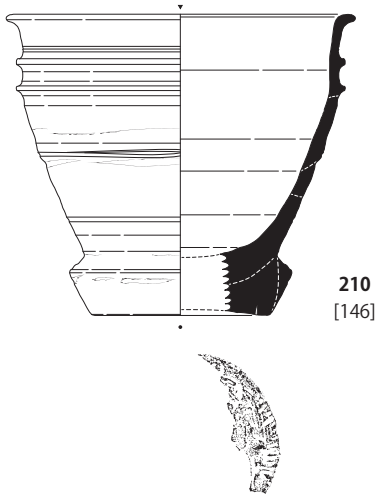


第20図 5号窯 遺物実測図2

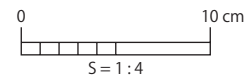
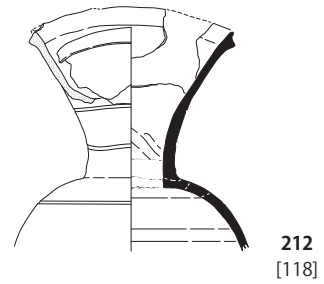
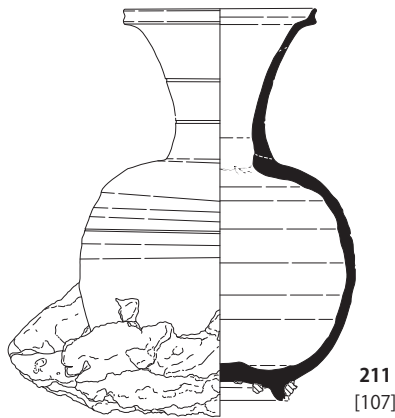
〈SK07 出土 鉢 B〉



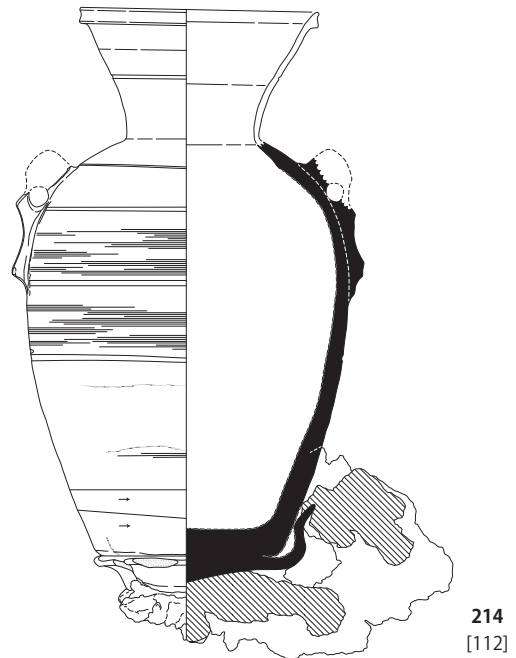
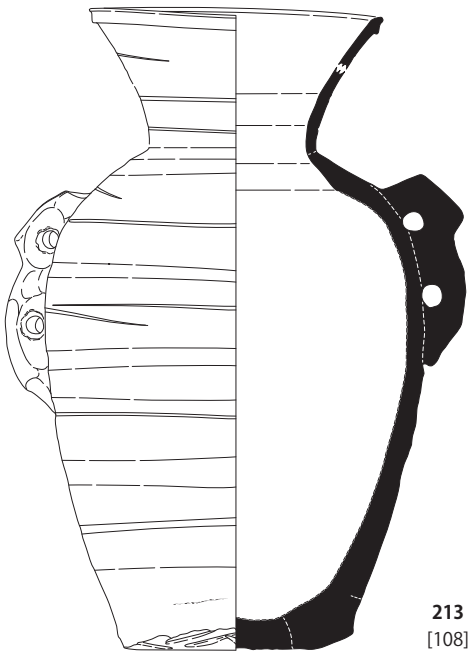
〈窯前庭部出土 鉢 F〉



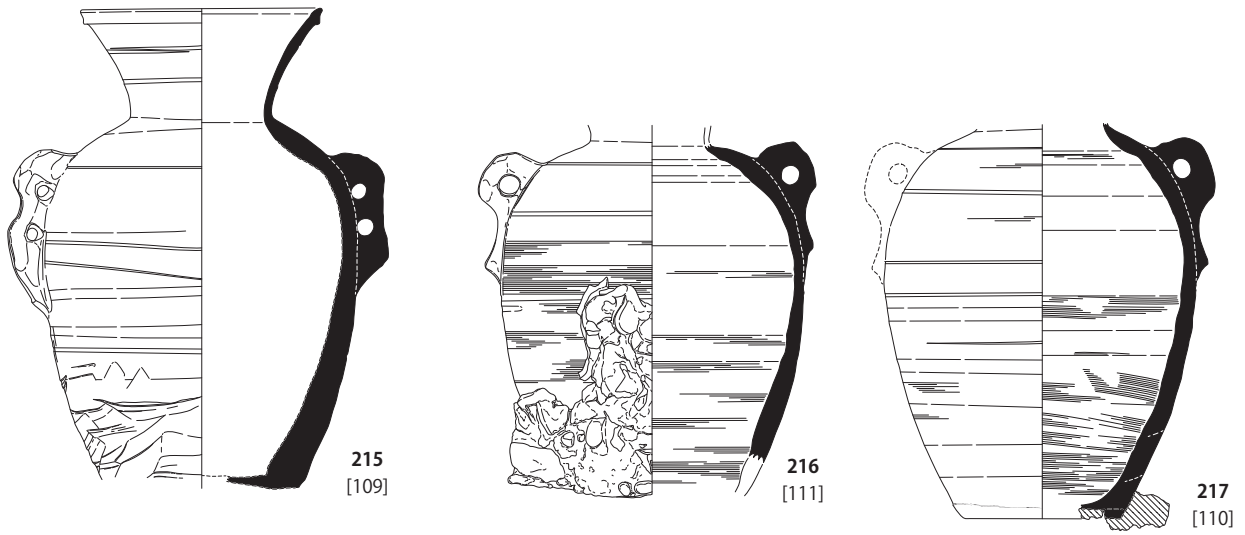
〈土器集中出土 瓶 B〉



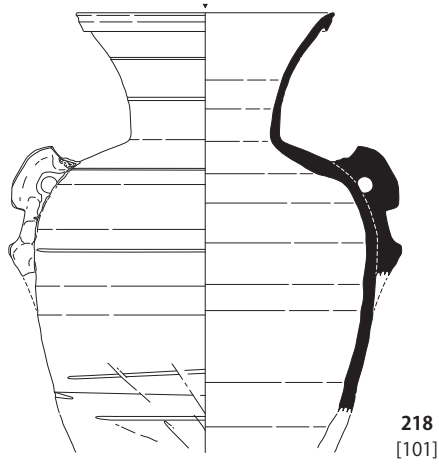
〈土器集中出土 瓶 D〉



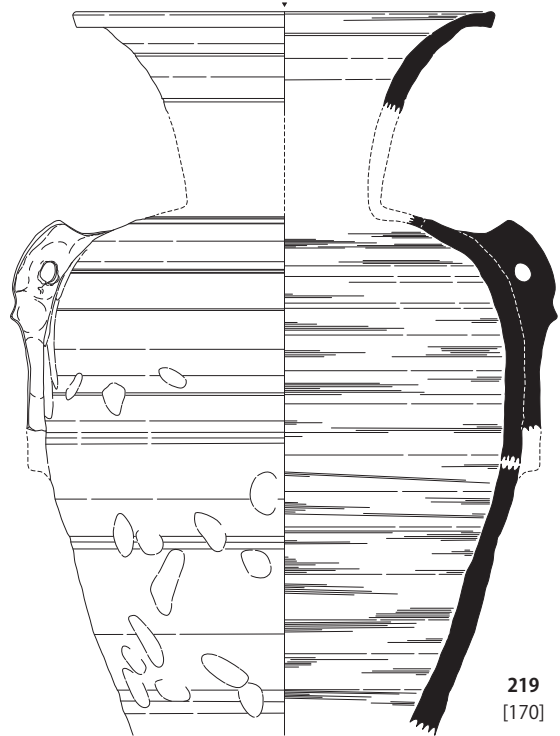
第 21 図 5 号窯 遺物実測図 3



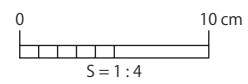
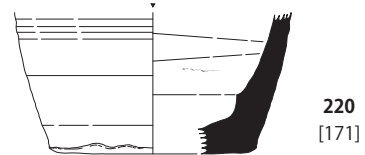
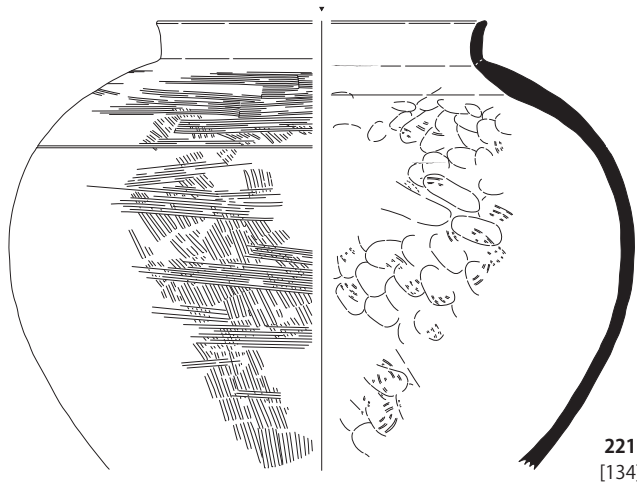
〈窯埋土出土 瓶D〉



〈SK07出土 瓶D〉

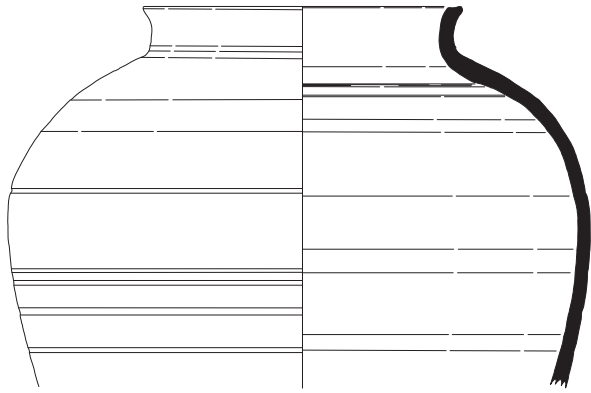


〈土器集中出土 壺A〉



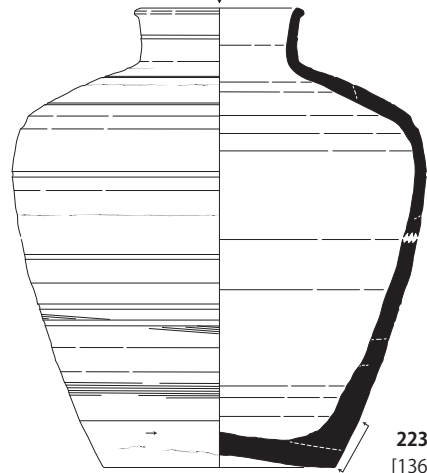
第22図 5号窯 遺物実測図4

〈窯埋土出土 壺 A〉



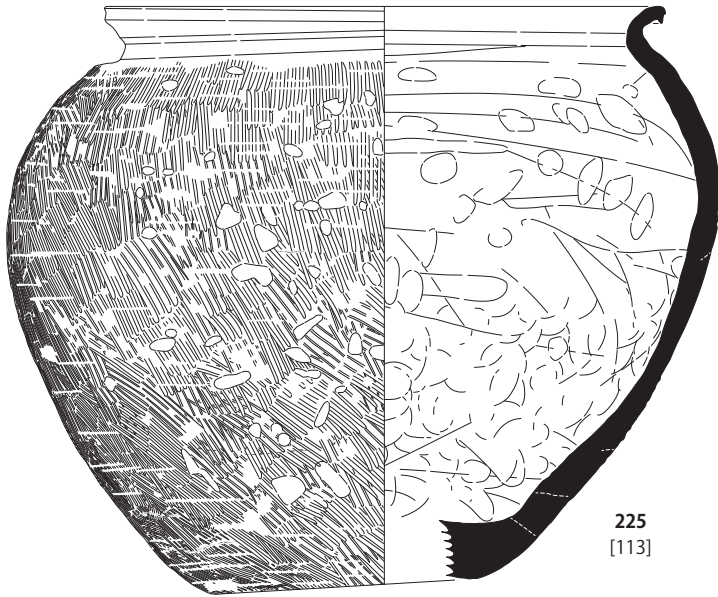
222
[138]

〈窯床出土 壺 G〉



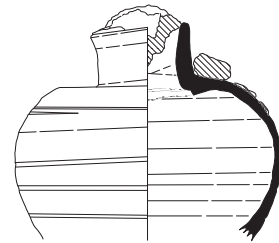
223
[136]

〈窯床出土 平底甕〉

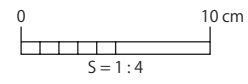


225
[113]

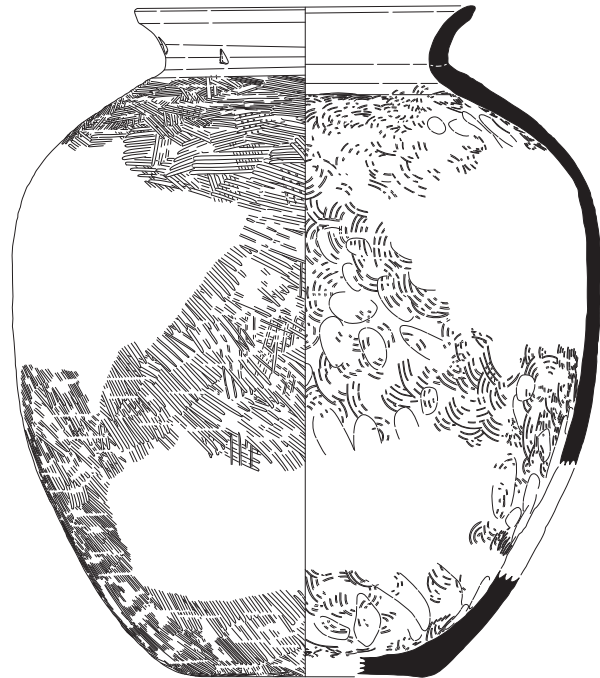
〈灰原出土 壺 G〉



224
[173]



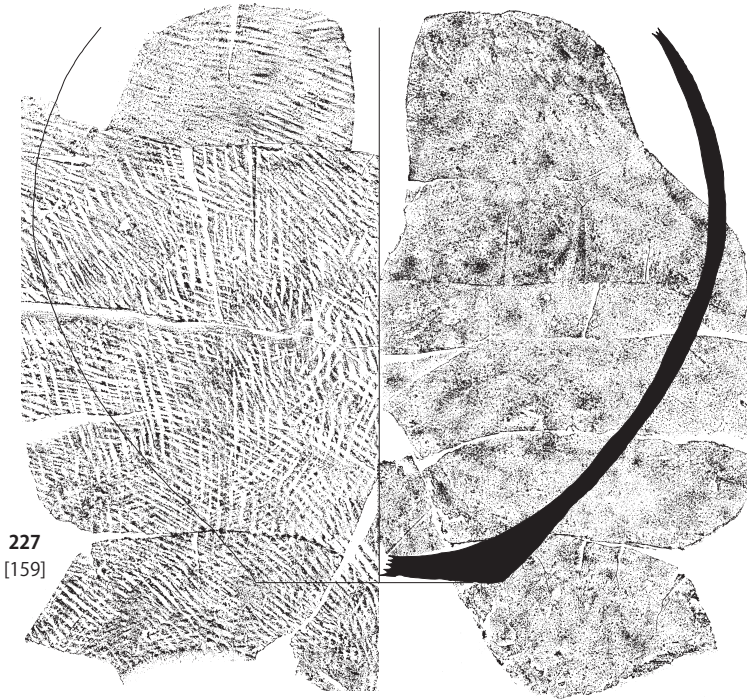
〈窯前庭部出土 平底甕〉



226
[117]

第 23 图 5 号窯 遺物実測図 5

〈窯埋土出土 平底甕〉



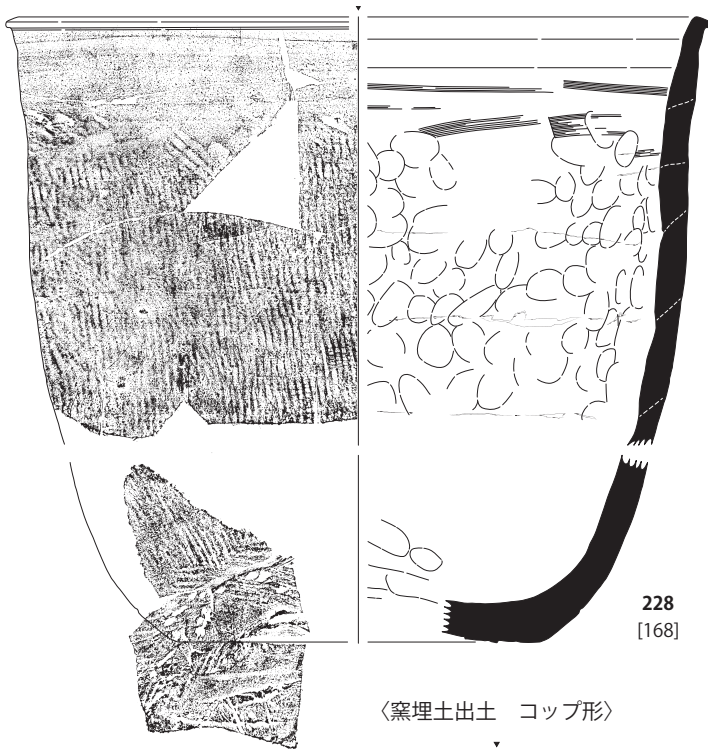
227
[159]

〈土器集中出土 長胴釜〉

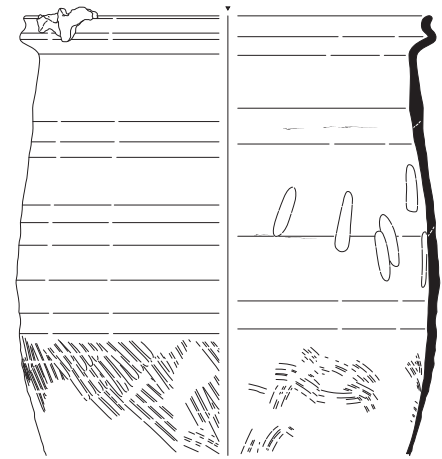


229
[156]

〈SK07 出土 甑形深鉢〉



228
[168]

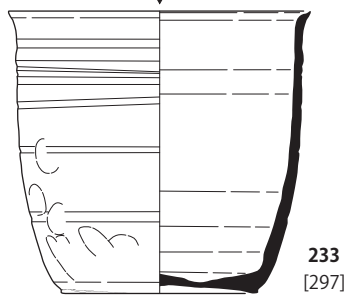


230
[157]

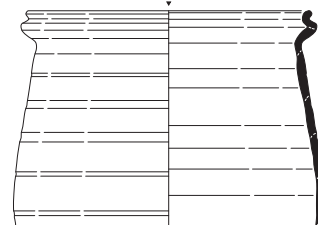


231
[153]

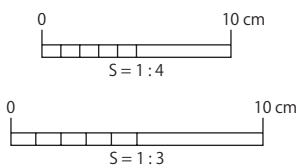
〈窯埋土出土 コップ形〉



233
[297]



232
[155]



第24図 5号窯 遺物実測図6

第5節 灰原出土遺物

本節では13号窯・6号窯・5号窯に抽出しきれなかった灰原出土遺物について、各器種の大まかな特徴と出土傾向を述べる。

第9表 灰原 器種構成表（口縁部計測値総計 16,194 / 36）

器種	坏 B (蓋・身)		坏 A	盤 A	埴 A	埴 B	皿 B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	771	503	6,547	2,024	1,232	1,875	1,787	14,236
占有率 (%)	5.4		46.0	14.2	8.7	13.2	12.6	87.9
器種	鉢類	瓶類 (瓶 D 内訳)		壺類	横瓶	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値 (/36)	265	1,069	734	220	27	103	1,684	
占有率 (%)	15.7	63.5	44.3	13.1	1.6	6.1	10.4	
器種	釜	鍋	煮炊具計					
口縁部計測値 (/36)	267	7	274					
占有率 (%)	97.4	2.6	1.7					

窯が厳密に特定できた遺物を除く器種構成は第9表のとおりである。食膳具が全体の88%程で、概ね坏盤が6割半、埴皿が3割半を占める。**坏 B**は残存率が良好で器形から13号窯由来と判断したものの以外の破片資料をこちらに含めたため、図化はしていない。食膳具で最も占有率が高いのは**坏 A**で、大半は体部外傾器形だが、底部の丸い埴形器形が存在する(246～249)。また体部外傾器形は、径高指数24～27のやや深身のもの(234～239)と径高指数19～22の扁平のもの(240～249)に分けられ、前者から後者へと変化する傾向にある(小松市教委1992)。**盤 A**は13号窯と6号窯の生産器種である。口径は体部の立ち上がりがやや長いもの(250～252)、体部立ち上がりが短く外傾する器高2cm未満の扁平なもの(253～255)、底部がやや丸味をもって突出するもの(256～258)に分けられる。これらのタイプは明確な時期変遷を示すものではないが、坏 A 同様に扁平化の傾向にあるため、250～252は6号窯に属する可能性が高い。埴皿は前述したとおり各窯の窯体内出土遺物の傾向から6号窯と5号窯の生産器種で、器形の特徴は2つの窯で確認した状況とほぼ同様である。**埴 A**の259と260は体部内湾し口縁部付近で外反気味となるもので、底部が厚手である。特に259は他の器形に比べてかなり異質で、施釉陶器器形を色濃く反映したものかもしれない。261と262は全体的に薄手のつくりとなっている。**埴 B**は内湾器形(264・266)と外傾器形(263・265)があり、中でも265は厚手づくりで低く径の小さな高台がつくため、より後出的な5号窯に位置づけ可能かもしれない。**皿 B**は径高指数21～23のやや扁平となるもの(267～270)、径高指数25～27の皿部深身のもの(271～274)がある。268～271は内面中央に高台痕があり、周辺が降灰して外面黒色化する焼成度合いが酷似するため、同時に正位の柱状重ね焼き(皿類)を行った可能性が高い。このほか灰原出土計測遺物中の3個体で同様の特徴を観察しているほか、内外の降灰と黒色化が逆転する逆位の重ね焼き痕も1個体確認した。皿部埴形となるもの(275)は後出的な器形で6号窯あるいは5号窯に属する可能性が高い。

貯蔵具は全体の10%程度で、瓶類が約6割、鉢類と壺類がそれぞれ約1割半、横瓶と甕が残り占める。**鉢類**は鉢 B と鉢 F を確認し、鉢 B 主体である。鉢 B (276・277)は肩がしっかりと屈曲して口頸が長く外傾する伝統的器形で、13号窯か6号窯に属する。いずれも体部内外をカキメ調整し、276は体部下位から底面をヘラケズリし、277は糸切り痕を明瞭に残す。鉢 F (278)は6号窯埋土

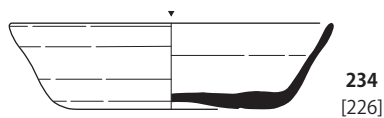
出土の141に類似する。**瓶類**は瓶Bと瓶Dを確認し、瓶D主体である。瓶B(279)は釉が付着し、球形で胴部下位にヘラケズリを施す。焼台C類が溶着する。瓶D(280)は胴部を縦軸の叩き出し成形するもので、二ツ梨一貫山窯跡F地区5号土坑(VI₂期)と9号土坑(VI₃期)に類例がある(小松市教委2002)。外面平行線文叩き出し(He類)、内面平行線文当て具(He類)後擦り消しを行っている。**壺類**は壺Aと壺Fを確認しており、壺F主体で、口径20cm前後の大型品(281・282)と口径14cm程の小型品(283)がある。後者は口縁端部をわずかに肥厚させており、大型品とは異なる形態をもつ。**横瓶**(284)は口頸の立ち上がりが短く、片側閉塞によって製作される。南加賀窯跡群ではV期頃を境に衰退する器種で、最終段階には口頸の長い両面閉塞が主流である。よって284はIV₂期以前の古いタイプで、4号窯からの混入であろうか。(春日2001)にしたがって製作の手順をみていくと、①図右側を側端部(底部側面)として粘土紐を積み上げ、全体の半分に達した段階で丸く叩き出し(外面Ha類・内面Da類擦り消し)、②再度、側端部(底部側面)を下にして図左側の閉塞側に向かって成形(閉塞は円盤痕がみとめられないため絞り切り)、③最後に閉塞側面を外側からの単独叩きとロクロナデで仕上げ、口頸部を作出する。また図の右から左に向かって釉が流れることから、図左側の閉塞側面を下にして焼成したことが分かる。両側面には円形の未釉着部分があり、焼成時に焼台を当てた痕跡と考えられる。**甕類**は口径38cm程の大甕(287)、口径20cm、器高40cm程の砲弾形を呈する中甕(285)、口径24cmの平底甕(286)を確認している。胴部の外面叩き出し工具は全て平行線文He類で、内面当て具は285と286が平行線文He類擦り消し、287が無文当て具擦り消しである。法量と器形から、285と287は13号窯か6号窯、286は6号窯か5号窯の所産と推測される。

煮炊き具は釜と鍋を確認しており、**長胴釜**(288・289)が主体である。口径20cm前後で、器形は5号窯土器集中一括品と類似し、特に288は底部近くまで残存しており、下膨れ状の器形がよく分かる。いずれも胴部外面叩き出しは平行線文He類を用い、289はカキメ調整が伴う。内面当て具は、288が不明当て具擦り消し、289が平行線文He類擦り消しである。

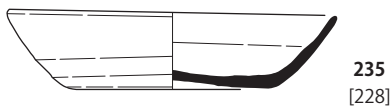
小型貯蔵具は瓶と壺を確認している。瓶は外反する口縁(290)や底部がややすぼまる形態(291~293)から、無台の瓶B形と考えられる。13号窯の所産であろうか。底部には全て糸切り痕が残り、291には「口」状のヘラ記号が施される。壺は294と295が分厚く短く立ち上がり面取りする口縁で、瓶とは異なるため、壺Gのような狭口の小型壺を想定している。296は口径11cm程を測る壺F形の小型壺である。

その他特殊品は、**特殊蓋**(297・298)、**円面硯**(299)、**平瓶把手**(300・301)、**獣足片**(302)を確認している。特殊蓋の297は宝珠形に台座がついたような高いつまみをもち、天井部ヘラケズリと内面カキメを施す丁寧なつくりで、焼成も堅緻である。298は口径23cm程を測る大型法量で、つまみの有無は不明だが、天井部に輪状突帯が巡る。南加賀窯跡群で9世紀代にみられる器形である。円面硯299は、有堤式の硯面上部で硯面推定径10cm程を測る。能美・和気白石窯(V₂期)にて全形の分かる優品が出土しており(辰口町教委2005)、規模や形状から同様のタイプと推測される。300と301はいずれも断面方形の平瓶把手である。同様の形状は能美・和気白石窯(V₂期)に類例がある(辰口町教委2005)。戸津8号窯(VI₂新时期)でも出土例があるが(小松市教委1992)、把手断面は六角形を呈し、系譜が異なると思われる。302は獣足片としたが、爪の表現等がなく、不明確な資料である。このほか6号窯の節で述べた管状土錘が出土している。以上のうち、製品の特徴や窯の操業時期から類推すると、297・299・300・301は13号窯の所産であると思われる。

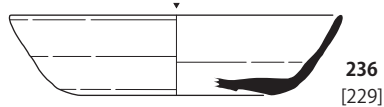
〈坏 A〉



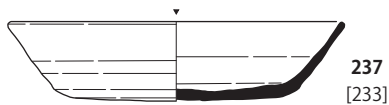
234
[226]



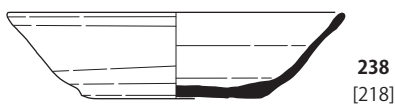
235
[228]



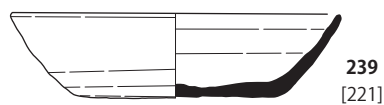
236
[229]



237
[233]



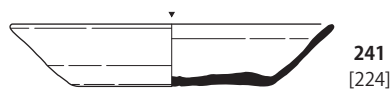
238
[218]



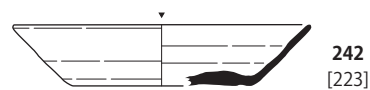
239
[221]



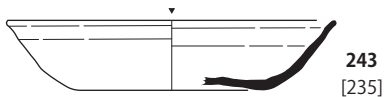
240
[220]



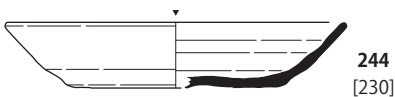
241
[224]



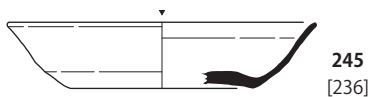
242
[223]



243
[235]



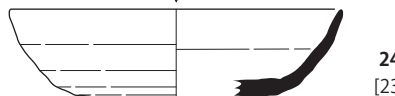
244
[230]



245
[236]



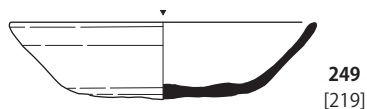
246
[222]



247
[238]

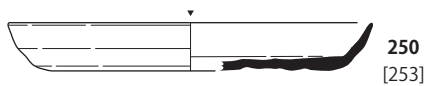


248
[232]



249
[219]

〈盤 A〉



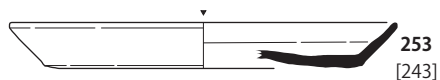
250
[253]



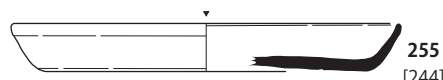
252
[247]



251
[252]



253
[243]



255
[244]



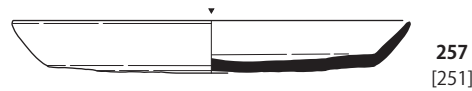
254
[255]



256
[248]

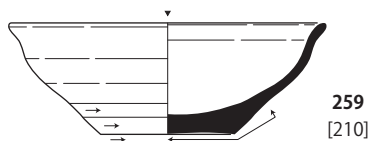


258
[250]

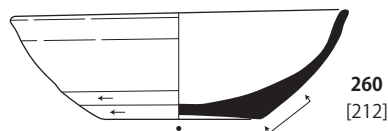


257
[251]

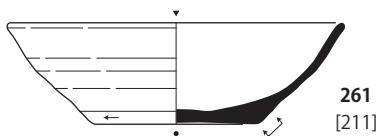
〈碗 A〉



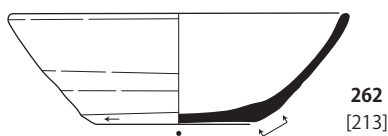
259
[210]



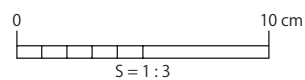
260
[212]



261
[211]

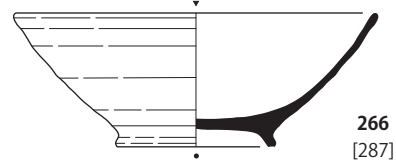
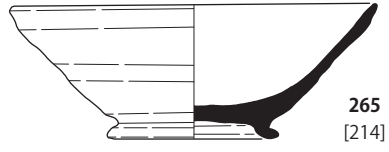
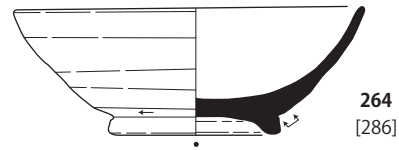
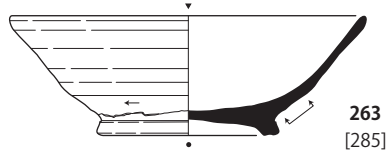


262
[213]

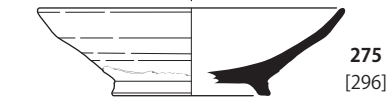
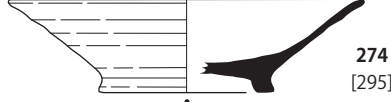
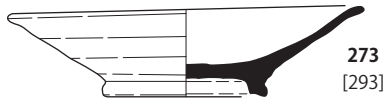
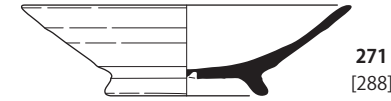
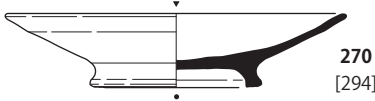
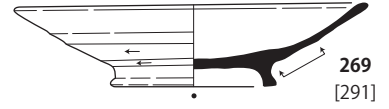
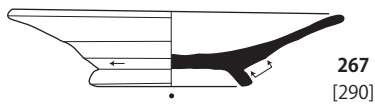


第 25 图 灰原 遺物実測图 1

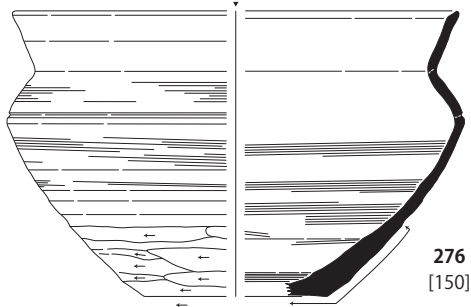
〈碗B〉



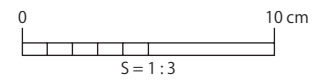
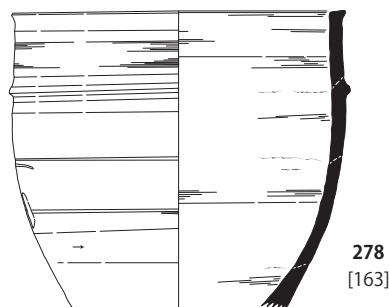
〈皿B〉



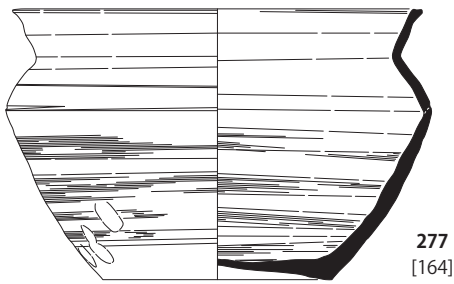
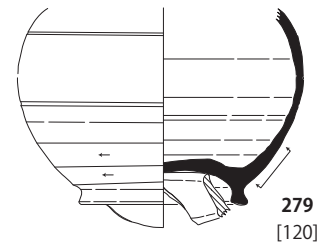
〈鉢B〉



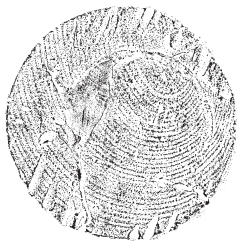
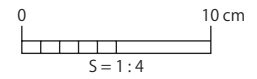
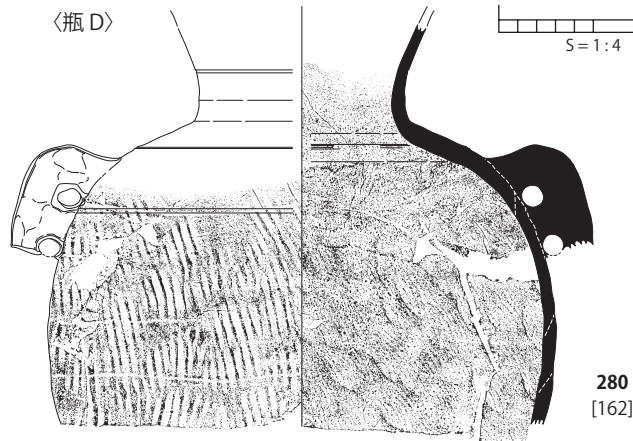
〈鉢F〉



〈瓶B〉

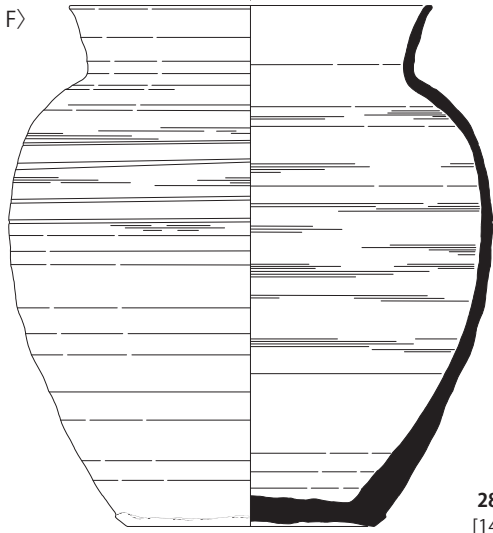


〈瓶D〉

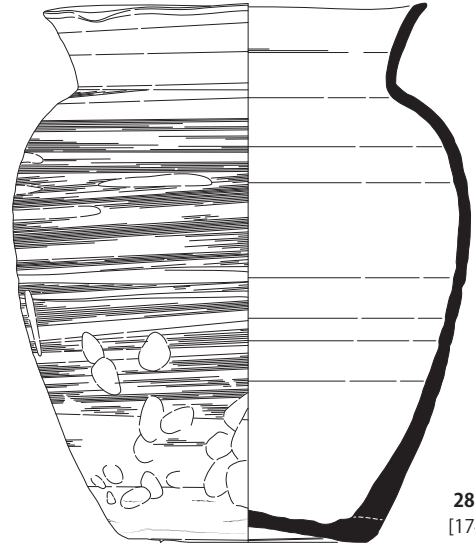


第26図 灰原 遺物実測図2

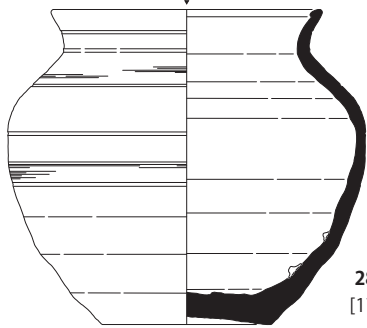
〈壺 F〉



281
[141]

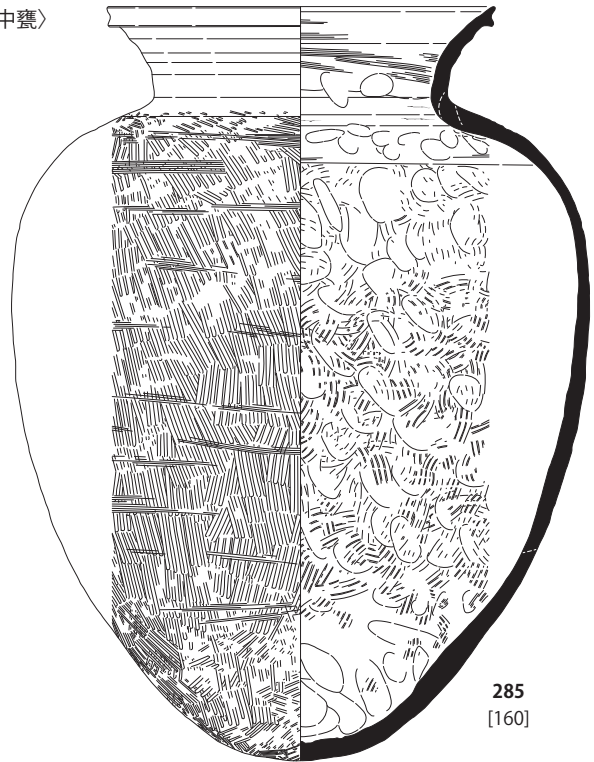


282
[174]



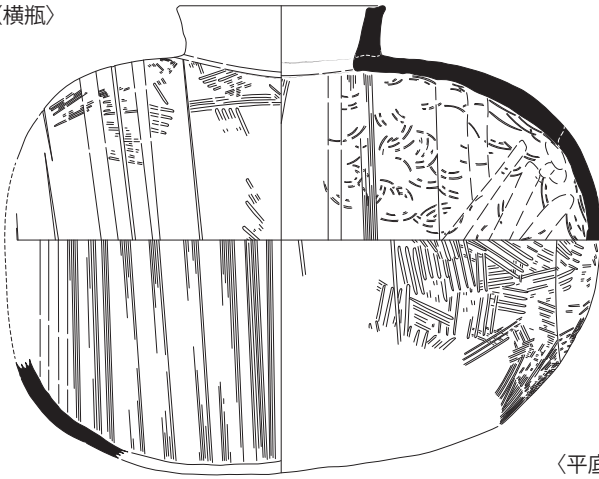
283
[172]

〈中甕〉



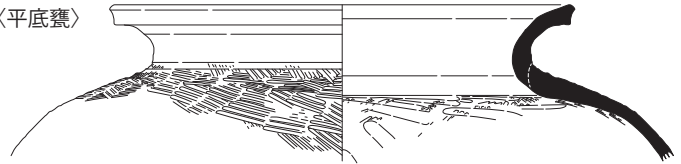
285
[160]

〈横瓶〉



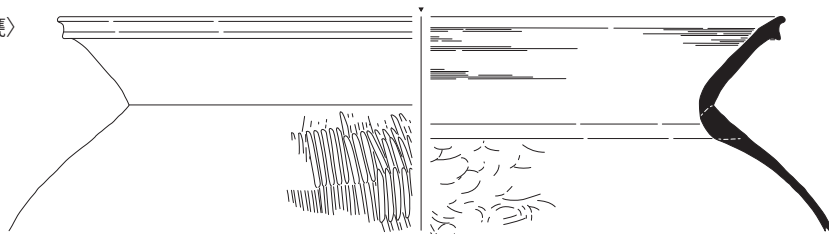
284
[161]

〈平底甕〉

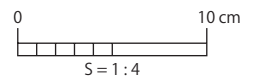


286
[115]

〈大甕〉



287
[116]



第 27 図 灰原 遺物実測図 3

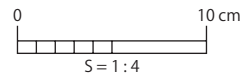
〈長胴釜〉



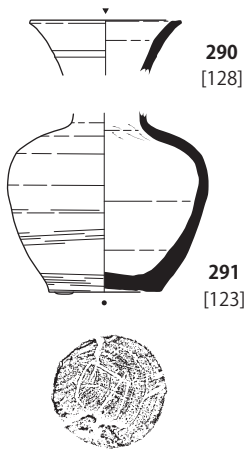
288
[158]



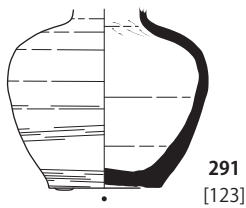
289
[154]



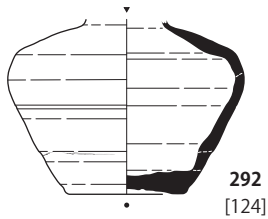
〈小型瓶・壺〉



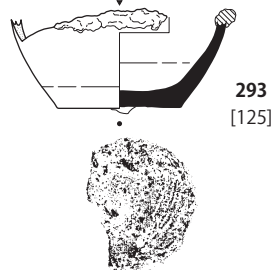
290
[128]



291
[123]



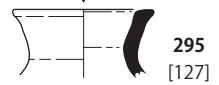
292
[124]



293
[125]



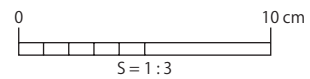
294
[126]



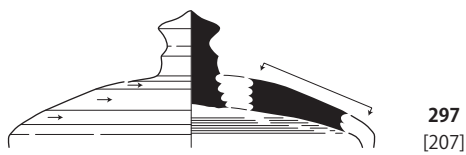
295
[127]



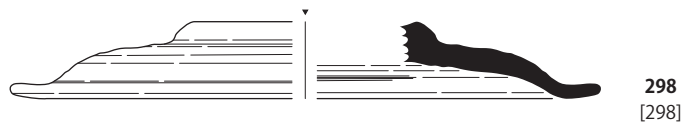
296
[129]



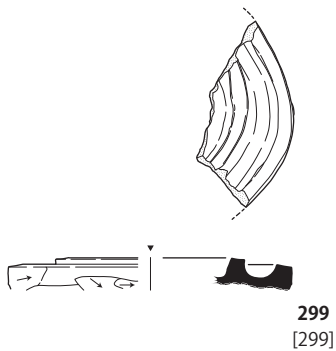
〈その他特殊品〉



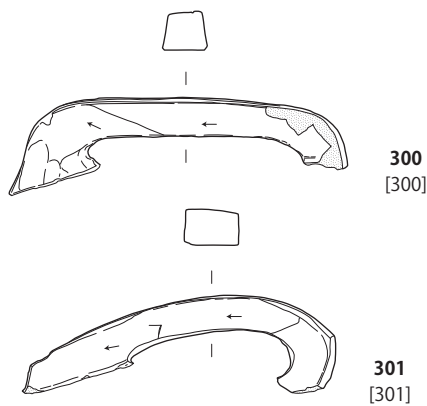
297
[207]



298
[298]

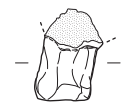


299
[299]

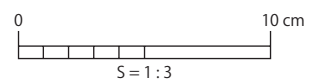


300
[300]

301
[301]



302
[302]



第28図 灰原 遺物実測図4

第6節 窯道具

本節では13号窯・6号窯・5号窯で使用された窯道具の貯蔵具専用焼台について述べる。なお、食膳具有台器種の台部片や貯蔵具胴部片等を利用した転用焼台も多数みとめられたが、詳細な分析には至らなかった。

第10表 焼台類型構成表（分類総数 1,009）

類型	13号窯個体数 (%)	6号窯個体数 (%)	5号窯個体数 (%)	灰原個体数 (%)	全体個体数 (%)
A類	9個 (20.9)	92個 (45.3)	51個 (46.4)	239個 (36.5)	391個 (38.7)
B類	11個 (25.6)	39個 (19.2)	42個 (38.2)	259個 (39.6)	351個 (34.8)
C類	23個 (53.5)	46個 (22.7)	15個 (13.6)	118個 (18.0)	202個 (20.0)
D類	0個 (0)	26個 (12.8)	2個 (1.8)	38個 (5.8)	66個 (6.5)

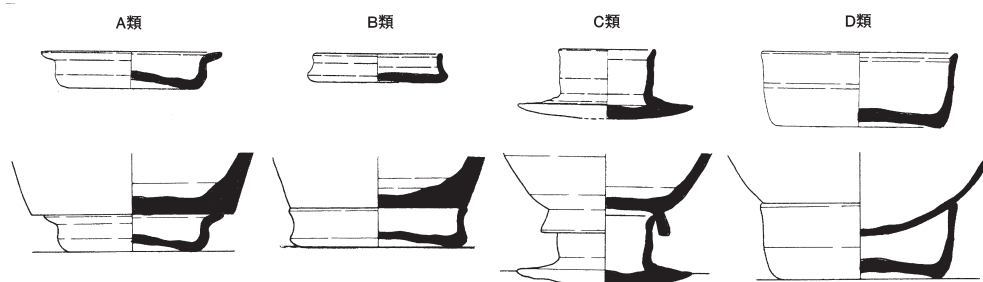
※分類不可の個体は除外

第29図の類型を基準に4分類した。A類は底径<口径で口縁部が外屈する平底器種用、B類は底径≒口径で器高低めの平底器種用、C類は底径>口径で口縁部が内傾・内反して器高高めの有台器種用、D類は底径≦口径で器高高めの丸底器種用が基本型・用途となる。今報告の焼台溶着例でも、平底の瓶DにA類使用(214)、有台の瓶BにC類使用(279)等、この傾向が確認できる。ただし、平底の壺FにD類使用(162)等、実際の使用形態は柔軟である(小松市教委1992)。通常、南加賀窯跡群では9世紀以降に専用焼台を多用し、9世紀前半代はC類、9世紀後半代はB類、10世紀代はA類が増加傾向にある(望月2008)。

類型構成は第10表のとおりである。6号窯と5号窯の分類対象には窯体外出土遺物も含めたため、特に6号窯には他2窯のものが混入する可能性が高い。以下、窯体内出土遺物を中心に各窯の特徴を述べる。

13号窯関連専用焼台

分類対象全てが窯体内出土で、50%以上をC類が占める。灰原出土ではあるが、口径5cm前後の小型品(306)や口径8～9cm前後で器高が高い大型品(308・309)は本窯由来と判断した。前者は瓶B、後者は壺Aに使用される形態である。303と304は口径12cm程、305は口径7cm程となり、いずれも器高3cm前後で、瓶Dに使用される形態である。



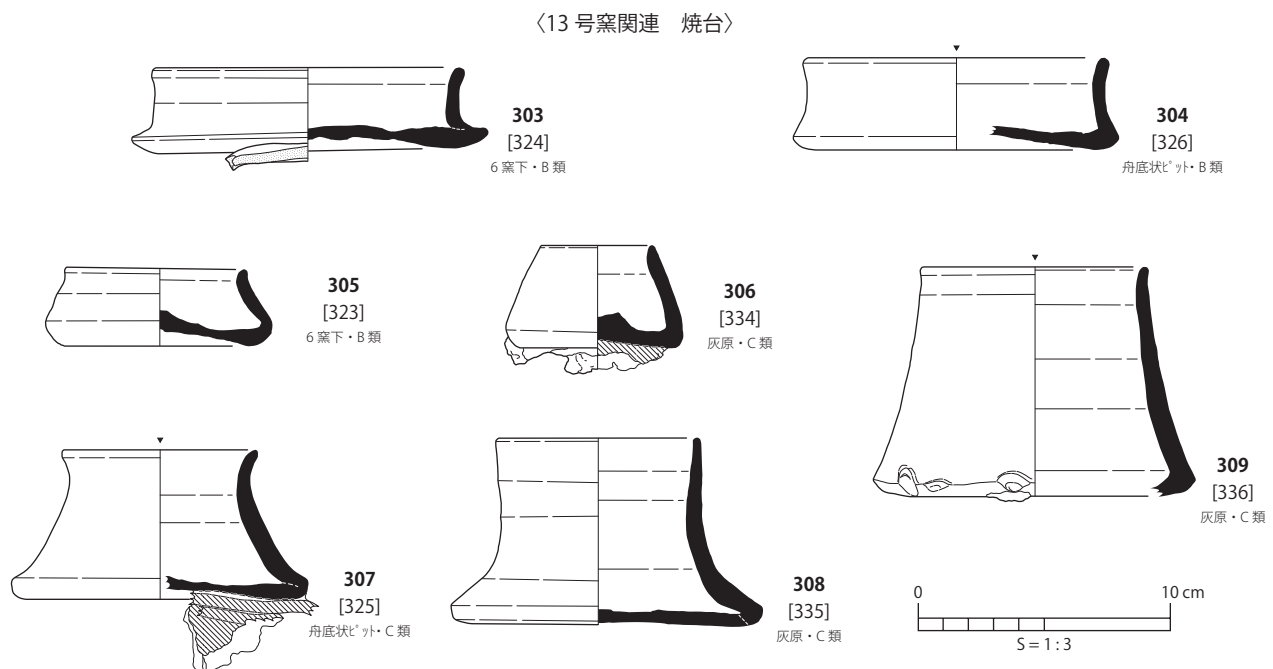
第29図 貯蔵具専用焼台の基本類型（小松市教委2002より・S=1/6）

6号窯関連専用焼台

窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A類8個(33.3%)、B類12個(50%)、C類1個(4.2%)、D類3個(12.5%)となり、A・B類が8割以上を占めC類の占有率が極端に低下することがわかる。個体数が少なく、あくまで傾向としてだが、窯埋土や東側堆積に13号窯・5号窯由来の焼台が混在することを窺わせる。特徴的なのは312と313の大型皿A器形の焼台で、当初は食膳具として分類していたが、内面にロクロヒダを残し、総じて2次被熱や溶着痕が観察されたため、焼台A類に分類した(底部8個体分を確認)。南加賀窯跡群の中でもこれまで類例がなく、珍しいタイプである。312が本窯前庭部出土であるため、それを基準に他のものも本窯に含めたが、5号窯埋土や土器集中からも出土しているため、両窯で使用されたものかもしれない。口径18~19cm前後と大型で厚手のつくりをもち、底部糸切り痕が残る。出土した貯蔵具器種の中では、大法量の瓶D等にも使用されたと思われる。なお口径は小さく底径が大きい、311も口縁部が大きく開く皿器形となる。これらのほか、314のB類と317のD類が窯床からの出土である。

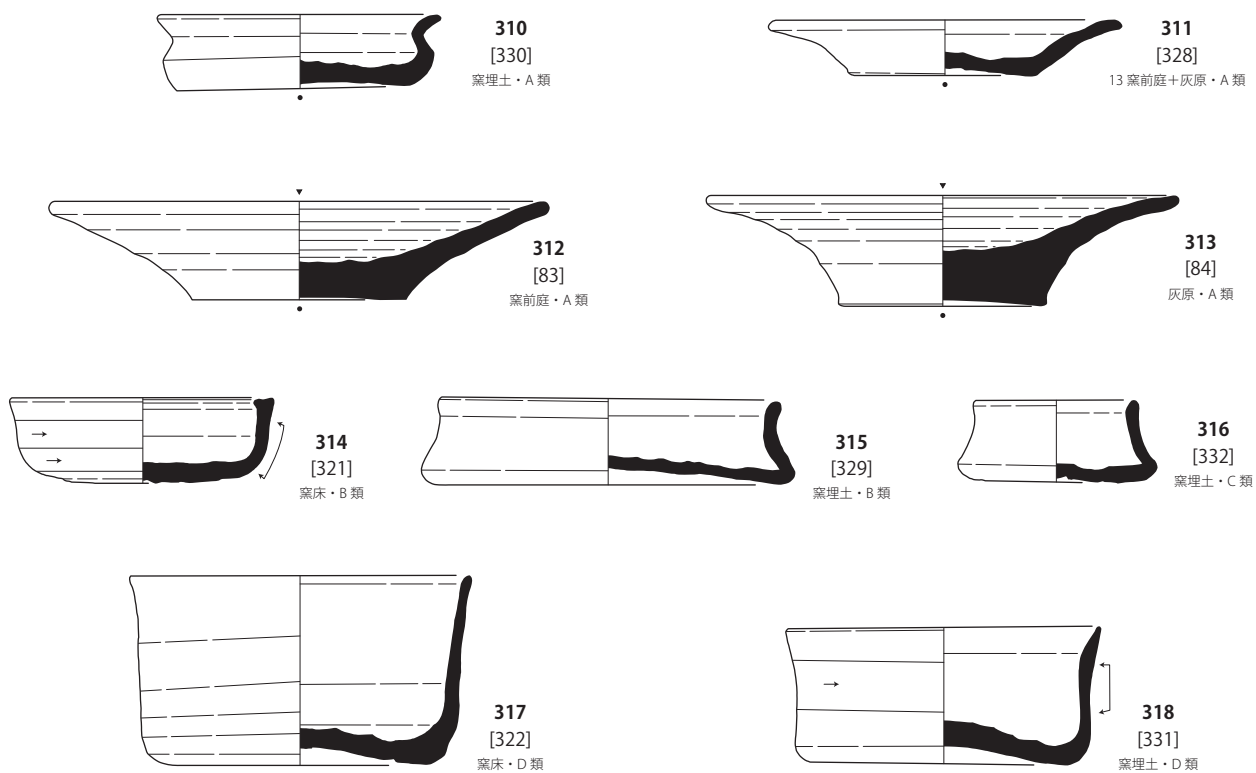
5号窯関連専用焼台

6号窯同様に窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A類25個(61%)、B類11個(26.8%)、C類5個(12.2%)、D類0個(0%)となり、A類が優占する。319~322・324は口径10~15cm前後を測るA類の典型的な器形である。A類は壺瓶生産に合わせて総体的に小型化する傾向にあるが、323は口径22.4cmと大型で、前述の大型皿A器形に類するものと想定され、平底甕用と考えられる。B類の325は底部に気抜き穿孔を施している。なお、遺物編1(小松市教委2017)で4号窯関連として抽出した第23図278の底部に気抜き穿孔もつA類焼台は、本窯埋土下層で同様の器形・焼き色をもつ個体を確認したため、本窯に属するものとして訂正したい。326は当窯跡群1-A号窯(VI₃古期)に類例がある器形で、本窯に含めた。327は伝統的な口縁部内反器形のB類、328のD類は本窯では衰退器種と考えられ、混入の可能性もある。

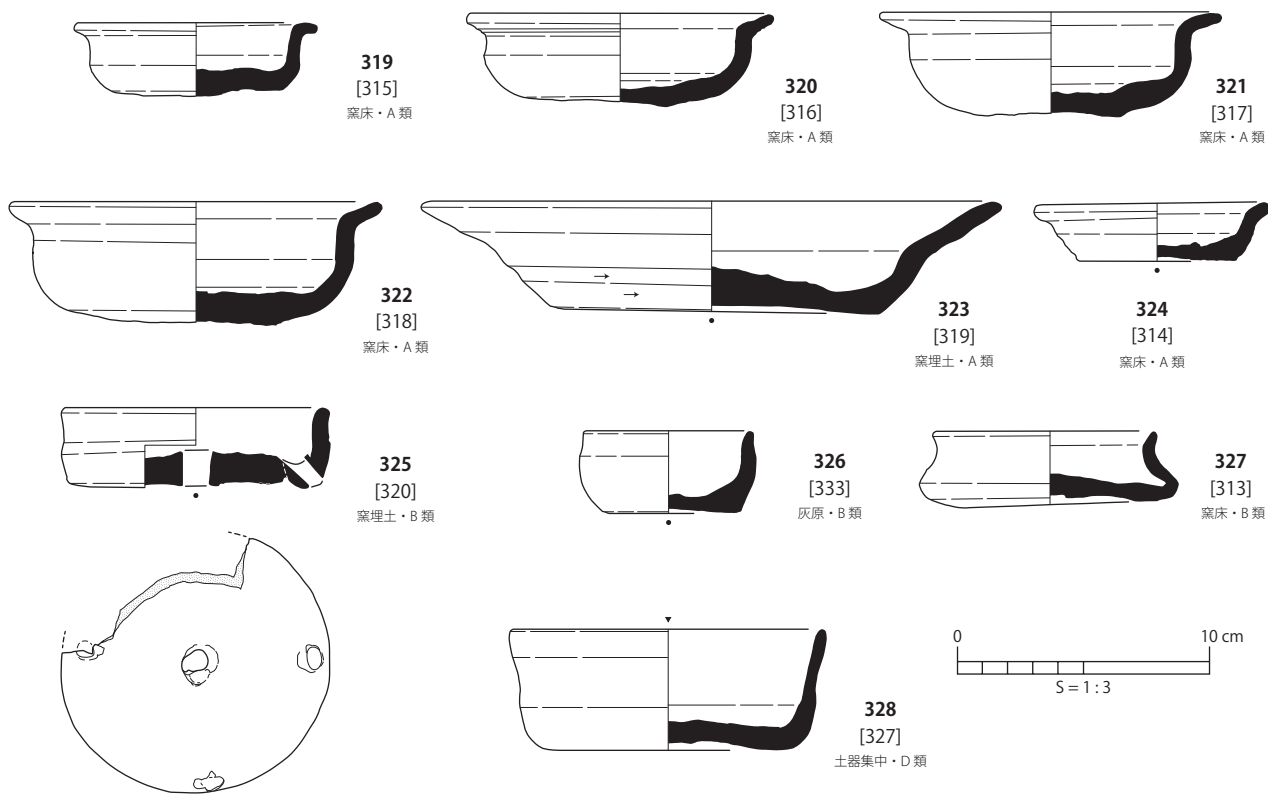


第30図 13号窯 貯蔵具専用焼台実測図

〈0号窯出土 焼台〉



〈5号窯出土 焼台〉



第31図 6号窯・5号窯 貯蔵具専用焼台実測図

第7節 小 結

以下、窯体構造も含めて13号窯・6号窯・5号窯の特徴を整理し、操業時期を検討したい。

13号窯は、食膳具の占有率が坏盤主体で、指標となる坏Bは大法量主体化と2法量化の兆候、重ね焼きⅡa類主体（8割以上）、有紐蓋の残存、蓋つまみ小型化、蓋身ヘラケズリ消失、身の体部外傾器形等の特徴をもつ。また貯蔵具では、V期以降衰退・消滅する把手付の鉢Bや瓶B頸部の突帯装飾、瓶D大法量の風船技法採用、鉢E生産がみとめられ、貯蔵具専用焼台はC類主体となる。白色系堅緻焼成の優品生産も行われている。これらの特徴と、二ツ梨一貫山窯跡3号灰原古相や能美・和氣白石窯との対比から、古代V₂期（9世紀前葉～中葉）に位置づけられる。なお当期の埴皿生産は通常1%に満たない占有率となるが、本窯ではやや高い占有率をもつ。6号窯による改造で大半の窯床が消失しており、限定された資料の中での例外的な構成比率として捉えておきたい。ほかに灰原出土であるが、円面硯や平瓶等の特殊品は本窯で生産された可能性が高いと考えられる。

6号窯と5号窯は、遺物の混在が多いため窯体内器種構成を基準にすると、食膳具の占有率が6号窯で坏A盤A2割：埴皿8割、5号窯で坏A1.5割：埴皿8.5割となり、既に埴皿生産が主流となる。坏盤生産の衰退消滅と埴皿生産の主体化はVI₃期が画期となるが、坏A及び盤Aの残存はVI₃古期（10世紀前葉）の二ツ梨豆岡向山1-A号窯、戸津37・44・47号窯で確認されており、両窯も同時期に位置づけられそうである。ただし全く同時期というわけではなく、6号窯に比べ5号窯の製品は全体的に焼きが甘く、ヘラケズリのない埴Aやベタ高台気味となる埴Bの存在等、より新しい要素が加わっている。また貯蔵具でも、5号窯床で口頸直立気味となる鉢Bや新器種の壺G等の10世紀を特徴づける器種器形や粗雑で厚手づくりの瓶Dが確認できる。それに比べて、6号窯はやや薄手で規格性の強い瓶Dや伝統的な壺F等、古手の要素が残る。

窯体構造からも検討を加えると、5号窯は第4節冒頭で述べたように平面釣鐘形で急激な絞り込み・焼成部急傾斜・しっかりとした段構築をもつ構造から、10世紀代の窯であることは明らかである。一方、6号窯は急傾斜・段構築といった変化の兆しがみとめられるが、未だ絞り込みが甘くやや長大な平面形であり、9世紀的なつくりである。また両窯は少なくとも3回の床修復を行っており、複数回にわたって使用されたことが窺われる。

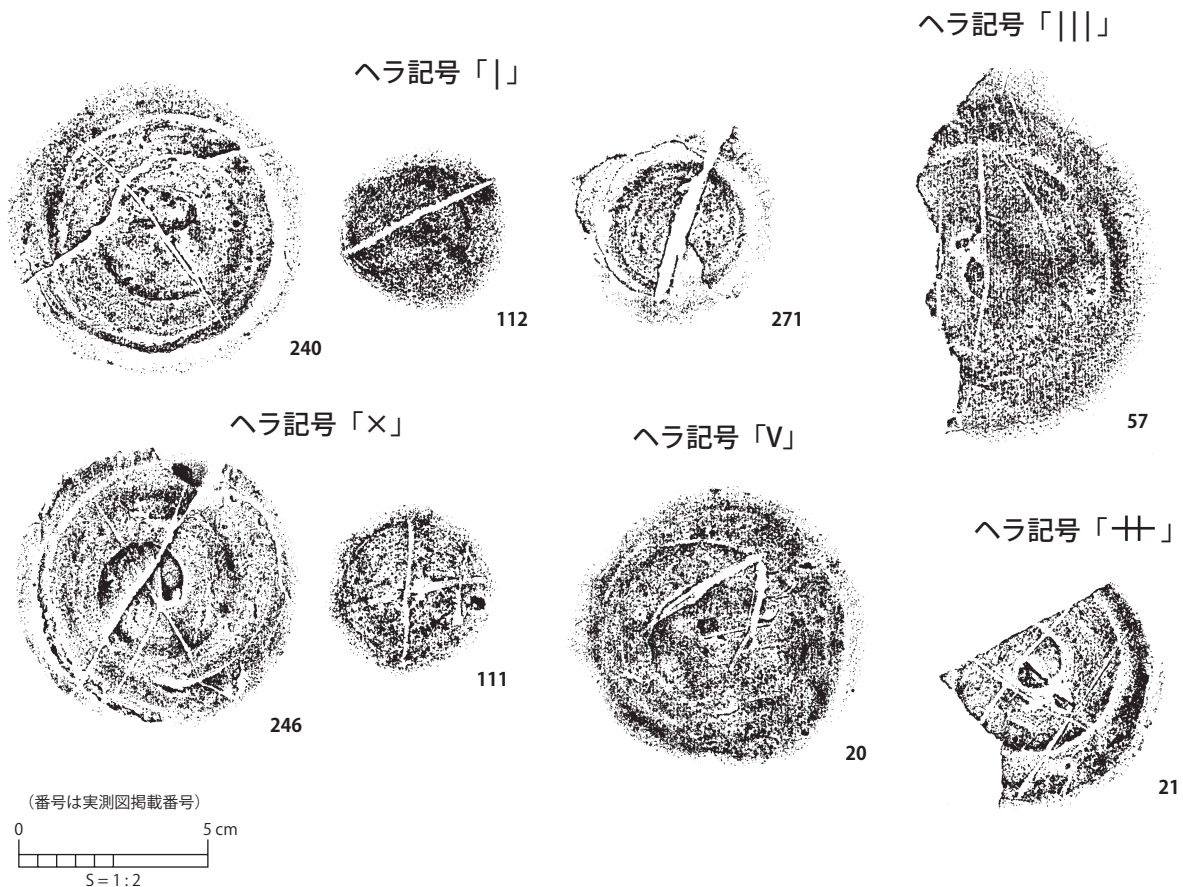
以上より、6号窯と5号窯をVI₃古期（10世紀前葉）に位置づけたいが、両窯には器種器形や焼成度合い、窯体構造に差があることを考慮する必要がある。6号窯を1段階遡らせた方が妥当のように思えたが、VI₂新期にみられる末期的な坏Bが確認されておらず、VI₃期の範疇で捉えた。また詳細な比較はできていないが、5号窯に関しても食膳具の構成では1-A号窯より古い様相を呈すると思われ、VI₃古期を下らないと考えられる。よって、現時点では両窯の差をVI₃古期の中での変化として捉えた。6号窯は坏盤が定量残存する最初期段階になると予測される。

ほかに、9世紀以降の南加賀窯跡群で製品焼成に欠かせない貯蔵具専用焼台をみると、両窯とも窯体内でA類・B類が高い占有率をもち、平底器種が主体となる当期の傾向に整合する。また専用焼台が貯蔵具の壺瓶主体生産に対応して小型化する中で、瓶Dや平底甕等の中大型器種に合わせて皿A形の大型焼台も使用されたと推測される。

第 11 表 ヘラ記号構成表

	坏A	坏B 蓋	坏B 身	盤A	碗A	碗B	皿A	皿B	坏盤 分類不可	碗皿 分類不可	食膳具 分類不可	鉢B	壺F	瓶D	小型壺 小型瓶	計
	45	2	1	10	9	5		4		3	4	1	1		1	86
	8			8	2	5				3						26
	1					1										2
×	21			1	11	11	1			3	1			1		50
卅					1	1										2
卍						2										2
∨	2					1										3
井	1															1
□															1	1
不明	35	1	1	10	11			2	1	5	10			1		77
計	113	3	2	29	34	26	1	6	1	14	15		1	2	2	249

* 13・6・5号窯及び灰原出土遺物を一括集計



第 32 図 ヘラ記号拓本

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2 (遺物編2)

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
1	192	坏B蓋大	13窯舟底 ^レ ツト	13窯床下c区c層	口[15.2]、つ径[2.7]、高3.8、つ高1.4	製	良好	内外灰	通常	5	-	重Ⅱa類
2	193	坏B蓋大	13窯舟底 ^レ ツト+灰原	13窯床下f区c層+こ7Bgr	口[15.6]、つ径[2.4]、高2.9、つ高1.5	製	不良(酸)	内灰、外赤灰~灰	通常	2	-	
3	206	坏B蓋特大	灰原(13窯)	さ5Dgr2層・2・3層・最上層	口[19.2]、高(2.6)	製	良好	内外灰	通常	19	-	重Ⅱa類?、天外3条沈線
4	200	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ5Bgr2・3層+こ6Bgr7 ^レ 3層+さ5Agr6層	口15.2、つ径2.4、高4、つ高1.2	製	良好	内外灰	砂少	27	-	重Ⅱa類?、天内 ^レ 記号「J」
5	201	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ5Cgr3層+こ5Bgr6層・19層・カ ^レ ツ	口15.4、つ径2.3、高4、つ高1.5	製	堅緻	内外灰白	通常	25	-	重Ⅱa類
6	198	坏B蓋大	灰原(13窯)	こ6Bgr7 ^レ 3層・2'層・24層+さ6Dgr13層+さ6杭	口[15]、つ径[2]、高3.1、つ高1.3	製	良好	内外灰	通常	13	-	重Ⅱb類
7	199	坏B蓋中	灰原(13窯)	さ5Dgr2・3層+こ6Bgr	口13.2、つ径1.8、高2.8、つ高1	製	堅緻	内外灰白	砂少	5	-	重Ⅰ類
8	197	坏B蓋小	灰原(13窯)	し6Agr1層+さ7gr+こ7gr表土盛土	口10.3、つ径1.5、高2.4、つ高0.7	製	堅緻	内外灰白	通常	21	-	重Ⅱa類
9	181	坏B身大	13窯床下+舟底 ^レ ツト+灰原	13窯b区床下+d区床下c層+f区床下c層+さ6Agr3層他	口[15.5]、台[8.8]、高6.4、台高0.4	転	(2次被熱)	内灰、外灰~明青灰	通常	10	-	焼台転用痕
10	180	坏B身大	13窯前庭部(前面土坑)+灰原	し5Agr前面土坑5層+さ5Agr5層・6層・6'層+さ5Dgr3層	口[14.3]、台[8.9]、高5.9、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	14	右	
11	182	坏B身大	13窯床下+舟底 ^レ ツト+前庭部+灰原	13窯e区床下b層+g区床下c・e層+し5Agr前面土坑全2層+さ5Agr2層他	口[14.2]、台[8.8]、高5.7、台高0.5	製?	良好	内外灰	通常	19	-	
12	184	坏B身大	灰原(13窯)	さ5Dgr3層+さ6Agr3層・19層+さ6Cgr3層他	口[15.4]、台[9.2]、高6.5、台高0.5	製	堅緻	内外灰白	砂少	13	右	釉化
13	183	坏B身大	灰原(13窯)	さ5Dgr2・3層・3層・4・5層・最上層	口[15.5]、台[9.7]、高6.1、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	18	右	釉化
14	185	坏B身中	灰原(13窯)	さ6Agr3層・19層他	口[13.8]、台[8]、高5.4、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	6	-	
15	187	坏B身小	灰原(13窯)	し6Agr1層・2層(4層)他	口[11.1]、台[7.6]、高3.9、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	15	-	
16	186	坏B身小	灰原(13窯)	さ6Agr2層	口9.9、台6.5、高3.7、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	22	右	釉化
17	231	坏E	灰原	し5Cgr1層	口[12.4]、底[9.8]、高3.5	製	良	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類
18	70	坏A	13窯舟底 ^レ ツト	13窯d区床下c層	口[12.5]、底[8.7]、高3.2	転	(2次被熱)	内外灰	通常	4	-	
19	71	坏A	13窯舟底 ^レ ツト	13窯f区床下c層	口[12.5]、底[8.9]、高3	転	(2次被熱)	内暗灰、外灰	砂多	5	-	底外 ^レ 記号「J」
20	227	坏A	灰原	こ5Agr8層他	口[13.2]、底[7.7]、高3.4	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	底外 ^レ 記号「V」、釉化
21	225	坏A	灰原	こ6Bgr19層	口[12.8]、底[6.9]、高3	製	堅緻	内外灰白	通常	11	右	重Ⅲ類、底外 ^レ 記号「J」
22	234	坏A	灰原	さ6Agr3層	口[11.9]、底[6.5]、高2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	8	右	
23	237	坏A	灰原	し5Dgr最上層	口[13]、底[6.9]、高3.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	重Ⅲ類、体外3条沈線
24	72	盤A	13窯舟底 ^レ ツト	13窯e区床下c層	口[15.8]、底[13.4]、高1.9	製	不良(生・酸)	内外白	通常	7	-	
25	73	盤A	13窯床下	13窯f区床下b層	口[16.5]、底[13.9]、高1.8	製	やや不良	内外白~灰白	通常	6	-	
26	74	盤A	13窯舟底 ^レ ツト	13窯c区床下c層+d区床下c層+し6gr表土盛土	口[15.9]、底[13.7]、高2.1	製	やや不良	内外灰	通常	7	-	
27	75	盤A	13窯舟底 ^レ ツト+床下+6窯床下+灰原	13窯c区床下c層+d区床下c層+f区床下f層+e区床下b層+6窯g区床下+さ5Dgr3層	口[15.5]、底[13.6]、高2.2	転	(2次被熱)	内外暗灰~暗青灰	通常	26	右?	
28	239	盤A	灰原	さ6Agr	口[16.5]、底[13.4]、高2.4	製	不良(生・酸)	内外灰+橙(2.5Y7/6)	通常	10	-	
29	240	盤A	灰原	さ6Agr南1層	口[16.2]、底[13.9]、高2	製	良	内外灰	礫多	13	-	底外 ^レ 記号「J」?
30	241	盤A	灰原	し6Agr表土盛土	口[16.6]、底[14.2]、高2.3	製	堅緻	内外灰	砂多	5	-	重Ⅲ類
31	249	盤A	灰原	さ6Agr19層	口[16.2]、底[14.1]、高2.3	製	やや不良	内外灰	砂少	8	-	重Ⅲ類
32	254	盤A	灰原	さ6Agr6層	口[15]、底[11.9]、高2.3	製	やや不良	内外灰	通常	5	左	重Ⅲ類
33	246	盤A	灰原	さ5D2・3層・13層	口[15]、底[12.6]、高2.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	
34	204	盤B	灰原(13窯)	し6Agr1層・表土	口[18.6]、台[13.5]、高3.1、台高0.4	製	堅緻	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
35	205	盤 B	灰原 (13 窯)	さ 6Agr19 層+し 5Dgr13 層	口 [18.8]、台 [13]、高 2.7、台高 0.4	製	堅緻	内外青灰	通常	26	-	ゆがみ大
36	202	盤 B	灰原 (13 窯)	さ 5Dgr2-3 層	口 [18.8]、台 [11.8]、高 2.7、台高 0.9	転	(2 次被熱)	内外灰	通常	20	-	ゆがみ大
37	203	盤 B	灰原 (13 窯)	さ 5Dgr2 層+こ 6Bgr3 層	口 [21.4]、台 [14.4]、高 2.8、台高 0.6	転	(2 次被熱)	内灰、外暗灰	通常	10	-	
38	188	皿 B	13 窯舟底ビツ	13 窯 f 区床下 f 層	口 [14.2]、高 (2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	
39	191	小型瓶	13 窯舟底ビツ	13 窯 d 区 c 層	口 [6]、高 (2.5)	製	堅緻	内外灰	通常	4	-	外 2 条沈線、ハカツ附着、釉化
40	130	鉢 B	13 窯前庭部+5 窯土器集中	し 5Agr 前庭部 5 層+5 窯土器集中 97 他	口 [12.6]、頸 [11.1]、体 [12.2]、高 (6.3)、頸高 1.4	製	良	内外明青灰	砂多	19	-	釉化
41	176	鉢 B	13 窯前面土坑	し 5Agr 前面土坑全 2 層	口 [22]、頸 [19.7]、体 [22]、高 (7.9)、頸高 2.5	製	良好	内外灰	通常	4	-	体外 1 条沈線、内外舂入、ゆがみ大
42	165	鉢 B(把手付)	灰原	さ 5Dgr2-3 層+さ 6Agr3 層・19 層+さ 6Bgr タテア 6 層他	口 23.1、底 11.2、頸 20.8、体 25、高 18.3、頸高 2.9	製	良好	内外灰白~明青灰	通常	34	-	体外 3 条沈線、焼台・ハカツ附着、釉化
43	175	鉢 E	13 窯前庭部(前面土坑)+灰原	さ 5Bgr 前庭部全 13 層・1 層+し 5Agr 前面土坑 3 層・2 層+さ 5Bgr1 層・最上層+こ 5Bgr	口 [16.2]、高 (7.5)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	20	右	体外手持ちツリ+回転ツリ、逆位焼成、釉化
44	119	瓶 B	13 窯前面土坑+灰原	し 5Agr 前面土坑全 13 層+さ 6Agr 7 他	口 [11]、頸 [5.2]、高 (12.1)、頸高 8.2	製	良好	内灰、外灰白	通常	6	-	頸外 2~3 条沈線、胴外 2 条沈線、頸接合 A2 類、ハカツ附着、釉化
45	93	瓶 B	6 窯床下(13 窯)+埋土+5 窯前庭部	6 窯 b・e・f 区床下 j 層(13 窯)+F 区 3 層+さ 4Cgr 前庭部	口 [11.9]、台 [8.8]、頸 [6.1]、胴 [14.8]、高 22.8、台高 1.2、頸高 9.6	製	やや良	内褐灰、外釉=灰初-ブ	通常	4	右	回転糸切り、胴外下回転ツリ、頸外 4 条沈線、胴外 3 条沈線、頸胴外 1 条隆帯、頸接合 A3 類、ハカツ附着、焼台痕、釉化、容量 1.2L
46	94	瓶 B	灰原	さ 5Agr5 層	口 10.1、頸 5.5、高 (11.2)、頸高 10.4	製	堅緻	内外釉=灰初-ブ	通常	23	-	外 3 条沈線、頸接合 A3 類、土器片附着、ハカツ附着、釉化、実 95 と同一?
47	95	瓶 B	6 窯床下(13 窯)+前庭部+灰原	6 窯 b 区床下 j 層(13 窯)+B 区前庭部はりつき+さ 5Agr1 層+こ 6Bgr2 層+こ 5Agr・こ 5Bgr13 層	台 [9]、胴 [16.5]、高 (12.9)、台高 1	製	堅緻	内褐灰、外釉=灰初-ブ	通常	台 11	右	外下回転ツリ、外 3 条沈線、ハカツ附着、焼台痕、ゆがみ大、釉化、実 94 と同一?
48	102	瓶 D	6 窯埋土(13 窯)+東側堆積+灰原	6 窯 H 区 15-19 層・15' 層+東 e 区 13 層+東 f 区 7 層+さ 6Bgr2 層+し 5Cgr3 層+し 6Agr14 層・15 層+こ 5Bgr3 層・6' 層・13 層+こ 5Cgr6 層+さ 5Agr6' 層+さ 5Dgr4-5 層・6 層	口 [19.1]、底 [14.7]、頸 [13.2]、胴 [26.3]、高 44、頸高 11.7	製	堅緻	内灰白、外灰白~灰	通常	23	左	胴外下回転ツリ、頸外 3 条沈線、胴外 4 条沈線、胴内外舂入、頸接合 A3 類、釉化、容量 7.2L
49	194	壺蓋	13 窯前庭部	し 5Agr 前庭部 5 層	口 12.7、つ径 3、高 5.2、つ高 2.1	製	堅緻	内外灰白	通常	12	右	天外重ね焼き痕、天外回転ツリ、ゆがみ大、釉化
50	195	壺蓋	13 窯前庭部	し 5Agr 前庭部 5 層	口 [12.8]、つ径 [3.2]、高 4.9、つ高 2.2	製	堅緻	内外灰白	通常	18	-	ハカツ附着、釉化
51	208	壺蓋	灰原 (13 窯)	さ 5Dgr2 層・2-3 層+さ 6Agr19 層+さ 7gr 盛土	口 13.1、つ径 2.9、高 4.9、つ高 1.7	製	堅緻	内外灰白~灰	砂少	9	-	釉化
52	209	壺蓋	灰原 (13 窯)	さ 5Dgr2-3 層+さ 6Agr19 層+し 6Agr2 層・5 層・14 層	口 12.6、つ径 2.6、高 4.2、つ高 1.3	製	堅緻	内外灰白~灰	砂少	8	-	釉化
53	140	壺 A	灰原	こ 5Bgr3 層・13 層+さ 5Agr6 層+さ 5Dgr1 層・4-5 層+し 6Agr1 層・14 層	口 [9.8]、頸 [9.9]、胴 [22.1]、高 (17)、頸高 1.7	製	堅緻	内灰白、外釉=灰初-ブ	通常	24	-	胴外 5 条沈線、胴外舂入、胴内舂入、釉化
54	58	坏 A	6 窯床面	6 窯 115	口 [13.2]、底 [6.9]、高 3.1	製	堅緻	内外灰	通常	14	右	
55	59	坏 A	6 窯床面	6 窯 85・87	口 [13.4]、底 [8.7]、高 2.9	製	堅緻	内灰、外明青灰	通常	23	-	ゆがみ大
56	69	坏 A	6 窯埋土	6 窯 N 区 37 層	口 13.4、底 8.1、高 2.6	転?	(2 次被熱)	内灰、外暗青灰	通常	19	-	ゆがみ大
57	62	坏 A	6 窯埋土+5 窯埋土	6 窯 I 区 5 窯埋土 J 区 33 層+6 窯埋土 G 区 33 層	口 [13.6]、底 [8]、高 2.7	転?	(2 次被熱)	内外灰	通常	18	-	底外へ記号「 」
58	67	坏 A	6 窯埋土	6 窯 G 区 8 層	口 [13]、底 [7.4]、高 2.6	転?	(2 次被熱)	内灰、外暗灰	通常	9	-	
59	60	坏 A	6 窯埋土	6 窯 I 区 25' 層	口 [13.4]、底 [7.8]、高 3.2	製	堅緻	内外灰	通常	23	右	ゆがみ大
60	64	坏 A	6 窯埋土	6 窯 G 区 33 層	口 13、底 7.5、高 3	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	24	右?	
61	61	坏 A	6 窯埋土+灰原	6 窯 D 区 19 層・F 区 3 層+こ 6Bgr6 層+こ 6Bgr1 層 2 +こ 6Cgr 7 他内流土層	口 [13.1]、底 [8.5]、高 2.9	製	良好	内灰、外灰~暗灰	砂少	26	-	底外へ記号「 」

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2 (遺物編2)

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
62	66	坏A	6窯埋土+東側堆積	6窯N区+6窯東g区15層	口[13]、底[7.8]、高3.2	製	良	内外灰	通常	9	右?	重Ⅲ類
63	68	坏A	6窯埋土	6窯F区3層	口[12.5]、底[7.6]、高3.2	製	堅緻	内外灰	通常	8	-	重Ⅲ類
64	63	坏A	6窯東側堆積	6窯東h区22層+東h区7-22層	口13.2、底7.8、高3	製	やや不良	内灰白、外灰白~青灰	通常	22	-	
65	65	坏A	6窯東側堆積	6窯東b区	口[12.6]、底[9.4]、高3	製	やや不良	内外灰	通常	9	-	
66	57	坏E	5窯埋土+灰原	5窯C区3層・13層+E区2層・10層+こ6Bgr1層2	口[13.2]、底[9.2]、高4.5	製	良好	内灰、外暗灰	通常	9	-	重Ⅲ類?、?記号「 」?
67	76	盤A	6窯舟底ビット	6窯i区床下m層	口[14.2]、底[11.6]、高2.2	製	良好	内灰、外青灰	砂多	6	-	
68	79	盤A	6窯床面+埋土	6窯128・129+H区8層+N区37層	口[14.4]、底[11.2]、高2	製	良好	内外灰~明青灰	砂多	25	-	
69	78	盤A	6窯舟底ビット+埋土	6窯g区床下h層+H区8層	口15、底11.3、高2.2	製	良好	内外灰	通常	14	右	重Ⅲ類
70	77	盤A	6窯舟底ビット+床面	6窯i区床下m層+118	口15、底11.6、高2.4	製	良	内外灰~青灰	砂多	20	右	
71	80	盤A	6窯埋土	6窯E区15層+G区7-15層	口[15]、底[11.5]、高2	製	良好	内外灰	通常	8	右	
72	81	盤A	6窯埋土	6窯J区38層	口14.6、底11.4、高2.4	製	やや不良	内外白~明青灰	通常	20	右	
73	82	盤A	6窯埋土+東側堆積	6窯H区15下層+F区中③層+東f区中層・13層	口14.6、底11.7、高2.7	転?	(2次被熱)	半暗灰、半灰	通常	34	右	
74	245	盤A	灰原	さ5Dgr2層・最上層	口[14.2]、底[11.2]、高2.1	製	良好	内外灰	通常	12	-	ゆがみ大
75	242	盤A	灰原	さ5Dgr4-5層	口[15.8]、底[13.6]、高1.6	製	堅緻	内外青灰	通常	8	-	
76	28	碗A	6窯床下+床面	6窯i区床下1層+83・101	口[13.6]、底[6]、高3.7	製	良好	内外灰	通常	15	右	体外回転アリ
77	29	碗A	6窯床面	6窯39	口[13.2]、底[5.6]、高3.6	転	(2次被熱)	内灰、外明青灰	砂多	5	右	体外回転アリ
78	31	碗A	6窯床面	6窯44	口[13.5]、底[6.4]、高3.9	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	26	右	体外回転アリ
79	30	碗A	6窯床面+埋土	6窯56+L区34層・36層	口[12.8]、底[5.2]、高3.5	製	良	内外灰	砂多	14	右	体外回転アリ
80	32	碗A	6窯床面	6窯122	口[13.4]、底[5.6]、高3.8	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	10	右	体外回転アリ
81	33	碗A	6窯床面	6窯73	口[13.8]、底[5.7]、高3.8	製	良好	内外灰	通常	24	右	体外回転アリ
82	273	碗A	6窯埋土+東側堆積	6窯G区9層+6窯H区東g区7層・15層	口[13.6]、底[5.7]、高4.6	製	良好	内外灰	通常	11	右	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ
83	274	碗A	6窯埋土+東側堆積	6窯C区9層+6窯H区東g区	口13.1、底5.7、高3.9	製	やや不良	内外灰+灰赤10R5/2	通常	19	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
84	277	碗A	6窯埋土	6窯F区中②層	口13.1、底5.3、高4.3	製	やや良	内外灰白	通常	10	右	体外回転アリ
85	278	碗A	6窯埋土	6窯M区38層	口13.8、底6.1、高4.5	製	不良(生)	内白+灰赤10R5/2、外白	砂多	6	右	体外~底外回転アリ
86	279	碗A	6窯埋土+灰原	6窯K区36・37層+こ5Bgr最上層	口[12.8]、底[5.6]、高4	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	16	右	体外~底外回転アリ、底外転用痕?
87	280	碗A	6窯埋土	6窯H区15下層	口[13]、底[6]、高4.1	製	不良(生)	内外白	通常	2	右	体外~底外回転アリ
88	281	碗A	6窯埋土	6窯E区15層+6窯H区8層下	口[13.3]、底[6]、高4	製	やや不良	内外灰~白	通常	15	右	体外~底外回転アリ
89	282	碗A	6窯埋土	6窯H区東g区15層	口[13.8]、底[6.1]、高3.8	転	(2次被熱)	内外暗青灰	砂多	14	右	体外~底外回転アリ、底外転用痕?、ゆがみ大
90	284	碗A	6窯埋土+東側堆積+灰原	6窯F区+東E区13層+こ6Bgr3層	口[14]、底[5.9]、高3.9	製	良	内外灰	通常	8	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
91	275	碗A	6窯埋土	6窯F区15層	口13.3、底5.4、高3.7	製	不良(生)	内外白	通常	19	右	体外~底外回転アリ
92	276	碗A	6窯埋土	6窯M区38層	口13.2、底6.2、高3.5	製	良	内外明青灰	砂多	25	右	体外回転アリ
93	283	碗A	6窯東側堆積	6窯東i区15層+東F区上③層	口[12.5]、底[6]、高4	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	6	右	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ
94	18	碗B	6窯床下+床面	6窯k区床下m層+38	口[14.8]、台[7.2]、高4.7、台高0.7	製	やや不良	内灰、外青灰	砂多	12	右	合わせ口法、体外回転アリ
95	20	碗B	6窯床面+13窯前庭部	6窯120+さ5Bgr前庭部1層	口[14.8]、台[7.5]、高5.4、台高1	転	(2次被熱)	内外暗灰	砂多	6	右	体外回転アリ
96	22	碗B	6窯床面	6窯59	口[15.5]、台[7.6]、高4.9、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	13	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
97	16	碗B	6窯床下+床面	6窯m区床下m層+91	口[15.2]、台[7]、高4.1、台高0.6	製	良好	内外明青灰~青灰	砂多	2	右	体外回転アリ
98	17	碗B	6窯床面	6窯26・88・114・117	口14.8、台[7]、高4.4、台高0.7	製	良好	内外灰	通常	30	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
99	23	碗B	6窯床面	6窯116	口15.6、台7.5、高4.5、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	26	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
100	19	碗B	6窯床面	6窯115・119	口[14.4]、台[7.3]、高4.9、台高0.6	製	やや良	内外灰	通常	14	-	
101	24	碗B	6窯床面	6窯82	口[15.6]、台[8.1]、高6.3、台高1.1	転	(2次被熱)	内外明青灰	砂多	13	右	体外~底外回転アリ

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
102	25	碗 B	6 窯床面	6 窯 52	口 [16.5]、台 [8.4]、高 6.3、台高 0.8	製	不良 (生)	内外白	砂少	22	-	重Ⅲ類
103	26	碗 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+床面	6 窯 k 区床下 m' 層+50 + 46 + 102	口 [17.6]、台 [8.6]、高 5.7、台高 0.8	製	不良 (生)	内外白~灰白	通常	31	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
104	27	碗 B	6 窯床面+埋土	6 窯 51 + 54 + L 区埋土	口 17.2、台 9、高 5.8、台高 0.7	製	不良 (生)	内外白~灰白	通常	25	-	重Ⅲ類
105	21	碗 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+灰原	6 窯 g 区床下 h 層+さ 5Cgr3 層+さ 5Agr4 層・4' 層+さ 5Dgr 最上層+こ 5Cgr13 層	口 [16.2]、台 [8.4]、高 6.6、台高 1	製	良好	内外灰	通常	8	右	体外~底外回転アリ
106	264	碗 B	6 窯埋土	6 窯 K 区 36 層・37 層+N 区 37 層	口 [14.8]、台 [6.8]、高 4.8、台高 0.5	製	良好	内外青灰~灰	砂少	17	-	ゆがみ大
107	265	碗 B	6 窯埋土	6 窯 K 区 36 層・37 層	口 15.2、台 7.1、高 5、台高 0.6	製	良好	内外青灰~灰	通常	25	右	体外回転アリ
108	266	碗 B	6 窯埋土	6 窯 J 区 36 層・37 層	口 15.6、台 7、高 5.1、台高 0.7	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	21	右	体外回転アリ
109	267	碗 B	6 窯埋土	6 窯 H 区 8 層・15 下層・22 層	口 15.1、台 7.3、高 4.5、台高 0.5	製	良好	内灰白、外灰	砂多	33	-	ゆがみ大
110	268	碗 B	6 窯埋土+東側堆積+灰原	6 窯 J 区 38 層+F 区・東 E 区 13 層+こ 5Bgr13 層	口 14.2、台 7、高 4.8、台高 0.8	製	良好	内外青灰~灰	砂多	20	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
111	271	碗 B	6 窯埋土+東側堆積	6 窯 G 区 15 層+I 区 9' 層+H 区東 g 区 15 層+東 h 区 7 層	口 [14.6]、台 [7]、高 4.8、台高 0.5	製	良好	内外灰	通常	22	右	重Ⅲ類、体外回転アリ、底外 ^ハ 記号「×」、ゆがみ大
112	272	碗 B	6 窯埋土	6 窯 G 区 25 層	口 [13.8]、台 [6.2]、高 4.2、台高 0.7	製	不良 (生)	内外白	通常	11	右	体外回転アリ、底外 ^ハ 記号「 」
113	269	碗 B	6 窯東側堆積	6 窯 d 区 1 層+東 i・j 区 15-19 層+H 区東 g 区 15 層+東 e 区上 ^③ 層	口 [14.6]、台 [7.5]、高 4.9、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	17	右	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ、ゆがみ大
114	260	皿 A	6 窯埋土+5 窯埋土	6 窯 G 区 15 層+6 窯 I 区 5 窯 J 区 33 層	口 13、底 6.6、高 2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	28	右	釉化
115	38	皿 B	6 窯床面+埋土	6 窯 9 + F 区中 ^② 層	口 13.6、台 6.7、高 2.8、台高 0.9	製	良好	内外灰	砂多	22	右	体外回転アリ
116	40	皿 B	6 窯床面+埋土	6 窯 21・23・25・29 + K 区 37 層+左壁崩壊土中	口 [13.2]、台 [6.6]、高 2.6、台高 0.7	製	やや不良	内外白~灰	砂多	29	左	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ
117	45	皿 B	6 窯床面+埋土	6 窯 11・24 + J 区 36 層以下・M 区 37 層	口 13.6、台 6.8、高 2.8、台高 0.8	製	良	内外灰白	通常	25	左	重Ⅲ類、体外回転アリ
118	46	皿 B	6 窯床下+床面	6 窯 h 区床下 s 層・e 区床下+53・57 + G・H 区床はりつき	口 13.5、台 7、高 2.9、台高 0.7	製	やや不良	内外白~灰白	通常	28	右	体外~底外回転アリ
119	34	皿 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+灰原	6 窯 j 区床下 m 層+こ 58gr1 層	口 13.2、台 7.1、高 2.8、台高 0.9	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	35	右	合わせ口法、回転 ^ハ 切り
120	35	皿 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+埋土	6 窯 g 区床下 h 層+i 区床下 m 層+k 区床下 m 層+H 区 25 層以下	口 13.4、台 6.9、高 2.6、台高 0.7	製	良好	内外明青灰	砂多	30	-	重Ⅲ類
121	37	皿 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+床面	6 窯 l 区床下 m 層+135	口 13.8、台 7、高 2.8、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	砂少	32	-	合わせ口法
122	43	皿 B	6 窯床面	6 窯 89	口 13.5、台 6.8、高 2.7、台高 0.7	製	良	内外灰白	通常	30	-	
123	41	皿 B	6 窯床面+埋土	6 窯 77 + K 区 1 層	口 13.6、台 7.1、高 3、台高 0.5	製	やや不良	内外白~灰白	通常	27	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
124	44	皿 B	6 窯床面	6 窯 126	口 [12.8]、台 [6.6]、高 3.3、台高 0.7	転	(2 次被熱)	内外暗青灰	砂多	8	左	重Ⅲ類、体外回転アリ
125	85	皿 B	6 窯床面	6 窯 13 + 3 トナ	口 [13.6]、台 [7.4]、高 3.3、台高 0.7	製	良	内灰白、外明青灰	砂多	15	-	
126	39	皿 B	6 窯床面	6 窯 86	口 [12.5]、台 [6.9]、高 2.5、台高 0.9	製	良好	内外灰~明青灰	砂多	32	右	重Ⅲ類、底外回転アリ
127	36	皿 B	6 窯舟底 ^ビ ツト+床面+灰原	6 窯 g 区床下 h 層+115 + さ 5Bgr1 層	口 12.9、台 6.7、高 2.4、台高 0.8	製	良好	内外灰	砂多	36	-	
128	42	皿 B	6 窯床面	6 窯 79 + 4 トナ (2 区)	口 13.6、台 7.2、高 2.4、台高 0.8	製	やや良	内外白~灰白	通常	31	左	体外~底外回転アリ
129	47	皿 B	6 窯床下+床面	6 窯 h 区床下 s 層・j 区床下 k 層+1・17	口 13.2、台 5.6、高 2.8、台高 0.7	製	やや不良	内明青灰、外灰白~暗青灰	砂多	34	左	合わせ口法、体外回転アリ、ゆがみ大
130	257	皿 B	6 窯埋土	6 窯 B 区中 ^② 層+H 区 15 層	口 [13.5]、台 [6.9]、高 2.7、台高 0.8	転?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	14	左?	体外回転アリ?
131	258	皿 B	6 窯埋土+灰原	6 窯 G 区 9' 層+さ 6Agr3 層	口 [13.5]、台 [6.5]、高 2.9、台高 0.7	製?	(2 次被熱?)	内外暗灰	通常	9	右	体外~底外回転アリ
132	256	皿 B	6 窯埋土	6 窯 G・H 区 25 層	口 [14.5]、台 [7.5]、高 2.5、台高 1	転?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	
133	86	皿 B	6 窯埋土	6 窯 I 区 15 下層	台 9.1、高 (2.2)、台高 1.4	転	(2 次被熱)	内灰、外灰白	通常	台 34	-	焼台転用痕 (台部端ハクリ)
134	87	皿 B	6 窯埋土	6 窯 H 区 15 層+J 区 15 上層	台 8.2、高 (2.5)、台高 1.4	転	(2 次被熱)	内灰、外灰白	砂多	台 29	-	焼台転用痕 (台部端ハクリ)

第二章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2 (遺物編2)

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
135	259	皿 B	6 窯東側堆積	6 窯東 f 区中層	口 [13.8]、台 [7.8]、高 2.9、台高 0.7	製	良	内外灰	通常	5	右	体外回転ケズリ
136	262	皿 B	13 窯前面土坑	し 5Agr 前面土坑 3 層	口 [13.5]、台 [6.4]、高 2.5、台高 0.8	製	(2 次被熱)	内外暗灰	砂多	5	-	
137	144	鉢 B	6 窯埋土+灰原	6 窯 J 区 15 上層+さ 5Agr 上層	口 [23.8]、頸 [22.2]、体 [24.2]、高 (7.8)、頸高 2.4	製	良好	内外灰	通常	13	-	体外 1 条沈線、頸外・体内外付
138	142	鉢 B	6 窯埋土+灰原	6 窯 E・G 区 15 層他	口 [22.9]、底 [11.1]、頸 [21.4]、体 [24.4]、高 12.9、頸高 2.7	製	やや良	内外灰～青灰	通常	16	右	体外下手持ちケズリ、体外下～底部回転ケズリ、体外 1 条沈線、ゆがみ大
139	143	鉢 B	6 窯埋土+灰原	6 窯 F 区中①・②層+H 区 8 層・15 層+J 区 15 下層+し 5Cgr1 層他	口 [25.6]、底 [12.4]、頸 [23.6]、体 [25.6]、高 14.5、頸高 2.8	製	良	内外灰	通常	5	右	体外手持ちケズリ、底外回転ケズリ、体外 1 条沈線
140	145	鉢 C	6 窯埋土+灰原	6 窯 i 区 15' 層+J 区 7(9) 層+I 区 15' 層+こ 5Bgr1 層+こ 5Cgr13 層+さ 5Agr 最上層・上層他	口 [26.2]、底 [10.5]、高 8.6	製	良	内外灰白	通常	5	右	体外下～底外回転ケズリ
141	147	鉢 F	6 窯埋土+東側堆積+灰原	6 窯 J 区 15 下層+東 f 区中層+東 h 区 15 層+こ 5Cgr3 層	口 [17]、高 (16.5)	製	良好	内外灰	通常	6	-	体外 1 条突帯・2 条沈線
142	98	瓶 D	6 窯床下+埋土+東側堆積	6 窯 i 区床下 k 層+J 区 15 下層+F 区中②・中③層+東 g 区 19 層+i・j 区 15-19 層	底 [10.8]、頸 [7.7]、胴 [17.2]、高 (20)	製	良好	内外青灰	砂多	台 36	右	胴外下回転ケズリ、胴外 4 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、ゆがみ大
143	97	瓶 D	6 窯床面+埋土	6 窯 71・74+G 区 8 層+H 区 15 下層	口 [12.4]、底 [10.6]、頸 [7.3]、胴 [17.7]、高 28、頸高 6.9	製?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	28	-	頸外 1 条沈線、胴外 2～3 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、ゆがみ大、釉化、容量 2.8L
144	99	瓶 D	6 窯床下+埋土+東側堆積	6 窯 j 区床下 l 層+H 区 8 層+東 h 区 15' 層+東 f 区中層	口 13.1、頸 7.5、胴 19.5、高 (26.4)、頸高 6.9	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外 1 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、ゆがみ大
145	92	瓶 D	6 窯床面	6 窯 49・54・58・76・80	口 14.2、頸 8.6、胴 19.2、高 (16.4)、頸高 7.9	製?	(2 次被熱)	内明青灰、外青灰	砂多	28	-	頸外 2 条沈線、胴外 2 条沈線、頸接合 B 類
146	104	瓶 D	6 窯前庭部+東側堆積	し 4Dgr 前庭部全 14 層+6 窯東 f 区 15' 層+東 h 区 7 層・15-19 層・15' 層	口 13.6、底 12.4、頸 8、胴 17.6、高 27.5、頸高 6.5	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外 1 条沈線、胴外 5～6 条沈線、頸接合 B 類、容量 3.2L
147	89	瓶 D	6 窯床下+床面+埋土+東側堆積	6 窯 j 区床下 l 層+30・79・139+h 区 15 層+F 区中②層+東 f 区 15' 層+東 h 区 15-19 層	口 19.4、底 14.3、頸 9.9、胴 23.6、高 40.4、頸高 11.1	製	良好	内外灰白～明青灰	砂多	33	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、容量 8.5L
148	88	瓶 D	6 窯床面+前庭部+埋土+東側堆積	6 窯 1+し 4Dgr 前庭部 2 層+6 窯 F 区中②層+東 f 区 15 層	口 18.8、底 14.2、頸 11.2、胴 24.8、高 41、頸高 10.2	製	良好	内外明青灰	砂多	32	-	頸外 2 条沈線、胴外 5 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、容量 9.6L
149	90	瓶 D	6 窯床面+埋土+東側堆積	6 窯 12・111+E 区 15 層+東 i・j 区 15'-19 層、東 f 区中層	口 19.9、底 14.7、頸 10.6、胴 23.8、高 39.6、頸高 9.8	製	良好	内灰白、外灰白～明青灰	砂多	35	-	頸外 2～3 条沈線、胴内外付、頸接合 B 類、容量 8.3L
150	91	瓶 D	6 窯床面+前庭部+埋土+東側堆積	6 窯 34・35・37+し 4Dgr 前庭部 2 層+E 区 15 層+F 区中②・③層+G・H 区 8 層+I 区 25' 層+J 区 7-9 層+東 g 区 19 層+東 h 区 15 層・15-19 層+i・j 区 15'-19 層	口 19.8、底 14.4、頸 10.6、胴 23.9、高 40.5、頸高 11	製	良好	内灰白～青灰、外青灰	砂多	30	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、容量 7.5L
151	96	瓶 D	6 窯床面+東側堆積+13 窯前庭部+灰原	6 窯 62・67・70+左壁前崩落土+東 c 区 1 層+し 5Agr 前庭部 2 層+こ 5Bgr2 層・13 層・1-3 層盛土+こ 5Cgr6 層・10 層+さ 6Agr14 層・19 層+さ 6Dgr1 層+さ 7Agr13 層他	口 [20.4]、底 [14.7]、頸 [10.8]、胴 [23.4]、高 39.7、頸高 9.9	製	良好	内外明青灰	砂多	12	-	頸外 2～3 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外付、頸接合 B 類、容量 7.6L
152	100	瓶 D	6 窯埋土+5 窯埋土+灰原	6 窯 F 区中③層+5 窯 I 区 9 層+こ 6Bgr1 層 2・2' 層・24 層+さ 5Agr4 層・13 層+さ 6Agr19 層+さ 6Bgr1 層+さ 6Dgr1 層・19 層他	口 [19.8]、底 [15]、頸 [11.3]、胴 [25.1]、高 39.7、頸高 10	製	良好 (口頸 2 次被熱)	内外灰白～明青灰	通常	33	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、内板付、胴外付、頸接合 B 類、加付付着、容量 8.3L
153	103	瓶 D	6 窯東側堆積	6 窯東 g 区 19 層+東 j 区 30 層+東 i・j 区 15'-19 層	口 12.5、底 10、頸 7.1、胴 15.9、高 26.7、頸高 6.9	製	良好	内灰、外青灰	砂多	34	右	胴外下回転ケズリ、頸外 1 条沈線、胴外 3 条沈線、頸接合 B 類、釉化、容量 2.2L
154	105	瓶 D	6 窯東側堆積+灰原	6 窯東 g 区 19 層+し 6Bgr2 層・14 層	口 12.1、底 9.2、頸 6.7、胴 17.3、高 26.9、頸高 6.9	製	良好	内灰白、外明青灰	通常	34	-	頸外 1 条沈線、胴外 4 条沈線、頸接合 B 類、焼台付着、釉化、容量 2.4L

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
155	106	瓶 D	6 窯東側堆積 + 灰原	6 窯東 h 区 15-19 層 + 5Bgr13 層他	口 14.3、頸 8.2、胴 18.3、高 (20.2)、頸高 7.6	製	良	内明青灰～灰、外明青灰	通常	23	-	頸外 2 条沈線、胴外 2 条沈線、頸接合 B 類
156	131	壺 A	6 窯床面	6 窯 63	台 18.1、高 (4.4)、台高 4.1	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	台 36	-	方形穿孔 2
157	132	壺 A	6 窯床下 + 埋土	6 窯 j 区床下 f 層 + H 区 15 下層	台 17.8、高 (3.4)、台高 2.8	転	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	台 30	-	カケツ附着
158	196	壺蓋	6 窯埋土	6 窯 N 区 40 層	口 14.4、つ径 3.7、高 4.2、つ高 1.8	製	良	内外灰白～明青灰	砂多	15	右	天外回転ケリ、ゆがみ大、釉化
159	137	壺 F	6 窯床下 + 床面 + 埋土	6 窯 1 区床下 + 6 窯 5・28・53・66・72・75・84・113 + H 区 8 層	口 18.2、底 11.6、頸 16.6、胴 24.8、高 29.2、頸高 3.3	転	(2 次被熱)	内灰白、外明青灰	砂多	20	-	胴外～底外ハ He 類、胴内～底内当て具無文?→カケツ、胴外ハハ?、焼台痕、容量 8.4L
160	133	小型壺 F	6 窯埋土	6 窯 E 区 15 層 + G 区 9 層・15 層	口 [12.8]、頸 [11.7]、胴 [15.8]、高 (12.4)、頸高 1.8	製	良好	内灰、外灰白	砂多	11	-	胴外 1 条沈線?、胴外ハハ、釉化
161	135	壺 F	6 窯埋土 + 灰原	6 窯 J 区 1 層 + 5Bgr1 層 + 5Dgr2 層・3 層 + 6Agr3 層 + 6Cgr3 層他	口 [22.7]、頸 [21.6]、胴 [28.9]、高 (23.6)、頸高 3	製	やや不良	内釉 = 灰白-ブ、外灰白～灰	砂多	4	-	胴外 4～5 条沈線、土器片附着、ゆがみ大、釉化
162	139	壺 F	6 窯東側堆積 (灰層) + 灰原	6 窯東 h 区 18 層 (灰層) + 6Agr3 層・19 層 + 5Dgr13 層他	口 20.6、底 13.9、頸 19.1、胴 25.8、高 25.7、頸高 3.6	製	良好	内釉 = 灰白-ブ、外灰白～明青灰	砂多	28	-	胴外 1 条沈線、胴外ハハ、焼台 (D 類)・カケツ附着、釉化、容量 8.3L
163	114	中甕	6 窯東側堆積 + 灰原	6 窯東 f 区上層 + 5Bgr2 層・3 層・13 層 + 5Cgr1 層・3 層 + 6Bgr3 層 + 5Cgr2 層	口 [20.2]、頸 [16.6]、胴 [31.6]、高 (32.5)、頸高 6.5	製	堅緻	内釉 = 灰白-ブ、外灰白	通常	12	-	外ハハ Ha 類、内当て具 SD 類→カケツ、ゆがみ大、釉化
164	152	長胴釜	6 窯埋土 + 東側堆積	6 窯 J 区 15 上層 + H 区 (東 g 区) 15 層 + 東 f 区 13 層	口 [23.1]、頸 [21.5]、胴 [24.4]、高 (18.7)、頸高 1.6	製	やや良	内外青灰	礫極多	14	-	外ハハ He 類、内当て具カケツ、ゆがみ大
165	122	小型瓶	6 窯埋土 + 灰原	6 窯 D・F 区 3 層 + D 区 20 層 + 5Bgr1 層 + 5Dgr7t 20 層 + 5gr	口 [5.3]、底 [4.9]、頸 [3.6]、胴 [9]、高 10.1、頸高 3.4	製	良	内灰、外釉 = 灰白-ブ	通常	7	右	回転糸切り、頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外ハハ、頸接合 B 類、土器片附着、釉化、容量 0.2L
166	121	小型瓶	6 窯埋土 + 東側堆積 + 灰原	6 窯 E・G 区 15 層 + I 区 9 層 + 東 i 区 15 層・23 層 + 5Bgr3 層 + 4Dgr カケツ	底 [6.4]、胴 [10.6]、高 (9.2)	製	堅緻	内灰、外釉 = 灰白-ブ 黒 5Y3/1	通常	底 13	-	回転糸切り、胴外 2 条沈線、釉化
167	304	管状土鍾	6 窯埋土	6 窯 E 区 15 層	長 5.18、幅 2.85、孔 1.14、重 38.4g	製	やや良	明青灰	通常	-	-	カケツ附着
168	305	管状土鍾	6 窯埋土	6 窯 I 区 25 層	長 5.23、幅 3.09、孔 0.97、重 43.1g	製	不良 (生)	白	通常	-	-	
169	306	管状土鍾	6 窯埋土	6 窯 J 区 15 下層	長 5.17、幅 2.98、孔 1.06、重 39.7g	製	やや不良	灰	砂少	-	-	
170	307	管状土鍾	6 窯埋土	6 窯 J 区 15 層	長 5.17、幅 2.75、孔 0.89、重 35.9g	製	良	灰	砂少	-	-	
171	303	管状土鍾	6 窯東側堆積	6 窯東 1 区カケツ	長 5.58、幅 3.00、孔 0.99、重 46.6g	製	やや不良	灰白～白	砂少	-	-	
172	49	坏 A	5 窯床下	5 窯 1 区床下	口 [14]、底 [7.3]、高 2.5	転	(2 次被熱)	内外暗灰	通常	6	-	
173	52	坏 A	5 窯床下	5 窯 e 区床下 g 層	口 [13.8]、底 [7.2]、高 3.2	製	不良 (生)	内外白	通常	8	右	
174	50	坏 A	5 窯床下	5 窯 c 区床下 f 層	口 [14.2]、底 [8.4]、高 3	製	良	内灰白、外灰	通常	5	-	
175	48	坏 A	5 窯床下	5 窯 e 区床下 f 層	口 [13.9]、底 [7.8]、高 3.4	製	不良 (酸)	内灰褐 5YR4/2、外灰	通常	7	-	
176	51	坏 A	5 窯床下	5 窯 d 区床下 f 層・c 区床下 f 層	口 [13.6]、底 [5.4]、高 3.4	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 10YR8/4～8/6	通常	6	-	
177	54	坏 A	5 窯土器集中	土器集中 132	口 [12.5]、底 [8.1]、高 2.9	転	(2 次被熱)	内外暗灰	通常	6	右?	底外ハ記号「J」
178	55	坏 A	5 窯土器集中	土器集中 76	口 [13]、底 [6.8]、高 3.4	製	やや不良	内外灰白	通常	5	右	重皿類、底外ハ記号「X」?
179	56	坏 A	5 窯土器集中	土器集中 86	口 [13.1]、底 [6.6]、高 3.3	転?	(2 次被熱)	内外灰	通常	30	右	重皿類?、カケツ附着
180	53	坏 A	5 窯埋土	5 窯 E 区 13 層	口 [13.2]、底 [8]、高 2.9	転	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	
181	11	碗 A	5 窯床下	5 窯 c 区床下 f 層	口 [12.8]、底 [6]、高 3.9	製	やや不良	内外白～灰白	砂多	6	右	
182	12	碗 A	5 窯床下	5 窯 c 区床下 f 層	口 [13.2]、底 [6.1]、高 4.6	製	不良 (生)	内外白	砂多	12	-	
183	13	碗 A	5 窯前庭部 + SK03	5 窯前庭部はりつき + SK03A 区 + 2 区表土	口 [12.5]、底 [5.4]、高 3.5	転?	(2 次被熱)	内灰白、外白	通常	7	右	体外回転ケリ、底外ハ記号「J」
184	14	碗 A	5 窯埋土	5 窯 E 区 19 層・20 層 + 6Cgr7t 内流土層	口 [12.8]、底 [5.5]、高 4.4	転?	(2 次被熱)	内灰白、外青灰	砂多	6	右	重皿類、体外回転ケリ
185	15	碗 A	5 窯埋土	5 窯 C 区 13 層	口 [13]、底 [5.2]、高 3.8	製	良好	内外灰	通常	32	右	体外～底外回転ケリ
186	5	碗 B	5 窯床下	5 窯 f 区床下 f 層・g 層	口 [14.5]、台 [7]、高 4.8、台高 0.8	製	やや不良	内外灰白	通常	2	左	体外回転ケリ
187	8	碗 B	5 窯床下 + 埋土	5 窯床下 a'・d 区床下 f 層 + C 区 3 層・4.5 層 + 5・6 窯床下廢土	口 14.6、台 [7]、高 5、台高 0.7	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/4	砂多	19	右	体外回転ケリ
188	6	碗 B	5 窯床下	5 窯床下 c 層 + 5・6 窯床下廢土	口 [13.4]、台 [5.9]、高 4.4、台高 0.7	製	不良 (酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6	通常	17	-	

第II章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2 (遺物編2)

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
189	9	碗B	5窯床面	5窯58・61・68・90+5・6窯廃土	口[15.8]、台7.5、高5.1、台高0.8	製	不良(生・酸)	内外白～灰	通常	9	-	
190	10	碗B	5窯床面+6窯埋土	5窯55・63・64+6窯L区23'層	口[15.5]、台[7.1]、高5.2、台高0.7	製	不良(生・酸)	内外白～灰白	通常	3	-	
191	7	碗B	5窯床下+6窯埋土	5窯床下c層+6窯F区	口[16.8]、台[7.7]、高6.2、台高1	製	不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6	砂多	13	-	
192	215	碗B	5窯床下	5窯d区床下f層	台6.8、高(1.8)、台高0.7	製	不良(生)	内外白	通常	台36	-	
193	216	碗B	5窯床面	5窯14	台7、高(1.1)、台高0.6	製	不良(生)	内外白～灰	通常	台33	-	
194	263	碗B	5窯土器集中	5窯土器集中85	口[13.8]、台[7.8]、高5、台高0.7	製	堅緻	内灰白、外灰	砂多	14	右?	ゆがみ大、釉化
195	217	碗B	5窯埋土	5窯I・J区22層底	台7.2、高(1.3)、台高0.6	製	不良(生)	内外白	通常	台36	-	
196	270	碗B	6窯埋土	6窯C区7層・15層・24層+J区1層	口[16]、台[7.8]、高5.9、台高1	製	不良(酸)	内外浅黄橙 10YR8/4～8/6	通常	23	-	
197	1	皿B	5窯床下	5窯e区床下g層	口[14.2]、台[6.9]、高3.7、台高0.5	製	不良(生)	内外白	通常	18	右	重皿類、底外回転アリ
198	2	皿B	5窯床下	5窯e・d区床下f層	口[13.8]、台7.3、高3.4、台高0.8	製	不良(生)	内外白	通常	22	右	
199	4	皿B	5窯床下	5窯a・c区床下f層	口[14.2]、台[7.4]、高3.4、台高0.8	製	不良(生)	内外白	砂多	3	右	底外回転アリ
200	3	皿B	5窯床下	5窯a・c・d区床下f層	口13.8、台6.6、高2.9、台高0.8	製	不良(生)	内外白	通常	35	右	重皿類
201	261	皿B	5窯土器集中	5窯土器集中136	口[13.2]、台[5.9]、高3.5、台高0.9	製	不良(酸)	内外浅黄橙 10YR8/4	通常	9	-	
202	149	鉢B	5窯埋土+6窯埋土+6窯東側堆積	5窯C区1層+D区中層+E区1層+H区2'層・19層+6窯G区15層・33層+H区5層+I区9層+東g区15層+東f区中層・7層他	口[23.5]、底[12.4]、頸[22]、体[24.1]、高14.2、頸高3.1	製	やや不良	内外灰	通常	36	-	体外下手持ちアリ、体外1～2条沈線、ゆがみ大
203	179	鉢B	5窯埋土	5窯F区2'層他	口[20.6]、底[12]、頸[20.6]、体[24.2]、高15.2、頸高2.6	製	良好	内灰白、外灰	通常	3	右?	体外下回転アリ?、ゆがみ大
204	178	鉢B	5窯埋土+灰原	5窯F区2'層・17層・20層+F区2'層・17層+こ6Bgr2'層・24層+さ6Agr1層・14層・19層	口[22.9]、底[10.6]、頸[22.4]、体[24.4]、高13.4、頸高1.3	製	やや不良	内外赤灰+灰	砂多	29	右	体外下回転アリ、体外1条沈線、ゆがみ大
205	177	鉢B	5窯埋土+灰原	5窯E区2層・10層・17層・20層+こ5Agr13層他	口20.3、体21、高(8.7)	製	良	内暗灰、外灰～明青灰	砂多	36	-	体外下アリ、正位重ね焼き
206	148	鉢B	6窯東側堆積+灰原	6窯東f区7層・13層+東h区15層・25層他	口[20.6]、底[10.5]、頸[21.1]、体[25]、高16.2、頸高1.9	製	不良(生)	内外白+浅黄橙 10YR8/4	砂多	26	右	口頸外2条沈線、体外3条沈線、体外～底外回転アリ
207	151	鉢B	灰原(5窯)	こ6Bgr2'層・3層・タテ7'内6層・24層+さ4Bgr1層+さ6Agr19層他	口[24]、頸[24.6]、体[27.2]、高(12.9)、頸高2.3	製	不良(酸)	内灰褐 7.5YR6/2～5/2、外橙 5YR6/6	礫多	20	右	体外回転アリ
208	169	鉢B	SK07	SK07A区中層・下層+B区13層・下層・7'内+D・B'区中層+き8gr	口[22.8]、底[9.9]、頸[23.2]、体[25.1]、高15.9、頸高1.3	製	不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6～10YR8/4	通常	9	-	体外下手持ちアリ、体外2条沈線、外双付着
209	167	鉢B	SK07	SK07C区1層・13層+D区1層+調D区表土	口[23.3]、底[9.6]、体[25.6]、高13.7	製	不良(酸)	内にぶい橙 5YR6/4～7/4、外灰	砂多	4	右	体外～底外回転アリ、体外2条沈線、内外付着?
210	146	鉢F	5窯前庭部+6窯東側堆積+灰原	さ4Cgr前庭部5層+6窯東h区15層・7-22層+こ5Cgr3層他	口[17.8]、底[9.3]、高15.9	転?	(2次被熱)	内外灰	通常	16	-	回転糸切り、体外2条突帯・2～3条沈線、体内付着?、底外へ先刺突
211	107	瓶B	5窯土器集中	5窯土器集中22+B区	口10.1、台8、頸5.7、胴14.6、高20.8、台高0.6、頸高8	製	堅緻	内外灰白	通常	1	-	頸外2条沈線、胴外1条沈線、頸接合A3類、カヅ・焼台・切り肩付着、釉化、容量1.1L
212	118	瓶B	5窯土器集中+6窯東側堆積	5窯土器集中B区下底、6窯H区(東g区)15層+東f区上③層+東h区7層+東i区15'層	口[10.5]、頸5、高(13.1)、頸高9.1	製	堅緻	内灰白～明青灰、外灰	通常	30	-	頸外2条沈線、胴外1条沈線、頸接合A3類、釉化
213	108	瓶D	5窯土器集中+6窯東側堆積+灰原	5窯土器集中1・32+6窯東h区7層・22層+こ5Bgr2層	口15.5、底12.4、頸8.9、胴20.1、高33.9、頸高7.4	製	良好	内灰白、外明青灰～灰白	砂多	21	-	頸外3条沈線、胴外4～5条沈線、頸接合B類、釉化、容量4.3L
214	112	瓶D	5窯土器集中	5窯土器集中3	口12.6、底9.1、頸7.1、胴17、高28.9、頸高6.9	製	良好	内灰、外明青灰	通常	5	右	胴外下回転アリ、頸内1条沈線、胴外4条沈線、胴外付着、頸接合B類、カヅ・焼台A付着、釉化、容量2.8L

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
215	109	瓶 D	5 窯土器集中 + 6 窯埋土 + 東側堆積 + 灰原	5 窯土器集中 2 + 6 窯 H 区 15 層・中②層 + H 区・東 G 区 15 層 + さ 4Bgr1 層	口 12.6、頸 7.6、胴 16.6、高 (25.5)、頸高 5.9	製	堅緻	内灰白、外灰～暗灰	通常	28	-	頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外下へび?、頸接合 B 類、釉化、容量 2.2L
216	111	瓶 D	5 窯土器集中	5 窯土器集中 34	頸 6.4、胴 16、高 (19.7)	製	堅緻	内灰、外灰白～明青灰	通常	-	-	胴外 3 条沈線、胴内外へび、頸接合 B 類、かか付着、釉化
217	110	瓶 D	5 窯土器集中 + 灰原	5 窯土器集中 37 + こ 6Bgr3 層	底 8.2、頸 7.2、胴 16.5、高 (21)	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	底 8	-	胴外 4 条沈線、胴内外へび、頸接合 B 類、かか付着、釉化
218	101	瓶 D	5 窯埋土 + 6 窯埋土 + 灰原	5 窯 D 区 13 層 + 6 窯 E 区 15 層 + G 区 7 層・9 層・15 層 + さ 7Dgr 他	口 [13.6]、頸 8、胴 18.2、高 (23.3)、頸高 6.8	転?	(2 次被熱)	内外青灰～明青灰	砂多	24	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、頸接合 B 類
219	170	瓶 D	SK07	SK07A 区 6 層・13 層・下層 + B 区 13 層・下層 + C 区 1 層	口 [22]、胴 [25.5]、高 (38.2)	製	不良 (酸)	内灰、外橙 5YR6/6～7/6 + 灰	通常	8	-	頸外 2 条沈線、胴外 4～5 条沈線、内へび、実 171 と同一か
220	171	瓶 D	SK07	SK07B 区 拡張道路	底 [10.1]、高 (7.5)	製	不良 (酸)	内にぶい黄橙 10YR6/3、外橙 5YR7/6	通常	底 9	-	実 170 と同一か
221	134	壺 A'	5 窯土器集中 + 埋土 + 6 窯埋土	5 窯土器集中 68・C 区 1 層 + 6 窯 G 区 7-15 層・15' 層他	口 [17.4]、頸 [17.1]、胴 [33]、高 (23.7)、頸高 2	製	やや良	内暗灰～暗青灰、外灰	通常	2	-	外へび He 類→へび、内当て具 SD 類→刃先
222	138	壺 A'	5 窯埋土 + 6 窯埋土	5 窯 F 区 2' 層 + 6 窯 G 区 7 層・15 層・15' 層 + H 区 15' 層 + J 区 24 層	口 16.7、頸 16.2、胴 30.8、高 (20.2)、頸高 2.4	製	やや良	内灰～明青灰	砂多	31	-	胴外 4～5 条沈線、胴内へび?
223	136	壺 G	5 窯床下 + 埋土 + 灰原	5 窯床下 c 層 + C 区 4・5 層 + さ 6Agr1 層・14 層・19 層 + さ 6Dgr1 層 + し 5Agr 前面土坑全 2 層他	口 [8.3]、底 [12.2]、頸 [8.5]、胴 [20.2]、高 24.4、頸高 2.9	製	やや不良	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	25	右	胴外下へび?→回転へび、頸外 1 条沈線、胴外 5～6 条沈線、容量 4.5L
224	173	小型壺 G	灰原 (5 窯)	こ 5Bgr2-3 層 + こ 5Cgr3 層・6 層 + こ 6Bgr2 層 + さ 5Agr2 層	口 4.9、頸 5.2、胴 14.1、高 (11.5)、頸高 2.8	製	良	内灰、外明青灰～青灰	通常	36	-	胴外 4 条沈線、かか付着、ゆがみ大、釉化
225	113	平底甕	5 窯床面 + 埋土	5 窯 6・22・23・25・32・33・38・39・59・70・82・83 + 床はりつき + D 区 13 層 + F 区 2' 層 + G 区 13 層・23 層 + G・H 区 6 層 (20 層下) + H 区 23 層	口 29.3、底 13.9、頸 27.4、胴 37.7、高 28.9、頸高 6.9	製	良	内明青灰～灰、外明青灰	砂多	23	-	外へび He 累、内当て具 (SD 類?)→刃先、釉化、容量 16.5L
226	117	平底甕	5 窯前庭部	さ 4Cgr1 層・前庭部全 2 層 + さ 5Bgr 最上層・前庭部全 2 層他	口 17.8、底 13.5、頸 15.1、胴 31.1、高 35.4、頸高 3.2	製	不良 (生)	内外白	通常	28	-	外へび Ha 類、内当て具 SD 類→刃先、容量 15.6L
227	159	平底甕	5 窯埋土 + 灰原	5 窯 C 区 1 層・2 層・13 層 + E 区 13 層 + F 区 17-21 層 + さ 6Agr19 層	底 13.2、胴 36.6、高 (29.4)	転?	(2 次被熱)	内暗灰～暗赤灰 (2.5YR3/1)、外灰	礫極多	底 30	-	外へび He 類、内当て具無文→刃先、ゆがみ大
228	168	甕形深鉢	SK07	SK07A 区 13 層・中層・下層 + C 区 1 層 + D 区 下層・下層③層 + D・D' 区 中層他	口 [35.6]、底 [19]、高 [33.1]	製	堅緻	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	16	-	外へび Ha 類、内当て具刃先 + へび、内酸化
229	156	長胴釜	5 窯土器集中 + 灰原	5 窯土器集中 13・68・83・98・101・110・115・128・B 区下底 + こ 5Dgr6' 層	口 [20]、頸 [18.6]、胴 [21.4]、高 (24.9)、頸高 2.1	製	良好	内灰白～灰、外灰白	礫極多	34	-	外へび He 類、内当て具 He 類
230	157	長胴釜	5 窯土器集中	5 窯土器集中 4・9・10・14・15・18・45・88・89・91・92・B 区下底	口 [21.3]、頸 [20]、胴 [22.4]、高 (23.3)、頸高 2.1	製	やや良	内灰白～白、外青灰	礫極多	12	-	外へび He 類、内当て具 He 類→刃先、かか付着、ゆがみ大
231	153	長胴釜	5 窯土器集中	5 窯土器集中 41・46・48・49・50・83・B 区下底	口 [22.6]、頸 [21.1]、胴 [22.6]、高 (18.3)、頸高 1.8	製	やや不良	内明青灰～灰、外灰白～青灰	砂多	15	-	外へび He 類、内当て具 He 類?→刃先
232	155	長胴釜	5 窯埋土	5 窯 C 区 13 層	口 [14.9]、頸 [14]、胴 [16.4]、高 (11.4)、頸高 1.8	製	良好	内明青灰～灰、外明青灰～灰白	礫極多	14	-	釉化
233	297	コップ形	5 窯埋土 + 灰原	5 窯 F 区 2 層 + さ 5Agr 最上層他	口 [12]、底 [7.9]、高 11.2	製	良好	内灰、外暗灰	砂少	4	右	回転糸切り、外 5～6 条沈線、有蓋
234	226	坏 A	灰原	さ 6Agr	口 [12.8]、底 [8.2]、高 3.4	製	良	内外灰	砂少	12	右	重 III 類、底外へび記号「×」
235	228	坏 A	灰原	さ 5Agr13 層・2 層・上層 + さ 5Dgr3 層	口 13、底 8.5、高 3.3	製	良好	内外灰	通常	18	右	底外へび記号「 」、ゆがみ大
236	229	坏 A	灰原	さ 5Dgr4-5 層	口 [13.2]、底 [7.6]、高 3.2	製	良	内外灰	通常	10	-	
237	233	坏 A	灰原	こ 5Agr6 層他	口 [13.2]、底 [8.6]、高 3.2	製	堅緻	内外青灰	通常	6	-	重 III 類
238	218	坏 A	灰原	し 5Dgr2 層他	口 13.4、底 7.5、高 3.4	製	良好	内外灰	通常	27	右	重 III 類
239	221	坏 A	灰原	さ 5Cgr3 層	口 13、底 8、高 3.4	製	不良 (生)	内外白	通常	24	右	
240	220	坏 A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [12.5]、底 [7.9]、高 2.8	製	堅緻	内外青灰	砂多	32	-	重 III 類、底外へび記号「 」

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2（遺物編2）

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
241	224	坏A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [12.7]、底 [8.1]、高 2.5	製	堅緻	内外青灰	通常	10	-	重Ⅲ類、底外へ記号「J」
242	223	坏A	灰原	さ 6Agr3 層	口 [11.8]、底 [7.1]、高 2.4	転	(2次被熱)	内外灰	通常	9	-	底外へ記号「J」?
243	235	坏A	灰原	さ 5Dgr2 層・3 層	口 [13]、底 [7.9]、高 2.8	製	やや良	内赤灰、外灰	通常	12	-	
244	230	坏A	灰原	こ 5Bgr1 層	口 [13.5]、底 [8.7]、高 2.6	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	11	-	
245	236	坏A	灰原	さ 6Agr19 層	口 [12.2]、底 [7.4]、高 2.6	製	良好	内外灰	通常	9	-	
246	222	坏A	灰原	こ 5Bgr2 層+さ 6Agr19 層+さ 6Bgr2 層・3 層他	口 11.8、底 7.4、高 3.5	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	30	-	底外へ記号「X」、焼台転用痕、ゆがみ大
247	238	坏A	灰原	さ 5Dgr2 層	口 [13.2]、底 [8.1]、高 3.5	製	良好	内外灰	通常	9	-	
248	232	坏A	灰原	こ 6Bgr1 層 2	口 [11.8]、底 [6.8]、高 3.2	製	不良(生)	内外白	通常	10	-	
249	219	坏A	灰原	こ 5Cgr3 層	口 [12.2]、底 [6.8]、高 3.1	製	良好	内外灰	通常	31	右	重Ⅲ類、ゆがみ大
250	253	盤A	灰原	さ 5gr2 層・4-5 層	口 [14.4]、底 [12.4]、高 1.9	製	堅緻	内外灰白	通常	6	-	カケ付着、釉化
251	252	盤A	灰原	さ 6Bgr6 層+さ 5Cgr14 層他	口 [16]、底 [13.6]、高 2.4	製	堅緻	内外灰白	通常	14	-	重Ⅲ類、ゆがみ大
252	247	盤A	灰原	し 6Agr1 層	口 14.6、底 12.3、高 2.2	転	(2次被熱)	内外青灰	通常	6	-	転用痕(土器片付着)
253	243	盤A	灰原	こ 5Cgr6 層+さ 5Dgr3 層	口 [15.4]、底 [12.7]、高 1.8	製	良好	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大
254	255	盤A	灰原	さ 5Dgr2-3 層	口 [16.4]、底 [14.2]、高 1.7	製	不良(生)	内外白~灰	通常	7	-	
255	244	盤A	灰原	さ 5Dgr2 層・4-5 層	口 [15.5]、底 [13.5]、高 1.9	製	良好	内外青灰	通常	10	-	
256	248	盤A	灰原	さ 5Cgr1 層・13 層+さ 6Agr3 層+し 6Agr14 層	口 [14.5]、底 [12.8]、高 2	転?	(2次被熱)	内外青灰	通常	19	右	カケ・土器付着(転用痕?)、ゆがみ大
257	251	盤A	灰原	さ 6Agr19 層+さ 5Dgr4-5 層	口 [15.8]、底 [13]、高 2.1	製	不良(生)	内外白	通常	4	左?	
258	250	盤A	灰原	さ 5Cgr1 層・3 層+さ 5Dgr4-5 層	口 [15.5]、底 [13.1]、高 2.2	製	不良(生)	内外白	通常	16	-	
259	210	埵A	灰原	こ 5Cgr9 層	口 [12.6]、底 [5.4]、高 4.4	転	(2次被熱)	内外灰	通常	12	左	体外~底外回転ケリ、カケ付着、灰釉模倣?
260	212	埵A	灰原	さ 5Agr6 層	口 13.5、底 6.2、高 4.2	製	良好	内外灰	通常	23	右	体外回転ケリ
261	211	埵A	灰原	こ 5Cgr2-3 層	口 [13.4]、底 [6.6]、高 4	製	不良(生)	内外白	通常	15	右	体外回転ケリ
262	213	埵A	灰原	こ 5Bgr1 層・2 層・13 層・最上層・盛土+さ 5Dgr 2-3 層	口 13.6、底 6.3、高 4.4	製	やや良	内外赤灰~灰	通常	34	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ
263	285	埵B	灰原	こ 5Bgr3 層	口 [14.2]、台 [7.2]、高 4.8、台高 0.6	製	やや不良	内外灰白	通常	17	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ
264	286	埵B	灰原	こ 5Cgr2-3 層・6 層	口 14、台 6.8、高 5.1、台高 0.7	製	やや不良	内外灰	通常	22	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ
265	214	埵B	灰原	こ 6Bgr 7' 内 3 層	口 14.6、台 6.8、高 5.3、台高 0.7	製	良好	内外灰	通常	29	-	重Ⅲ類
266	287	埵B	灰原	さ 5Dgr2-3 層・1-13 層他	口 [14.5]、台 [6.3]、高 4.3、台高 0.8	製	堅緻	内外灰	通常	19	-	重Ⅲ類、ゆがみ大
267	290	皿B	灰原	こ 5Cgr3 層・13 層+こ 6Bgr1 層	口 13.5、台 6.5、高 3、台高 0.6	製	良好	内外灰	砂多	36	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ
268	289	皿B	灰原	さ 5Agr2 層+さ 5Dgr3 層	口 [14.1]、台 [7.5]、高 3.1、台高 0.8	製	堅緻	内外灰	通常	27	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ、ゆがみ大
269	291	皿B	灰原	さ 5Agr3 層	口 14.1、台 6.6、高 3.3、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	砂多	23	右	重Ⅲ類、体外回転ケリ、ゆがみ大
270	294	皿B	灰原	さ 5Dgr3 層・最上層	口 [13.6]、台 [6.9]、高 2.9、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類、釉化
271	288	皿B	灰原	こ 5Bgr13 層+こ 5Cgr2' 層+さ 6Dgr19 層他	口 [13.1]、台 [6.5]、高 3.6、台高 0.7	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	23	-	重Ⅲ類、底外へ記号「J」
272	292	皿B	灰原	こ 5Dgr1 層+し 5Dgr 最上層	口 13.5、台 6.5、高 3.4、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	17	-	重Ⅲ類
273	293	皿B	灰原	こ 5Bgr13 層+さ 5Agr6 層+さ 5Bgr1 層	口 14.2、台 6.6、高 3.6、台高 0.6	製	良好	内外青灰~灰	通常	20	-	重Ⅲ類
274	295	皿B	灰原	こ 5Cgr3 層+さ 5Cgr3 層	口 [14.2]、台 [7]、高 3.7、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類
275	296	皿B	灰原	こ 5Cgr13 層	口 [12.2]、台 [6.3]、高 3.5、台高 0.5	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	13	-	重Ⅲ類
276	150	鉢B	灰原	こ 5Agr13 層・最上層+こ 5Bgr1 層	口 [23.4]、底 [9.8]、頸 [21.2]、体 [24.2]、高 15.1、頸高 3.2	製	良好	内外灰	砂少	20	右	体外下手持ちケリ、底外回転ケリ、体外 1 条沈線、体内外拵、ゆがみ大
277	164	鉢B	灰原	し 6Bgr2 層	口 21.6、底 12.2、頸 19.3、体 22.5、高 14.3、頸高 2.5	製	良好	内外灰	通常	36	-	回転糸切り、体外 2 条沈線、内外拵
278	163	鉢F	灰原	こ 5Agr13 層+さ 5Bgr1 層+さ 6Agr2 層他	口 17.6、高 (15.9)	製	良好	内外灰	通常	19	右	体外回転ケリ、体外 1 条突帯・2 条沈線、内外拵?

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
279	120	瓶 B	灰原	こ 5Cgr1 層+さ 5Agr3 層・6 層+こ 6Bgr3 層他	台 8.7、胴 15.2、高 (10.4)	製	堅緻	内灰、外釉 = 灰 初-ブ	通常	台 23	右	胴外下回転ケリ、胴外 2 条沈線、焼台 (C 類)・カケ付着、釉化
280	162	瓶 D	灰原	さ 6Agr1 層・19 層+さ 6Dgr タテ 7 内 19 層	頸 [11.4]、胴 [26.8]、高 (22.1)	製	堅緻	内外灰白	通常	-	-	外ケリ He 類、内当て具 He 類→刃ケリ、頸内 1 条沈線、胴外 2 条沈線、ゆがみ大、釉化
281	141	壺 F	灰原	こ 6Bgr2 層・34 層+さ 6Agr3 層・6 層・19 層+さ 6Cgr3 層+さ 7Agr13 層他	口 [19.1]、底 [13.1]、頸 [17.2]、胴 [25.6]、高 27.6、頸高 3.6	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	胴外 4 条沈線、胴内外ケリ、釉化、容量 8.5L
282	174	壺 F	灰原	こ 6Agr3 層+さ 6Agr1 層・2 層・3 層・6 層・19 層+さ 6Dgr13 層・19 層他	口 20.2、底 12.6、頸 16.8、胴 24.2、高 28.5、頸高 4.3	製	堅緻	内灰、外釉 = 灰 初-ブ	通常	35	-	胴外ケリ、焼台痕、釉化、容量 8.4L
283	172	壺 F	灰原	こ 6Bgr3 層・20 層他	口 [14.1]、底 [9.1]、頸 [13]、胴 [18.8]、高 16.6、頸高 2.2	転?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	21	-	頸外 1 条沈線、胴外 3~4 条沈線、胴外ケリ、底外工具ケリ? →ハ記号「 」、カケ付着、ゆがみ大、釉化、容量 1.0L
284	161	横瓶	灰原	さ 5Dgr3 層+さ 6Agr2 層・6 層・19 層+さ 6Cgr8 層+さ 6Dgr19 層+し 6Agr5 層・14 層他	口 10.8、頸 10.5、胴 30.9、高 24.8、頸高 2.6	製	堅緻	内灰白~明青灰、外灰白~灰	通常	27	-	底部側面：外ケリ Ha 類・内当て具 Da 類→刃ケリ、閉塞側面：外ケリ・内ケリ or ケリ、外 6 条沈線→閉塞面外ケリ Ha 類→刃ケリ、釉化、容量 5.8L
285	160	中甕	灰原	こ 5Bgr1-2 層・2-3 層・か内流土+さ 5Agr2 層・3 層・13 層	口 20.4、頸 15.6、胴 30.6、高 39.9、頸高 4.8	製	良好	内外灰	通常	29	-	外ケリ He 類→ケリ、内当て具 He 類→刃ケリ、胴内ケリ、ゆがみ大、容量 15.7L
286	115	平底甕	灰原	こ 6Bgr タテ 7 内 6 層+さ 6Agr1 層・2 層・14 層・19 層他	口 [24.1]、頸 [20]、高 (8.3)、頸高 3.1	転	(2 次被熱)	内灰、外暗灰	砂礫多	15	-	外ケリ He 類、内当て具 He 類→刃ケリ、ゆがみ大
287	116	大甕	灰原	さ 6Dgr13 層+さ 7Agr13 層・タテ 7 内 19 層+さ 6Bgr6 層	口 [38]、頸 [30.8]、高 (11.3)、頸高 4.6	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	6	-	外ケリ He 累、内当て具 (SD 類?) →刃ケリ、釉化
288	158	長胴釜	灰原	こ 5Bgr2-3 層・3 層・6 層・8 層+こ 5Cgr1 層・3 層+こ 5Dgr13 層	口 20.4、頸 18.5、胴 21.6、高 (27.5)、頸高 1.9	製	やや不良	内灰~白、外青灰~白	礫極多	8	-	外ケリ He 類、内当て具刃ケリ、内ケリ、釉化
289	154	長胴釜	灰原	こ 5Bgr2 層+こ 5Cgr3 層+さ 5Agr3 層・13 層+さ 5Dgr1-16 層・2 層・13 層・最上層+し 5Agr 前面土坑全 2 層+し 6Bgr2 層他	口 [21.8]、頸 [19.8]、胴 [22.2]、高 (17.9)、頸高 2.2	製	良好	内外灰白	通常	15	-	外ケリ He 類→胴外ケリ、内当て具 He 類→刃ケリ、ゆがみ大
290	128	小型瓶	灰原	こ 6Bgr1 層・2 層	口 [5.9]、高 (2.2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	釉化
291	123	小型瓶	灰原	こ 6Bgr6 層精査・20 層+さ 6Agr19 層他	底 4.5、頸 3.1、胴 8、高 (7.2)	製	堅緻	内灰白、外釉 = 灰 初-ブ	通常	底 36	右	回転糸切り、胴外ケリ、底外ハ記号「 」、釉化
292	124	小型瓶	灰原	こ 6Bgr +さ 6Dgr タテ 7 内 19 層	底 4.8、頸 [3.5]、胴 [9.4]、高 (6.9)	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	底 36	右?	回転糸切り、胴外 1 条沈線、カケ付着、釉化
293	125	小型瓶	灰原	さ 5Dgr2-3 層	底 [5]、高 (3.6)	転?	(2 次被熱)	内褐灰、外明青灰	通常	底 25	-	回転糸切り、カケ付着、釉化
294	126	小型壺	灰原	こ 5Cgr3 層・最上層	口 5、頸 3.8、高 (2.8)、頸高 2.2	製	良	内釉 = 灰初-ブ、外灰白	通常	28	-	釉化
295	127	小型壺	灰原	こ 5Dgr 最上層	口 [5.4]、頸 [4.3]、高 2.7、頸高 2	製	良	内釉 = 灰初-ブ、外灰白	通常	11	-	釉化
296	129	小型壺	灰原	さ 5Agr 最上層	口 [11.1]、頸 [9.5]、胴 [11.5]、高 (5.1)、頸高 1.4	製	良好	内明青灰、外青灰	通常	2	-	釉化
297	207	特殊蓋	灰原	さ 5Dgr2-3 層他	口径 2.5、高 (5.5)、口径 2.6	製	良好	内外灰白	通常	-	右	天外回転ケリ、天内ケリ
298	298	特殊蓋	灰原	2 区表土 + 3 区表土 (灰原含)	口 [23.3]、高 (3.1)	転	(2 次被熱)	内外灰	砂多	1	-	回転糸切り?、内ケリ?
299	299	円面硯	灰原外	4 区盛土流土	硯面内径 [10.1]、外径 [11.3]、高 (1.3)	製	堅緻	灰白	通常	-	-	ケリ有、釉化
300	300	平瓶 (把手)	灰原外	し 7gr 盛土	長 (13.4)、幅 1.8、厚 1.5	製	良好	青灰	通常	-	-	ケリ有
301	301	平瓶 (把手)	灰原	し 4Bgr1 層	長 (12.4)、幅 2.2、厚 1.4	製	堅緻	灰白	通常	-	-	ケリ有、釉化
302	302	獣足片	灰原	さ 5Agr6 層	高 (3.7)、幅 2.1、厚 2	製	堅緻	灰白	通常	-	-	カケ付着
303	324	焼台 B	6 窯床下 (13 窯)	6 窯 d 区床下 j 層	口 12.4、高 3.4	製	良	内灰白、外灰~灰白	砂多	35	-	土器 (坏片) 付着、カケ付着、釉化
304	326	焼台 B	13 窯舟底ビツト	13 窯 f 区床下 f 層	口 [12.1]、高 3.7	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	カケ付着、釉化
305	323	焼台 B	6 窯床下 (13 窯)	6 窯 g 区床下 s 層	口 7.2、高 3.2	製	良	内外灰	砂多	20	-	カケ付着

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2 (遺物編2)

掲載No.	実測No.	器種	地点	取上げ詳細	法量 (cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記 (重ね焼き・焼痕等)
306	334	焼台C	灰原 (13 窯)	こ 5Bgr タテアテ 内カツ	口 4.4、高 4.1	製	良	内灰、外明青灰	砂多	23	-	カツ附着、釉化
307	325	焼台C	13 窯舟底 ^レ ット	13 窯 c 区床下 c 層	口 [7.8]、高 6	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	土器片・カツ附着、釉化
308	335	焼台C	灰原 (13 窯)	こ 5Bgr13 層+さ 5Dgr4-5 層+さ 6Agr6 層他	口 8、高 7.4	製	良	内外灰白	通常	24	-	カツ附着
309	336	焼台C	灰原 (13 窯)	こ 5Cgr1-2 層+さ 5Dgr2-3 層・1-16 層+ さ 6Dgr13 層他	口 [8.8]、高 9.1	製	良	内外灰	通常	18	-	カツ附着、釉化
310	330	焼台A	6 窯埋土	6 窯 H 区 15' 層	口 11.4、底 9.3、高 3.1	製	良	内灰白、外灰~ 青灰	通常	31	右	回転糸切り
311	328	焼台A	13 窯前庭部 (6 窯混) + 灰原	さ 5Bgr 前庭部 18 層+ こ 5Bgr2 層他	口 14.1、底 7.4、高 2.3	製	良	内外灰白	通常	20	右	回転糸切り、ゆがみ大
312	83	焼台A	6 窯前庭部+埋 土+東側堆積	6 窯前庭部 (し 4Dgr)2 層+ G 区 15 層+東 h 区 7 層・22 層	口 [19.8]、底 [8.6]、高 3.9	製?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	右	カツ附着、専用焼台か
313	84	焼台A	灰原 (6 窯)	こ 5Bgr1 層 (カ内流土) +さ 5Dgr13 層・最上 層他	口 [18.7]、底 [8.3]、高 4.3	製?	(2 次被熱)	内外灰白	砂多	8	右	ゆがみ大、専用焼台か
314	321	焼台B	6 窯床面	6 窯 131	口 10.6、高 3.4	製	良	内灰、外青灰~ 灰	通常	36	右	体外回転カマ
315	329	焼台B	6 窯埋土+5 窯 土器集中+6 窯東側堆積	6 窯 G 区 9 層+5 窯土 器集中 B 区下底+SK04 全 2 層	口 13.6、高 3.5	製	良	内灰、外灰~明 青灰	通常	26	右	
316	332	焼台C	6 窯埋土	6 窯 H 区 8 層	口 6.7、高 3.3	製	良	内外灰白	通常	36	右	カツ附着、釉化
317	322	焼台D	6 窯床面	6 窯 40	口 13.7、高 7.5	製	良	内外明青灰	砂多	8	-	カツ附着、ゆがみ大
318	331	焼台D	6 窯埋土	6 窯 G 区 15 層	口 12.6、高 5.1	製	良	内灰、外灰~青 灰	通常	32	-	体外回転カマ
319	315	焼台A	5 窯床下	5 窯 g 区床下	口 9.7、高 3	製	良	内暗赤灰 2.5YR3/1、外 暗青灰	砂多	36	右	
320	316	焼台A	5 窯床下	5 窯 c・d 区床下 f 層	口 12.2、高 3.8	製	不良	内灰、外灰白~ 灰赤 2.5YR4/2	砂多	32	右	
321	317	焼台A	5 窯床下	5 窯 a・c・d 区床下 f 層 +床下 c 層	口 13.6、高 4.2	製	良	内灰白、外明青 灰	通常	28	-	
322	318	焼台A	5 窯床下	5 窯 d・c・e 区 f 層	口 14.9、高 5	製	不良	内外灰~灰白	砂多	22	-	
323	319	焼台A	5 窯埋土	5 窯 F 区 17-21 層	口 22.4、底 12.9、高 4.5	製	良	内灰白、外灰~ 灰白	砂多	28	右	回転糸切り、体外回転カマ
324	314	焼台A	5 窯床面	5 窯 27	口 9.5、底 6.3、高 2.4	製	良	内灰赤 2.5YR4/2、外 青灰	通常	35	右	回転糸切り
325	320	焼台B	5 窯埋土	5 窯 E 区 17-20 層+ G-H 区焼成部 6 層	口 10.4、底 10、高 3.2	製	良	内外灰~灰赤 2.5YR4/2	砂多	21	右	底外穿孔 4
326	333	焼台B	灰原 (5 窯)	こ 5Bgr2 層	口 6.6、底 5.5、高 3.3	製	良	内外灰	砂多	26	右	回転糸切り
327	313	焼台A	5 窯床面	5 窯 31	口 8.9、高 3.1	製	良	内外灰~明青灰	砂多	34	-	
328	327	焼台D	5 窯土器集中+ 灰原	5 窯土器集中 97 + こ 5Agr8 層+こ 5Bgr2 層	口 [12.6]、高 4.8	製	良	内外灰白	通常	14	-	カツ附着、釉化
329	309	土師 盤 A	SJ02	SJ2 横カツ	口 [15.2]、底 [13.1]、 高 2.1	製	良	内外淡黄 2.5Y8/4	通常	2	-	
330	310	土師 釜	SJ02	SJ2-13	高 (1.9)	製	良	内外黄橙 10YR8/6	通常	-	-	
331	337	土師 釜	SJ02	SJ2-3	高 (3.1)	製	良好	内外黄橙 7.5YR8/8 ~ 8/6	砂多	-	-	内カキメ
332	308	土師 赤彩 埴 A	SJ03	SJ3F 区	底 [6.1]、高 (1.3)	製	良好	内外黄橙 7.5YR8/8	通常	-	右	体外回転カマ、内カキ
333	312	土師 短胴 釜	SJ03	SJ3-16	底 8.9、高 (2.6)	製	やや良	内外黄橙 7.5YR8/8 ~ 8/6	砂多	-	右	回転糸切り、体外回転カマ、 体内カマ
334	311	土師 鍋	SJ03	SJ3A	口径 [30]、高 (5.3)	製	良	内外黄橙 10YR8/6	通常	2	-	体外カマ
335	340	土師 円盤	SJ03	SJ3B 区上層	長 (5.1)、幅 (2.8)、厚 0.9	製	良	内外黄橙 7.5YR8/8	通常	-	-	片側穿孔 1、周縁は孔以外 破面
336	338	土師 釜	SJ04	SJ4G 区	高 (1.7)	製	やや良	内外淡黄 2.5Y8/4	通常	-	-	内カキメ
337	339	土師 釜	SJ04	SJ4H 区	高 (2.2)	製	良好	内外黄橙 10YR8/6	砂多	-	-	内カキメ?
338	166	坏 H	SK07	SK07D 区中層・下層	口 [14]、底 [8.6]、受部 [16.2]、高 (3.9)	製	良好	内外灰	通常	-	左	底外回転カマ、混入品 (6C 後半)

付章 その他の遺構

はじめに

付章として、窯跡以外に検出したその他の遺構を報告する。なお、SK01 及び SK04・05（6号窯東側堆積）は窯跡に付随するものとして扱い、SK02・03は遺物編1付章にて報告済みである。本章では、SJ01～04（土師器焼成坑）、SK07（大型土坑）、SK06・08（焼土坑）を報告する。

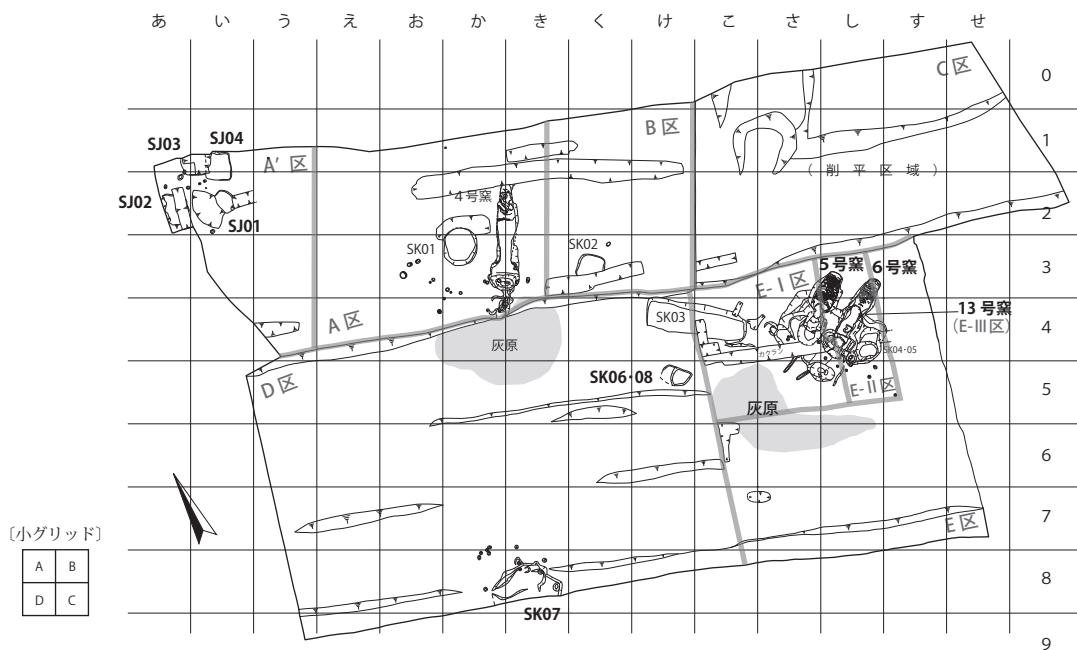
(1) SJ01～04〔土師器焼成坑〕

今調査区の北西端（A'区）で検出した4基の土師器焼成坑である。いずれも攪乱が激しいため、残存状況は極めて悪く遺物の出土も少ない。なお遺構の提示方法は（小松市教委2002）を参照し、遺構平面図は奥壁側と判断される斜面上方を上にして示している。

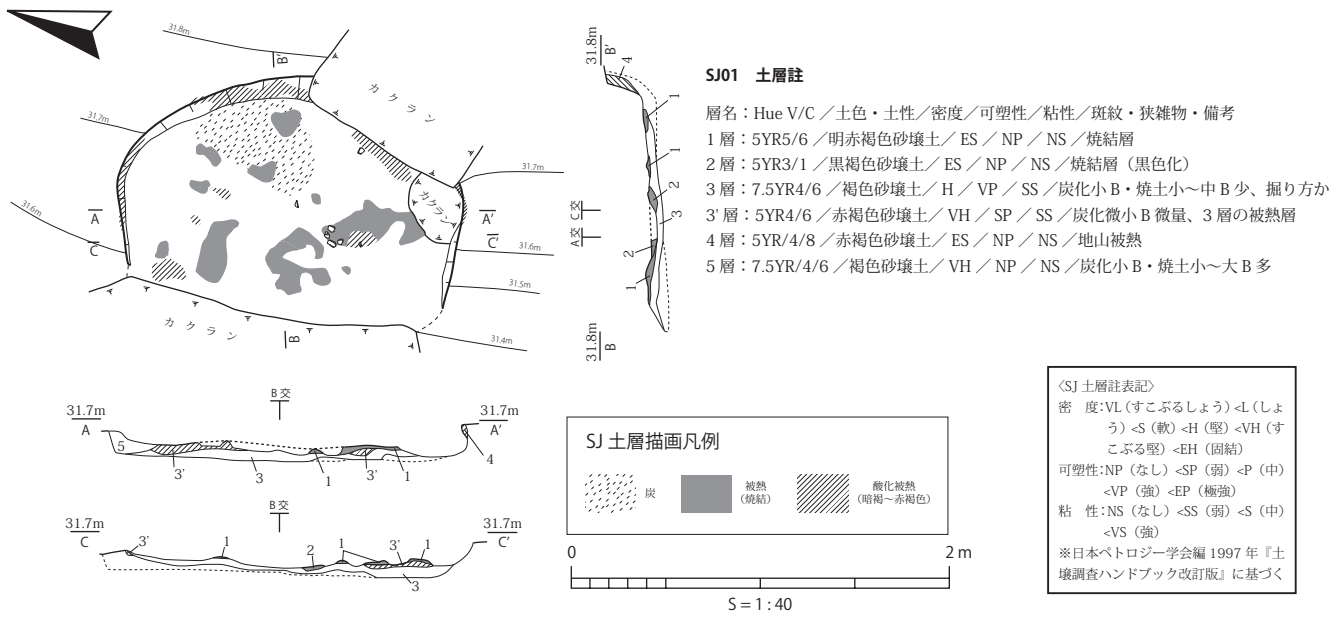
SJ01は標高31.75m付近に奥壁が設定されており、横長型隅丸方形の平面形を呈すると推定される。縦軸残存1.30m、横軸推定1.81m、奥壁深17.5cm程を測る。攪乱によって床面が所々削られているが、床の焼結面・被熱面、床下貼床、地山壁面被熱が部分的に確認でき、中央から奥壁側の床上面には炭化物がやや多めに混じる。出土遺物は土師器煮炊具片がわずかに出土しているが、細片ばかりで器種器形の詳しく分かるものはない。

SJ02は攪乱によって奥壁と前壁が大きく削られているため詳細が不明だが、標高30.9～31m付近に奥壁が設定されているものと推測される。平面形は残存する側壁から想定すると平面横長型になると思われる。縦軸残存0.85m、横軸残存2.46m、左側壁深12.8cm程を測る。中央付近では比較的床面の残存が良好で、被熱面が一体に広がって一部焼結し、左側壁も被熱する。また炭化物がブロック状に分布する部分もある。出土遺物は土師器片と須恵器片（食膳具口縁部片2点、甕胴部片2点）が出土している。329は盤Aで、厚手の底部から体部が丸く立ち上がる。おそらく赤彩が剥落したものである。330と331は釜の口縁部で、330は端部をやや斜め上へ、331はわずかに上へ摘み上げている。

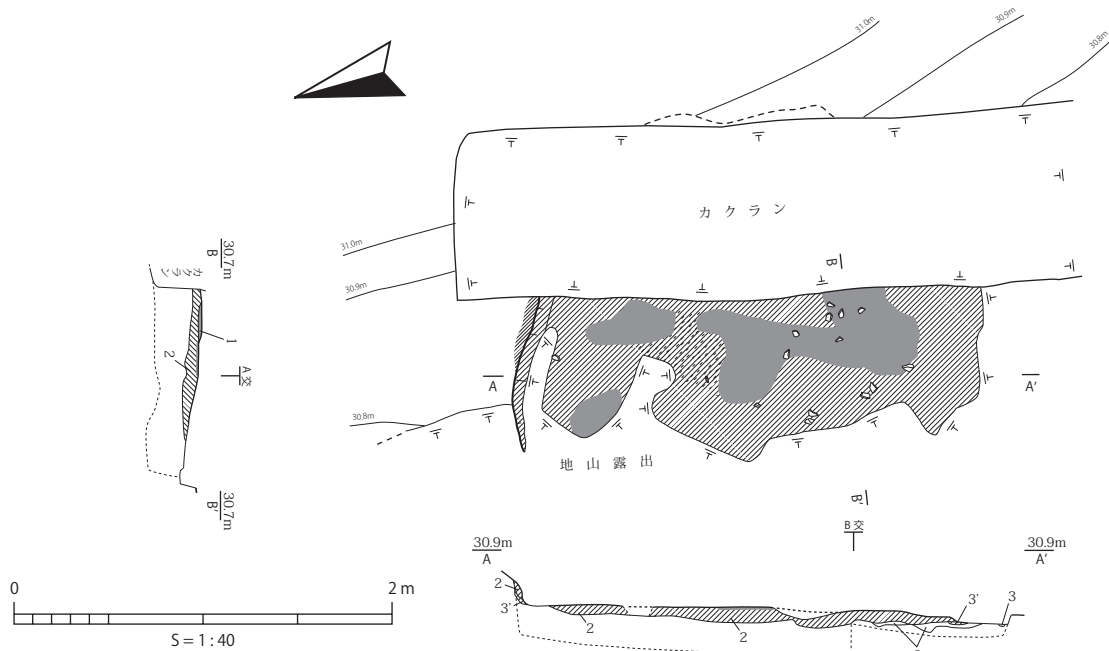
SJ03と**SJ04**は切り合って構築されているが、切り合い部分が攪乱によって消失しているため、切り合い関係は不明である。SJ03は標高31.84～32.05m付近に奥壁が設定され、縦軸推定2m、横



第33図 3次調査全体平面概略図（1:600）



第34図 SJ01 平面図・断面図



SJ02 土層註

層名: Hue V/C / 土色・土性 / 密度 / 可塑性 / 粘性 / 斑紋・狭雑物・備考

1層: 2.5YR4/6+3/6 / 赤褐色 + 暗赤褐色砂壤土 / VH / SP / NS / 焼結層

2層: 2.5YR3/6 / 暗赤褐色砂壤土 / VL / EP / S / 地山被熱

3層: 7.5YR4/4 / 褐色砂壤土 / VL / EP / S / 炭化小B・焼土小B多、掘り方か

3'層: 5YR4/8 / 赤褐色砂壤土 / VL / EP / S / 炭化小B少、3層被熱層

第35図 SJ02 平面図・断面図



第36図 SJ02 遺物実測図

軸 2.09m、奥壁深 24cm 程を測り、平面形は正方形状を呈すると推測される。SJ04 は残存が悪く、前壁側で横軸残存 1.32m、右側壁深 8.4cm 程を測り、残存する側壁から想定すると平面方形状と思われる。SJ03 は奥壁側を中心に焼結面が広がり、奥壁面と側壁面にも被熱がみられる。SJ04 は前壁側の一部で焼結面が確認でき、わずかに右側壁面にも被熱が確認できる。両遺構からの出土遺物は SJ01・02 に比べて多く、土師器煮炊具片が主体である。332 は赤彩埴 A 底部、333 は小釜底部で、体部下位にヘラケズリ、内面にカキメを施し、糸切り痕が残る。334 は鍋の口縁部、335 は焼成道具と思われる土師質円盤片である。336 と 337 は釜の口縁部で、336 は端部外面ナデ、337 は上方へ摘み上げている。

以上、土師器焼成坑 4 基は近接して検出され、連続構築されたと考えられる。所属時期は出土遺物から概ね IV₂ 期の範疇で捉えられる。近隣の二ツ梨一貫山窯跡 F 地区で総数 28 基の土師器焼成坑が調査されているが、IV₁～V₂ 期までの操業期間の中で IV₂ 期は最も焼成坑が増加し、同じ場所で連続構築されて群集する傾向にある（小松市教委 2002）。

(2) SK07〔大型土坑〕

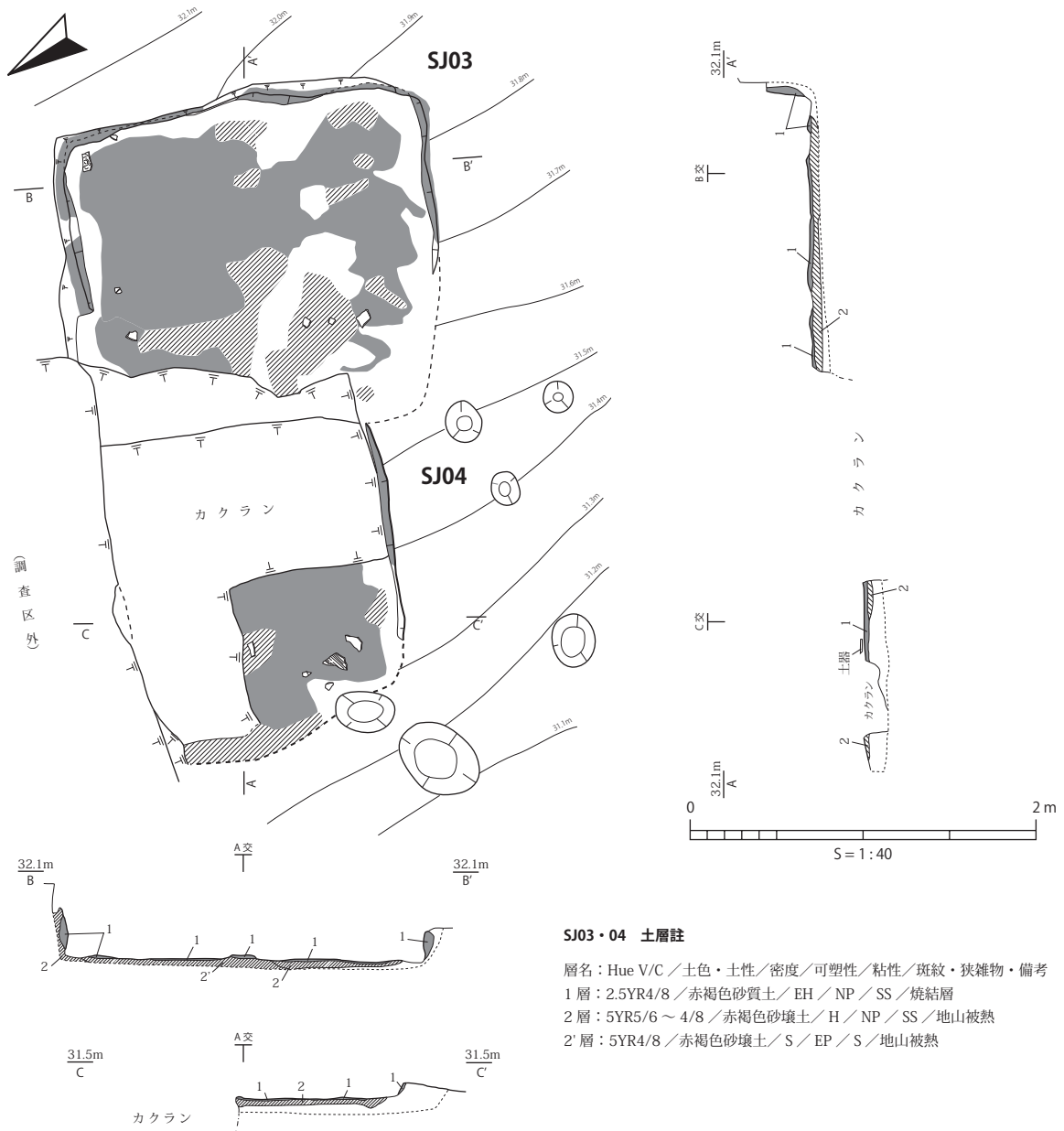
調査区 D 区の斜面最下方で検出された大型土坑で、北辺で推定 3.45m、東辺で 3.33m 程を測る平面正方形状のように見えるが、やや歪で遺構の半分程が調査区外にあるため、不明確である。土層断面からは複数の掘削が重なっているようにも見える。遺構北辺には被熱層があり、ここを火処と想定すれば、土坑が竪穴状の工房跡としての機能を担っていたようにも思えるが、被熱層自体も後世の掘削によって切られており、地山被熱や床硬化面等も検出できていないため、確定できない。出土遺物は多いが、やや時期は混在している。出土層位から整理すると、遺構に伴う遺物の可能性があるのは下層の 13 層を中心に出土した VI₃ 古期段階のものとして推測される。既に 5 号窯の節で示した鉢 B や瓶 D がそれに該当する。ほかに 4 号窯由来の食膳具（ヘラケズリをもつ坏 B 蓋や丸味のある宝珠形つまみ等）・貯蔵具（壺 A・甕等）がまとまって出土しているが、上層の 1 層からの出土が大半を占めるため、斜面上方からの流れ込みと考えられる。

なお 338 は中層～下層に混入した坏 H で、望月編年（望月精司 2009 「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号）の古墳第 4 様式 III 期（陶邑編年 MT85 型式・二ツ梨東山 1 号窯段階）に比定される。ほかにも、6 号窯埋土や灰原外区域で 6 世紀代の坏 H 片 3 点、長脚の高坏脚部片 3 点（同一？）、提瓶片 1 点を確認している。

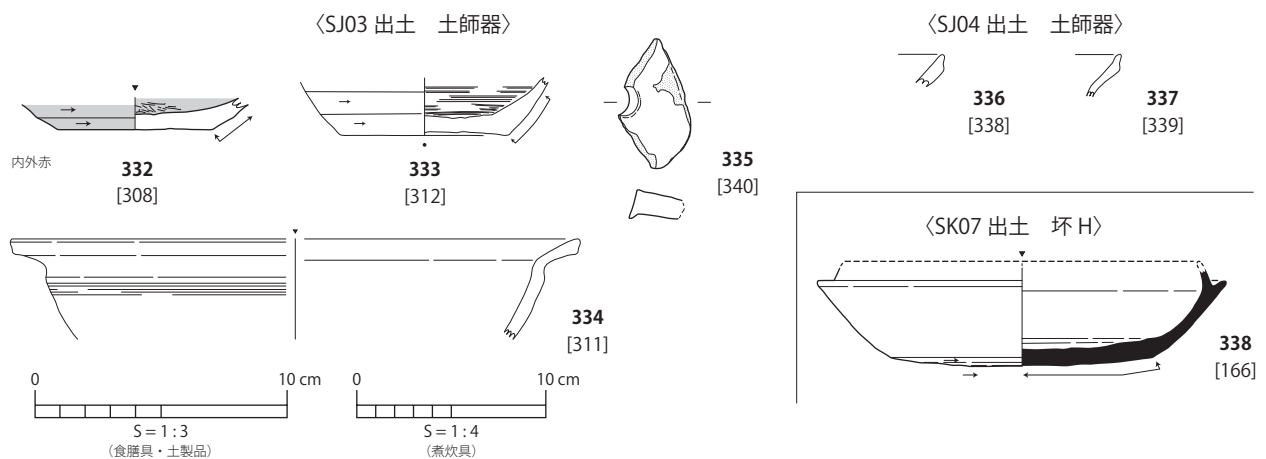
当窯跡群には 11・12 号窯があり、灰原試掘資料から第 4 様式 III 期（MT15 型式後半～TK10 型式前半）には操業が始まり（望月前掲書）、6 世紀末頃まで生産が続いたことが分かっている（小松市教委 2005）。また周辺には二ツ梨豆岡山窯や二ツ梨殿様池窯といった 6 世紀代の窯跡が近接しており、外部からの混入も想定される。

(3) SK06・08〔焼土坑〕

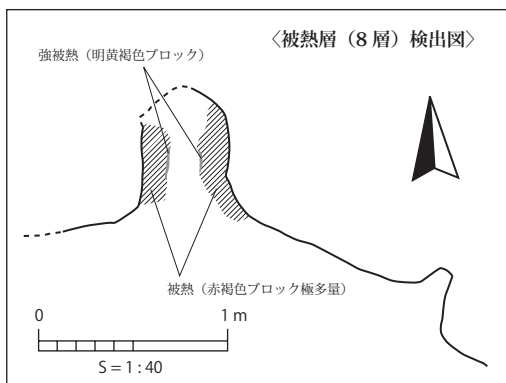
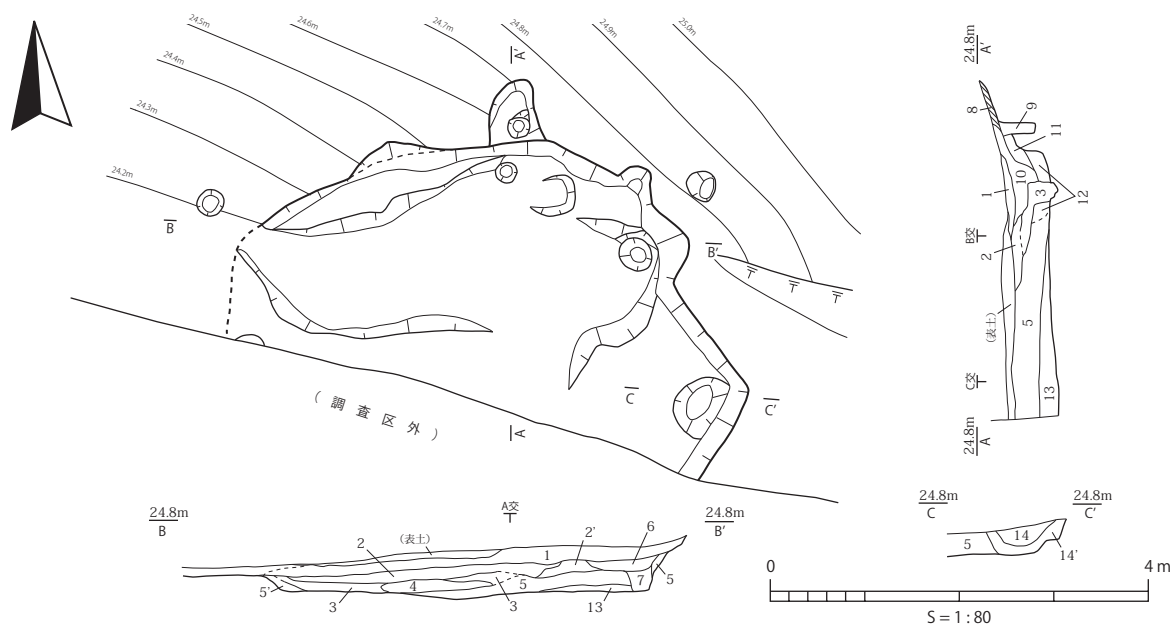
調査区 D 区の標高 28.9～29.2m 付近で検出された 2 基の土坑である。SK06 は等高線に沿って築かれており、縦軸 1.41m、横軸 1.35m 程で、土師器焼成坑のような平面台形状を呈するが、床に被熱痕跡はない。覆土中に多量の炭化物を含む層がある。SK08 は斜面上方の地山壁面が焼結しており、その壁が SK06 につながるようにして接している。攪乱により斜面下方の壁面や SK06 との切り合い部分は削られていて不明瞭であるが、SK06 同様下層に炭化物層があり、一体の遺構である可能性もある。両土坑ともに出土遺物は確認できず、時期や性格は不明である。なお本調査区南側に近接する二ツ梨グミノキバラ遺跡で、坑底は焼けず壁面のみ焼けた同様の焼土坑が確認されており、製炭土坑の可能性が指摘されている（石川県埋文 2007 『小松市二ツ梨グミノキバラ遺跡』）。



第37図 SJ03・04 平面図・断面図



第38図 SJ03・SJ04・SK07 遺物実測図

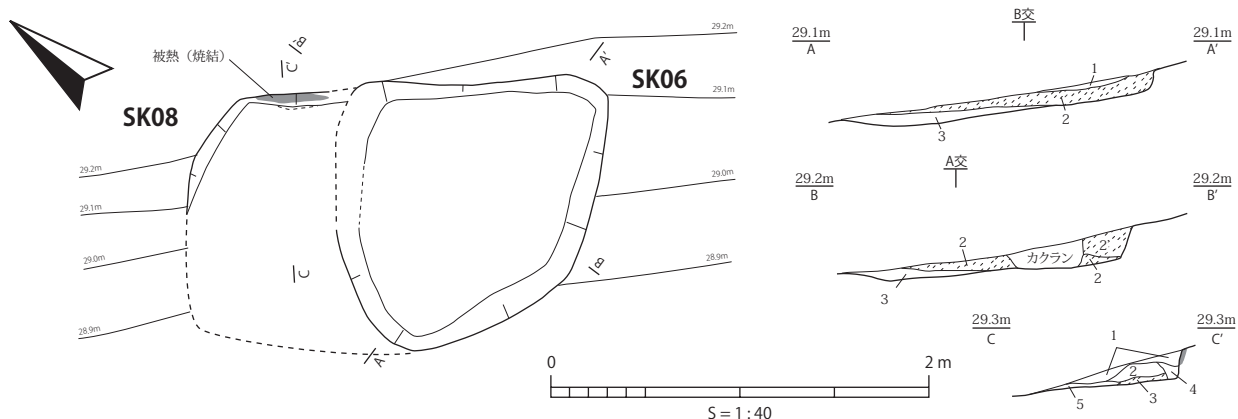


SK07 土層註

層名：HueV/C / 土色 / 備考

- 1層：7.5YR4/4 / 褐色土 / 砂質、焼土小B少、土器多量、流土層
- 2層：7.5YR3/3 ~ 4/4 / (暗) 褐色土 / 粘性あり、炭化小B・焼土小中B少、土器多量
- 2'層：7.5YR4/4 / 褐色土 / 還元微小B極少
- 3層：7.5YR3/3 / 暗褐色土 / 粘性強、炭化小中B・焼土中B多
- 4層：7.5YR2/2 / 黒褐色土 / 粘性強、炭化小B・焼土小中B多、土器含有
- 5層：7.5YR4/4 ~ 4/6 / 褐色土 / 粘性強、炭化小中B・焼土小~大B少
- 5'層：7.5YR4/4 / 褐色土 / 粘性強、炭化小B・焼土小B微量
- 6層：7.5YR3/3 ~ 4/4 / (暗) 褐色土 / 2層類似、炭化小~大B多、焼土小B少
- 7層：7.5YR4/4 / 褐色土 / しまりなし、焼土小B多
- 8層：5YR4/8 + 7.5YR4/4 / 赤褐色BL + 褐色土 (8:2の割合) / 被熱層
- 9層：7.5YR4/4 / 褐色土 / しまり弱、炭化小~大B多
- 10層：7.5YR3/3 ~ 4/4 / (暗) 褐色土 / 2層類似、炭化小B少、焼土小~大B多
- 11層：7.5YR5/6 ~ 4/6 / (明) 褐色土 / しまりあり、炭化小B微量
- 12層：7.5YR5/6 + 10YR5/6 / 明褐色土 + 黄褐色土 / 砂質、しまりあり、焼土中B微量
- 13層：7.5YR5/6 ~ 4/6 / (明) 褐色土 / しまりなし
- 14層：6層と同質だが、炭化小中塊少、焼土小中塊多
- 14'層：6層と同質だが、炭化小塊少、焼土微量

第39図 SK07平面図・断面図



SK06 土層註 (A-A'・B-B')

層名：HueV/C / 土色 / 備考

- 1層：10YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 (黄褐色砂質土混在) / 流土層
- 2層：10YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 / 粘性あり、炭化材・炭化塊多、焼土塊少
- 3層：10YR4/4 + 10YR5/3 / 褐色土 (にぶい褐色土混在) / 炭化塊少

SK08 土層註 (C-C')

- 1層：10YR4/4 ~ 4/6 / 褐色土 / 炭化大塊多
- 2層：7.5YR4/4 / 褐色土 / やや粘性強め、炭化小B多、焼土小B少
- 3層：7.5YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 / 炭化大B・焼土大B多
- 4層：7.5YR4/4 / 褐色土 / 焼土小中B少
- 5層：7.5YR4/4 / 褐色土 / 粘性強

第40図 SK06・08平面図・断面図

第Ⅲ章 まとめ

二ツ梨豆岡向山窯跡群の窯場動向

これまでに当窯跡群では、改修や改造をされたものも含めて計 15 基の窯跡が検出された。最後に操業時期から 4 期に区分し、窯場動向をまとめたい（第 12 表、第 41 図）。なおこれまでの調査は（小松市教委 1993・2005・2015・2017）を参照し、窯体構造の変遷は（望月 2010）にしたがった。

【1期】 当窯跡群の操業開始段階にあたる。東側斜面の灰原試掘調査で 6 世紀代の須恵器とともに埴輪が検出され、県内 2 例目の埴輪併焼窯の存在が確認された。窯体未調査ではあるが、陥没痕から 11・12 号窯が設定されている。時期は古墳第 4 様式 II 期（陶邑編年 MT15 型式後半～TK10 型式前半）を上限として（望月 2009）、Ⅲ期頃（MT85～TK43 型式）まで継続すると考えられるが、新相資料については十分な検討が行われていない。近隣には同じく埴輪併焼窯の二ツ梨殿様池窯や、同時期に操業される二ツ梨豆岡山窯、二ツ梨東山窯が存在する。

【2期】 7 世紀代に入ると北方の戸津・林地区へと窯場が移るため、空白期間となる。当期はその後の生産再開～盛行期にあたる。まず北側斜面で 8-I 号窯（1 次床＝古代Ⅱ₃古期～）の操業が始まり、8-II 号窯（Ⅱ₃期）へと造り替えられ、同じ頃に西側斜面で 2 号窯の生産が開始する。そして中断をはさんで南東側斜面の 9・10 号窯（Ⅱ₃新期～Ⅲ古期）へと移る。窯の構造は焼成部が 20 度前後となる緩傾斜の直立煙道型で、床や壁の修復が少なく短期間で操業を終えることが特徴である。概ね 8 世紀前葉に相当する時期である。この中で 8-II 号窯と 2 号窯で置台転用された鴟尾が確認されているが、当窯跡群で生産されたものではなく搬入品である。その供給元は未解明である。また、南東側斜面で同時期頃の土師器がまとめて出土しており、生産遺構の存在を窺わせる。

【3期】 8 世紀以降は二ツ梨オオダニ地区・戸津オオダニ地区に窯場が集約していく。当窯跡群はその 2 つの支谷地区の分岐点付近に位置し、周辺一帯に次々と築窯される。当期は南側斜面に窯場が移り、4-I 号窯→4-II 号窯（Ⅳ₂新期～Ⅴ₁期）と継続して生産が行われて、斜面南東側の 13 号窯（Ⅴ₂期）へと移る（8 世紀末～9 世紀中葉頃）。4-I・4-II 号窯で焼成部床傾斜が 30 度前後と急になり、13 号窯になると焼成部の絞込みが明瞭となる。製品は白色系堅緻焼成の優品率が高まり、13 号窯では鉢 E や平瓶、円面硯等が生産される。このほか、斜面北西側では窯操業の時期よりやや古い時期の土師器焼成坑 4 基（SJ01～04）が確認されている。

【4期】 9 世紀中葉～後葉の時期は、やや停滞していた南加賀窯跡群の生産が拡大し再興期を迎える。当期はその流れから須恵器生産の終焉に向けて、製品は食膳具が碗皿主体となる一方で、明らかに品質は低下する。窯構造は量産や低コストを意識したつくりとなる。6 号窯から 5 号窯、1-A 号窯とⅥ₃期でも 10 世紀前葉の古い段階に操業され、須恵器生産の最終段階にあたるⅥ₃新期の 1-B 号窯、7 号窯で当窯跡群の生産活動は停止する。1-A 号窯と 7 号窯は須恵器以外に瓦や風字硯等の特殊品生産を行っている。

参考文献

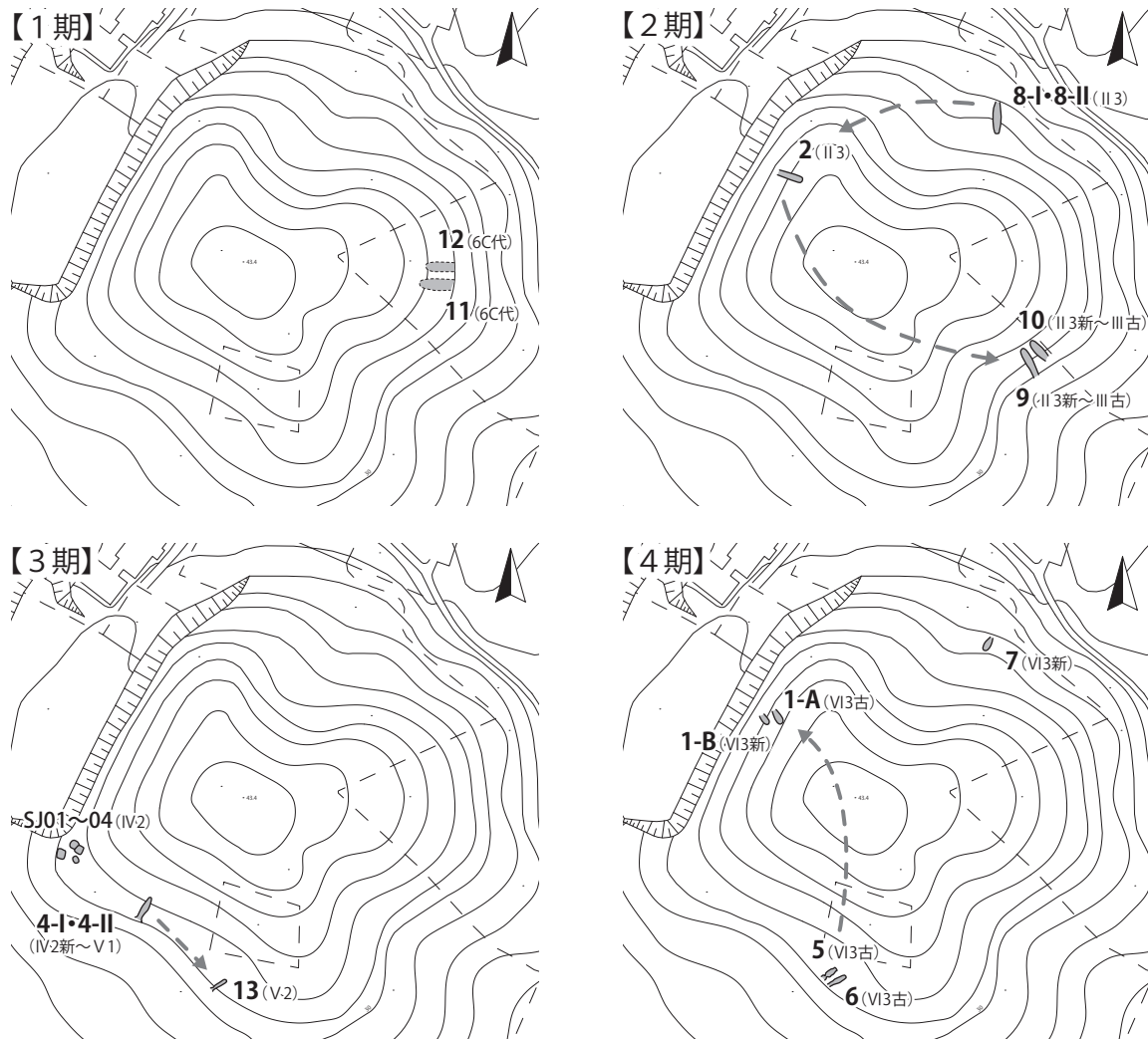
望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』2 号
小松市教育委員会 1993 『二ツ梨豆岡向山古窯跡』
小松市教育委員会 2005 『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』
望月精司 2009 「南加賀窯跡群における在り窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号

望月精司 2010 「北陸」『古代窯業の基礎研究』窯跡研究会
小松市教育委員会 2015 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』
小松市教育委員会 2017 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』

第12表 ニツ梨豆岡向山窯跡群 窯跡一覧表

窯跡	窯構造(焚口・燃烧部・排煙口)	操業時期	実効長 m	最大幅 m	焼成部 床傾斜	特記 (窯体補足/出土特殊品等)
1-A (旧1)	下降傾斜燃烧部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 4.10	1.60	50	瓦陶兼業窯/瓦、風字硯、 コップ形、管状土錘、土師 質円盤
1-B (旧3)	下降傾斜燃烧部構造・奥部開口タイプ	VI 3 新 (10C 前葉)	3.62	0.98	58	コップ形、特殊蓋、管状土 錘
2	一般構造広短型・直立煙道タイプ	II 3(8C1/4)	7.26	1.62	19	鉢、鴟尾(置台転用)
4-I	一般構造型	IV 2 新~V 1 (8C 末~9C 前葉)	残 5.51	1.20	28	
4-II	広口燃烧部構造	IV 2 新~V 1 (8C 末~9C 前葉)	残 6.31	1.54	30	4-I 号窯改修窯
5	下降傾斜燃烧部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 4.37	1.75	42	コップ形
6	下降傾斜燃烧部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 5.24	1.35	39	13 号窯改造窯/管状土錘
7	下降傾斜燃烧部構造・奥部開口タイプ	VI 3 新 (10C 前葉)	残 4.80	1.45	50	瓦陶兼業窯/瓦、風字硯、 コップ形、管状土錘、特殊 蓋、特殊陶製品
8-I	-	II 3(8C1/4)	残 6.44	1.80	18	1 次床 = II 3 古期
8-II	一般構造通常型・直立煙道タイプ	II 3(8C1/4)	8.56	1.78	18	8-I 号窯改修窯/移動式カ マド、鴟尾(置台転用)
9	一般構造通常型・直立煙道タイプ	II 3 新~III 古 (8C 前葉)	7.80	1.84	20	
10	直立煙道タイプ	II 3 新~III 古 (8C 前葉)	残 6.02	2.00	18	
11	-	6C 代 (MT15~TK43)	-	-	-	埴輪併焼窯 *未調査
12	-	6C 代 (MT15~TK43)	-	-	-	埴輪併焼窯 *未調査
13	一般構造型	V 2 期 (9C 前葉~中葉)	-	1.52	-	円面硯、特殊蓋、平瓶

(実効長：一部欠損の場合は残存水平長)



第41図 ニツ梨豆岡向山窯跡群 窯場動向図 (S=1/2000)



13号窯関連遺物

撮影：田邊朋宏



6号窯関連遺物

撮影：田邊朋宏



5号窯関連遺物

撮影：田邊朋宏



13号窯関連焼台



6号窯関連焼台



5号窯関連焼台



管状土錘



6号窯・灰原出土遺物



灰原出土遺物



小型貯蔵具・特殊品



SJ01～04 全景



SJ01 全景



SJ01 床面断ち割り (上段 A-A'・C-C' / 下段 B-B')



SJ02 全景



SJ02 床面断ち割り (A-A')



SJ03 全景



SJ04 全景



SJ03・04 床面断ち割り



SK07 全景



SK07 セクション (A-A' 被熱層付近)



SK06・08 全景



SK06 セクション (A-A')



SK08 被熱壁

報告書抄録

ふりがな	こまつしなしいせきはくつちょうさほうこくしょ 14
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡群
巻次	
編・著者名	横幕 真、宮田 明
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒923-0075 石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47 - 5713
発行年月日	西暦 2019 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふたつなし 二ツ梨 まめおかむかいやま 豆岡向山	いしかわけん こまつし 石川県小松市 ふたつなしまち 二ツ梨町	17203	03014	36° 19' 53"	136° 25' 48"	2005. 7.21 ~ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ~ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ~ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ~ 2009.12.11	600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯跡	平安	須恵器窯跡 3、土師器焼成坑 4、土坑 3、灰原	須恵器、土師器、陶錘、陶硯	遺物編 2
要約	5・6・13号窯調査の遺物編。付章として、その他の遺構（SJ01～04、SK06～08）の報告を掲載。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

平成 31 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713

印刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
